



F13-158-3ウ



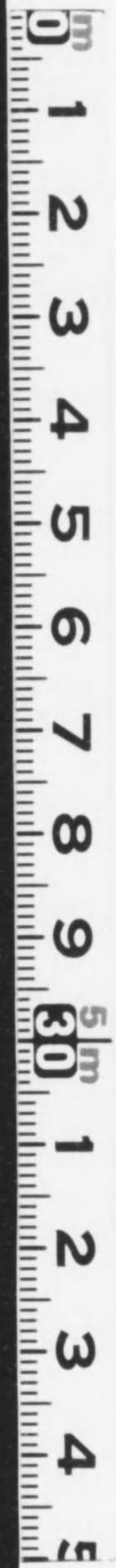
1200500762075

F13
158
)

著 卯 田 犬



刊 堂 梧 青



始



F13
I.58
3



およそ
 及同者
 久隅カ
 行れ
 困
 中
 糧
 持
 つて
 出来
 秋
 山
 東
 海
 まで
 世
 を
 渡
 る
 に
 是
 珠
 の
 外
 婦
 かん



刊 堂 梧 青

910
232

目次

米	五
瘤	四
橋の上	九
山川中尉	一四
竹馬の友	三五
一老人	三五
競馬	一四
おびとき	一四
錦紗	一六

米

荒蕪地 一八六

沼畔小話集 : 二一〇

伊田見男爵 二一〇

虚脱人 二一七

傳統拒否者 二二〇

自然人 二二三

神様 二二六

米泥のM公 二二九

コソ泥のR 二三二

札つき者A 二三五

浩さん 二三八

米



三間竿の重い方の鋤簾を持つて行かなければならぬ破目になつて、勝は擔いで見たが、よろよろとよろめいた。小さい右肩いつばいに太い竿がどつしりと喰ひこんで来て、肩胛骨のあたりがぼき／＼と鳴るやうな氣がする。ばかりでなく二足三足とあるき出すと、鋤簾の先端が左右にかぶりを振つて、それにつれて竹竿もこり／＼と錐をもむやうに肩の皮膚をこすなのだ。勝は顔中をしかめながら龜の子のやうに首をすくめて、腰で歩いた。

「愚圖々々してゐるから、そんなのに當るんだで。」

あとから軒先を出た母親のおせきが見兼ねるやうに言つて、そのよた／＼した勝の恰好に思はず微笑した。

軽い方の鋤簾は、股引を穿いたり手甲をつけたり、それからまた小魚を入れるほど、箆を探しあぐねてゐるうち、兄の由次に逸早く持つて行かれてしまつたのである。勝からいへば自分に宛がはれたその股引と手甲が、殊に股引が——それは昨秋東京の工場へ行つた長兄がそれまで使用してゐたもので、全くだぶくで脚に合はず、上へ引張つてみたり下の方で折り曲げてみたり、漸くのことと穿いたといふやうな理由で、それで由次に遅れを取つてしまつたので、

「由兄の野郎するいや、あとで見るツちだから。」勝はそんなことを三度も由次の後姿に向つて浴びせかけのどつたが、こんどは母親に突掛つた。

「俺に股引こしらへてくれえからだ。こんなひとのものなんだ……」

「ひとのもので自分のものでも、この野郎、それ本當の木綿ものなんだ。けふ日、スフの股引なんだ、汝らに穿かせたら半日で裂らしちまわ。」

おせきは籠の中へ大きな辨當の包みや、萬一の用意に四人分の糞をつめこんで、これまたよろめくやうに背負ひ、そして足早やに勝に追付いて一言の下にたしなめると、やがてすたくと追ひ抜き、道の先の方に見える由次や夫に遅れまいと足を早めた。

勝は齒ぎしりして腰を落し、兩の手で竹竿を支へ上げるやうにして母に抜かれまいとするが、

さうすると鋤簾の奴よけいにぶら／＼とかぶりを振つて、ともすれば、小さい勝の身體を道傍へ投げとばしさうにする。

天秤籠にどさんと堆肥を盛り上げ、その上へ萬翁や泥搔きなどを突差して擔いた親父の浩平は、そのときすでに部落を横へ出抜けて、田圃へ下りる坂道にかゝつてゐた。雨上りの、ともすればつるりこんと滑りがちなじめついた土の上を、爪先で全身の勢ひを停めながら、彼はそろ／＼と降りてゆく。そのあとから由次が身輕るに小さい方の鋤簾をかついで、口笛を吹き吹きつゞいた。由次は十六だが、昨年の稲刈り時分から眼に見えて背丈が伸び、いまでは親父の肩の邊まで届きさうになつてゐた。

「由、その泥搔き、お前持て。駄目だ、邪魔になつて、歩きづらくて。」

親父が息を止めて言ふと、彼はひよいと横合からそれを引つたくるなり、左の肩へ鐵砲のやうにかついで、そしてとつと坂を駆け下りた。

一日も早く植ゑてしまはなければならぬ八反歩ばかりの田を控へて、赤ん坊の手さへ借りた今明日、尋常六年生のおさよは無論のこと、今年入學したばかりのおちえまで學校を休ませ、そして留守居させての、文字どほり一家總動員の田植作業であつた。早魃を懸念された梅雨期

の終りの、二日間打つゞけの豪雨のおかげで、完全に干上らうとしてゐた沼岸の堀割沿ひの田が、どくどくと雨水を吸ひ、軟く溶けて來てゐたのだ。

明け放れの早い六月の空には何時か太陽が昇つて、沼向ふの平野は一際明るく黄金色に輝き出してゐた。風もなく、紺碧の沼は崇嚴なほど静かだつた。やがて浩平一家のものは、よちよちと蟻が長い昆蟲を運ぶやうな恰好をして、勝が、寧ろ鋤簾そのものに曳きすられるやうにしてやつてくるのを殿に、丘を下りて堀割に沿ひ、自分の作り田へ着いた。そのとき黄金の光りは此方——丘の裾の長く伸びた耕地にまで輝き渡つて來た。畑地の方の薄い靄を含んだ水のやうな空には、もう雲雀が高く揚つて、今日一日の歡喜を前奏しつゝあつた。

荷を下ろすより早く彼等は各自仕事にとりかゝつた。おせきは萬翁を手にして代田しろたの切りかへしてあつた。由次は堀割へ自分の持つて來た長柄の鋤簾を投げ込んで、そして泥上げである。上流の廣い耕地から何時とはなしに押し流されて來て沈澱する此處の泥上は、自然に多くの肥料分を含み、これさへ上げれば大してその部分だけは施肥する必要がなかつたばかりか、その上、水田そのものが年一年と高くなつて、いくら秋の水害を脱れるなしになつたのである。

「勝、早く持つて來う、この野郎。」と浩平は待ちきれなくなつてどなつた。「なにを、それ

位のもの、愚圖つたれてゐやがるんだ。」

勝はひどく汗をたらし息を弾ませながら、やつと父親の立つてゐる足許に鋤簾の先端を突き出すと、ぱたりとそこへ竹竿を投げ出した。

「由兄の野郎、ずるいや。」と彼は泣きさうに言つた。

「何だ、俺がどうした。この野郎」遠くから由次が應酬した。「俺ら、自分で自分のを持つて來たんだねえか。」

「だつて、ひでえやい。いゝから、あとで見るッちだから……」

「そんなことで喧嘩するんで無え、この野郎等。——勝は早く泥を搔け。」

浩平は一喝して、大きな鋤簾を水音高く堀割へ投げこんだ。

勝は帽子を被り直し、それから畦に投げ出されてゐた泥搔きを取つて、母親が切りかへしてゐる田の一方へ父と兄貴が浚ひ上げる例の泥土を、その中ほどまで搔いて來るといふ單純ではあるが子供の身には稍々骨の折れる仕事にとりかゝつた。田へ入るや否や、氣持の納らぬ彼は、丁字形の泥搔きで反對にいきなり由次の方へ泥をひつかけた。

「あれ、この野郎。」由次も片脚を上げて足許の泥を跳ねとばしたが、それは勝の方へは行か

ず、遠く母親の方へ飛んだ。

「こら、由、何すんだ、馬鹿。」

叱られた兄貴を横眼で見、勝は口をひん曲げ、眼玉を引つくり返してにゆつとやつた。いくらかそれでこぢれた気分が直つて、せつせと此度は、本氣に泥をかきはじめた。

それにしても次から次へと上げられる泥土を一人で掻くのは容易なことではなかつた。勝は一時間もしないうちに大汗になつてしまつた。

「あ、メソン畜生——こら、こん畜生。」

淡緑色の小鰻が泥の中を逃げまどつてゐる。叫びを上げた彼は泥かきを放り出し、両手をもつて押へようと駆け寄つた。

「おつ母さん、早く、容れもの——俺のぼて箕——ぼて箕、早く。」

「どこだか、ぼて箕。——馬鹿野郎、そんなもの捕つたつて、旨くもありもしねえ。」

おせきは言つたまゝ、しかし萬翁を振りつゞけてゐた。

「捕へたよ、おつ母さん、早く……」

「馬鹿だな。そんなことしてゐねえで、この野郎、早くかかねえと泥たまつて仕様があつか、

こらつ、勝。」

父親にどなられても勝は、片手にしつかと小鰻をぶら下げたまゝ畦へ上つて、そして自分が携へて来て、その邊へ置いた筈のぼて箕を探しにかゝつた。

陽がかん／＼と照り出して来た。もう子供の勝手な行動などに構つてゐられなかつた。浩平は満身の力を鋤簾にこめて泥をすくひ上げ、おせきは男のやうに大きく脚を踏ん張つて代田を切返した。そして由次も——彼はもう三年も前から百姓仕事に引張り出されてゐたので、半人分以上、いや大人に近いまでの仕事をやつて退けたのである。

二

次の日も次の日も一家のものは同じやうに泥上げ、代田の切返し、そして一日散に田植の準備を進めたが、肝心の肥料がまだ手に入つてゐなかつた。自家製の堆肥だけはどうやら眞似事位には入れたが、それだけでは泥の廻らない一段と高い方の田など全くどうにもならなかつた。そこへは毎年きまつて化成を三叭ほど叩きこんだ。ところでその肥料だが——化成のみならず魚糟配合のやうなものでも、今年は品不足で（日支事變のための原料不足に加へて製造能力の

低下のためだといふ) 價額が倍にも騰貴してしまつた。そんなことから、一方では増産といふことが國家の至上命令となつた關係上、お上の配給制度になり、浩平たちのやうな、買置きの出来なかつた者は村の産業組合からの配給を待たなくてはならなかつたのだ。そしてこの配給肥料なら、とにかく成分もたしかだし、價額も一般の肥料商から今まで買ったのよりは安く、「公定」されてゐた。

甚だ「うまい具合に」——村人の表現を借りると——出来てゐたが、然し實際なか／＼さう行かないものと見えて、「今日来る」、「明日は必ず来る」と組合で確言するにも拘らず、まだほんの少し——桑畑への割當分しかやつて来ず、「重點」と稱せられる水田の分は一向姿を見せなかつた。

「仕方がねえから素田を植ゑたさ。」といふ者も出て来た。全く氣の早い連中にとつては、甘んじて素田を植ゑるか、三倍もの値で商人からひそかに手に入れるかしか無かつたのである。

「俺も素田でも植ゑつか——」と浩平は代田しろたの準備が進むにつれて、やきもきしてゐたが、たうとうその日の晝休みに、

「これが最後だ。組合くみあひ行つて見て、今日中に来ねえとすれば、俺も素田植ゑだ。畜生、こん

な思ひするのは生涯になかつたことだ。」とぶり／＼言つてゐるところへ、おさよが丘の坂を下りて此方へ駆けて来る。今日も學校を休んで留守居かた／＼おさよは末子のヨシを守してゐたのであつた。

「なんだ、さア子——」と逸早く見つけたおせきが聲をかけた。

「肥料でも来たかな。」と浩平も立ち上つた。

だが、おさよの持つて来た報告は、そんな耳寄りのことではなかつた。

「おつ母、ヨチ子、腹痛えつて泣いてゐつと。」とおさよは、はあ／＼息をきらしながら、遠くから叫んだ。

「腹が痛えつて、何時から——」

おさよが近づいて説明するには、その朝言ひつけられたとほり、まだ扱かない小麦の束を庭へひろげて乾してゐると、おちえと二人で小麦束の中へ入つて歌などうたつてゐたが、急に黙つてしまつて、椽側へ戻るなりそこへ突伏して、しく／＼泣きだした。何だ、なんで泣くんのだ、おつちにどうかされたのかと聞くと、かぶりを振つて、ぼんぼが痛えんだといふ。手水に行きたいんではないかと訊くと、いや／＼する。ちや、どうすればいゝんだといつても、たゞ泣い

でばかりゐて、自分の手では始末がつかぬと言ふのである。

「それ、何時頃だか。」

「十時か十一時頃——」

「赤玉飲ませたか。」とおせきはせか／＼と言ひ放つた。

「飲まねえもの、——袋から出して飲ませべと思つても、ぼき出してしまつて。」

「仕様ねえ餓鬼だな。——何か食はせやしなかつたのか、李でも。」

「食はせつかい、俺ら、なんにも。」

「連れて来ればよかつたんだ。」おせきは叱りつけるやうに言つた。「この忙しいのに、痛えたつて仕様あるもんか。なんで連れて来ねえんだ。」

「だつて、おつ母さんは……たアだ轉げ廻つてゐて、何といつてもかんぶり、振るだけなんだもの。」

おさよはさう言つて不服さうに黙つた。

「腹ぐれえ何でもねえ、わざ／＼知らせに来つことあるもんか、馬鹿。」

浩平も言つて起ち上り、のつそりと、みんなをあとに組合さして出かけて行つた。準備だけ

出来ても肝心の肥料が来ないので、全く骨を折つて植ゑるせいはなかつた。實際、彼は氣が氣でなからなかつたのだ。黙つて突立つてゐたおさよは、そのあとからぶすんと、もと来た道を引かへしはじめた。

おせきは如何すればいゝか迷つてゐた。夫と娘の、それ／＼の行動を見守つてゐたが、

「さア子、さア子——」と呼んだ。が、おさよは聞えたのか聞えないのか、もう振り向きもしなかつた。

「大したことでも有るめえ。」彼女はひとりつぶやいて、それから一段と聲を高くし、

「さア子、ヨチに赤玉飲ませて寝かせて置け。いゝか、無理にでも飲ませなくてや駄目だど。」

おせきは再び田へ下りて萬翁を振り出した。子供の腹痛など、全く彼等は馴れつこになつてゐた。夫のいふやうに、わざ／＼知らせに来るほどのことはなかつたのである。

一方、組合の事務所へ駈けつけた浩平は、自分と同じやうに肥料の問合せにやつて來てゐる五六人の者と顔を合せた。

「どうだい、様子は——來さうかい。」

ずいといつて誰にもなく言ひかけると、「肥料來るかやと、組合さ來てみれば……」「肥

料來もせで……」と退屈と憤懣とをこつちやにした連中が、かけ合ひで唄の文句をつぶやいた。「用もない、體溫計など來てやがる。」

全く呆れたことに、その體溫計が小綺麗な箱へ入つて配給されて來てゐた。それは農村人への衛生思想注入のため、どこか厚生省あたりの肝入りで、特に組合が實行したに相違なかつた。「體溫計つてみたところで、稻は育つめえで。」と一人が言つて、浩平に話しかけた。「なア、よう、臺の親方。」

「うむ、さうでもあるめえで。」と浩平はそこにあつた椅子へ腰を下ろしながら答へた。「田の體溫でも計つて報告したら、そのうちに、それ、何とか、その方の醫者様がかけつけて呉れべえから。」

「農學博士がか。」

「うむ、まアその博士なら、これで、無肥料で増産ちう一舉再得の方法も教へてくれべえからよ。」

「それもさうだつべけんども、これで人間の方の溫度も計る必要あつて。みんな、はア、肥料々々で逆せ上つてゐつからよ。いゝ加減のところで血壓下げてもらアねえと、村中みんな腦溢血

だなんて……」

「ところがどうも、その血壓、上るばつて下りつこねえ。どうだ、今の電話きいて見ろ。」

奥の部屋で、なるほど電話してゐる組合事務係のだみ聲がしてゐる。

「……うむ、そんな譯では……なるほどな……うむ、なる……全く、どうも、いやはや……全くこれ困つちまアな。……いくらでもいゝから……はん……ははア……いや、全く……それは先づ……さいなら。」

そこがちやりと受話器を措く音がして、急ぎ足にスリッパを鳴らしながら係が現れた。半白の小柄な猿のやうな貌をしたおやぢである。わざ／＼事務机には向はず、みんなの居る方へ向つて火鉢の向ふ側へ蹲み、兩手をふんふん……と言ひながら組み合せた。出来るだけ七むつかしい、が誰にも當り觸りのない顔を彼はそこへ作つて見せたのである。

「どうだや、それでもいくら來るあてがあるのかい。」と一人が訊くと、

「それが、どうも——明日にならなければ分らないと縣の方では言つてゐるんで……」

「明日、明日つて、随分その手食つたな。まるで何かのやうだぜ、組合も。」

「いや、君等はそんな戲談言つてゐつけど、みる、これで、縣の方だつて、組合の方だつて、

こゝんとこ不眠不休で心配してゐるんだから。はア、組合長ら、昨日から寝こんちまつた位だから——縣廳へ行く、農林省へ行く、肥料會社まで行つて見る。全くお百度踏んで、それでも何ともならねえんだ。農林省の方では、とにかく早場地方が第一だといふわけで、出来るそばからぞつちの方へ廻送してゐるらしいんだし、そこを百呎でも五十呎でもいゝから、こつちへ取らうといふ始末なんだから、これで、並大抵のことでは……」

「でも、山十(町の肥料屋)などへ行けば、一時の間に合せ位のもものは、倉庫の中に晝寝してゐるつち話だねえか。どうだや、そいつを何とか、かうお上の力で、こつちへ廻してよこすやうな方法とれねえもんかな。」と中年の鬚もちや親父が言つて、眼玉をぎよるつかせた。

三

それにしても、もうどんなに待つたところで、乃至別の方法によつたところで、今日明日の間には合はないものと観念した方がよさうだつた。

「仕方ねえ、それこそ素田でも何でも植ゑべえ。」と投げつけるやうにいつて浩平は立ち上つた。

「さうだ、酢だとか菟弱だとか言つてゐる場合ぢやねえ。俺らもはア、すつぽりと諦めて明日は植ゑつちまアんだ。」さきにおばこ節を口誦んでゐた一人の青年も、それにつれて突立ち上り、兩手を天井へ届くほど伸して、あゝあゝ……とあくびを連發した。

田圃への道を浩平は割り切れぬ氣持でのそり／＼と戻りつゝあつた。町の肥料商の倉庫には確かに相當のストックがあることを彼も信じてゐた。小金の廻る連中は、すでにその方面から若干のものを手に入れて、どし／＼と田を植ゑてゐるのである。

「畜生——」と彼は思はずひとり言をかつとばした。「そんな大べら棒つてどこにある。」

「いよう、なんだや、今頃——」

ひよいと横合から自轉車を飛ばして知合ひの男が姿を現した。

「おう、君か——君こそ何だい今頃。」

「俺か——俺は商賣さ。」

ひらりと自轉車を下りたその中年の男——選挙プロオカーもやれば、墓碑の下文字も書く、蠶種、桑葉、繭の仲買ひもやれば、雜穀屋の眞似もやると言つたやうな存在——俗稱「塚屋」で通つてゐるこの五尺足らずの顔面ばかりが馬鹿に大きく、兩眼はあるか無きかの一線にすぎ

ない畸形兒風の男は、浩平をまともに見て、にやりと笑つた。そして口早やに、

「組合さお百度踏んでも肥料は来めえ。」

「組合長が縣や政府や會社へお百度踏んでも駄目だつちだから、こちとらがいくら、それ……」
「へえ……」と塚屋は唇をひん曲げた。「組合長ら何處さお百度踏んだのかよ。今頃はエネルギー絞り上げられつちまつて、死んだやうに寝てべえ。ホルモン注射でもしてやらなけりや、肥料も来めえで。」

さう吐き出してから、「時に——」と塚屋は調子を改めた。「どうだや、旦那ら、はア、田植をつちまつたのかい。」

「田か——田なんか俺ら植ゑねえつもりだ。今年は、はア、草つ葉に一任と決めた。」

「でも、それでは「増産」といふ政府の命令にふれべえ。」

「仕方ねえな。これ……」

「少し位なら、俺、都合つけるぜ。實はこないだからその方で、かうして歩いてるんだ。俺のやうな始末の悪いとんびくれんでも、これで非常時となりや、いくらかまさか國家のお役に立たなくちやア、なア。」

さう言つて塚屋は、悠々とポケットから巻煙草などをつまみ出し、一本どうだ。とばかり黙つて浩平の眼の前へ袋ごと突き出した。

浩平は「曉」を一本つまみ、

「やみやつて國家のためもあんめえ。」

ははあ……と哄笑した。

「やみなもんか。公定で俺らやるんだ。」

「だつて君、公定の配給肥料は産組でしか……」

「それはこの村での話、政府の方針としては産組に半々位に分けて配給させる方針でやつてるんだぜ。」

「さうかな。……それはまア、どうでもいゝが、早いとこ、何があるんだか、化成か魚糞か大豆か……」

「化成は切れつちまつたが、魚糞配合が有るんだ。」

「それは……山十か。誰が一體、持つてゐるんだ。」

「君、そんなことはどうでもいゝ。俺と君との間の商取引だねえか。肥料は俺が持つてゐるの

さ——ひとのものなんか君、泥棒ちやあるめえし。」

「うむ、とにかく現物さへあるんなら、何も問題では無えが……で、一吠いくらなんだ。」

「公定價額だよ。」と唇を突出して言ひながら、塚屋は懐中から小さい算盤を出して斜めにかざし、得意さうにばち／＼と珠を入れた。

「そんな公定あるもんかい。」

浩平はおつかぶせるやうに叫んで塚屋をにらみ、それから、ぶいとそつぽを向く。

「無えことあるもんか。どこさ行つたつてこれだ。これでなかつたら、こんどは見る、組合からだつて手に入らねえから。」

いやなら止すと言はぬばかりである。

「うむ——」と浩平は今は折れるしかなかつた。「それで……何吠あるんだか。」

「君は何吠要るんだか、それによつて俺の方はいくらでも都合する。」

「俺は、まア、差しあたり二十もあれば……」

「二十か、よし、都合つける。——明日でよかつべ。」

「それはいゝが、……然し、その値段は、少し、どうかなんねえかい。」

「公定だよ、君、これを破れば、俺はやみで上げられるんだぜ。」

「そんな、それは君だけの公定だつべ。」

「そんなこと言ふんなら、俺ら止めた。——破談だ。村中のものがほしがつて、はア、金つん出して待つてゐる者さへあるんだ。君にやらなくなつていくらでも賣れるんだから——いゝ具合に君とこゝで逢つたもんだから、俺、話したばかりなんだ。」

塚屋は小さい算盤を再び懐中して、馴れた手付でハンドルを握つた。一刻を争ふ……といったやうな面持で、「それぢや、まア、せつかくおかせぎ——」

四

田圃へかへると、由次が一人で泥上げをしてゐた。陽はいつか傾いてしまつて、堀割を隔てた真向ひの丘のかけが濃く沼岸の方へ伸びてゐる。由次は鋤簾は重さうに投げ込み、肩に力を入れて搦ふのであるが、思ふやうに泥に喰ひこまず、半分も泥は上らなかつた。

「はア、泥無くなつてしまつて駄目だ。」と由次は父親を見ると言譯のやうに呟いた。

「おつ母と、勝は？」浩平は無意識のやうに訊ねた。彼の頭の中は、今の今、塚屋とやつて來

た取引談のことで暴風のやうな状態だったのだ。——公定だなんて、野郎。あらかた倍でもきくめえ。あんなもの誰が、それでは——つて買へるけえ。阿呆にも程度ちうものが有らア。——だが、一方ではそれを打ち消して、然し、反七俵に廻つてくれるやうだと、なアに、あれを買つたつて損はねえ。第一、元肥を打つて植ゑるその氣持だからな、そいつが千兩したつて買へる品物ぢやねえんだから……

由次が何か答へたやうであつたが耳に入らず、浩平は投げ出してあつた自分の簾鋤をつかみ、器械的にそれを堀割へ投げこんだ。

さて、その頃、ヨシ子の容態が急に悪いといつて、おせきは再びおさよから迎へを受け、家へとんでかへつて、あれこれと氣も轉倒し、てんでこ舞ひを演じてゐた。ヨシ子は今にも眼の玉を引つくりかへしてしまひさうなどろんこの眼をして、もはや痛みを訴へる力もなく、うつら／＼と、高熱の中に、四肢をびくつかせてゐた。腹部を見ると、まるで死んだ蛙のやうにぶくらんと膨れ上り、指先で押しても凹まない位だった。

「おやまア、どうしたんだや、ヨチ子——」

おせきは初めのうち茫然として、そこに立ちつくしてゐた。こんな状態とは少しも考へなか

つたのだ。

近所へ家を借りて別居してゐる母のお常が、野良支度ではあつたが、いつものやうに身綺麗な、五十を半ば過ぎてゐるにも拘らず、まだ四十臺の女のやうな姿態で、ヨシ子の頭部を冷やしてゐた。ヒマシ油か何かを飲ませようと骨折つたやうな形跡もあつた。

おせきは次の瞬間、自分を取りかへして、その母親の、いつものやうな姿態を見ると、むらむらと腹が立つた。

「なんだか、おつ母さんら——」とおせきは突慥に叫んで、ヨシ子の枕頭からその見るに堪えないものを追ひ退けるやうに、自分の身體をぐいと持つて行つた。

「なんだかではあるめえ、痛がつて騒いでゐるの見て黙つて居られつか。」

お常はそれでも娘に遠慮して——さうしなければゐられないものを彼女は持つてゐた。——一步そこから膝で後退した。

「いゝから、おつ母さんに構つてもらひたくねえから、はア、歸つてくる。」

「言はれなかつて歸つけんどな。」さう押しかぶせて、「おせきら、俺にいつまでそんなつん／＼した口きいてゐんだ、よう／＼考へてしねえと、はア、損だつべで。」

「損でも得でも、俺ら、そんなことはどうでもいゝんだ。ひとに嗤はれたくねえから、俺ら、してゐんだから……」

投げつけてからおせきは、傍につくねんと立つてゐるおさよに向つて昂ぶる胸のうちを奔注させた。

「赤玉飲ませたのか、あれほど言つたのに、……飲ませりや、こんなにならないうち癒つてしまアんだ。」

「だつてお母さんは……いくら飲ませたつて、げつけつ……と吐いてしまつんだもの、仕様あつかい。」

「仕様ある、この馬鹿阿女——十三四にもなつて赤ん坊の守も出来ねえなんて有るか。」

「おさよのこと怒つたつて病氣はよくなんめえ。」とお常がそこへ横合から口を出した。「それより、はア、早く醫者様でも頼んで來なくてや、ヨチ子おッ殺しまアべな。」

「大きなお世話だよ。いくら俺だつて七つや十の餓鬼奴ちやあるめえし、それ位のこと、言はれなくたつて知つてらア。知つてゐつけんど、醫者つちば、すぐに金だつべ。金はたゞでは誰も持つて來てくれねえんだから……俺らには……」

「それこそ大きなお世話だ。」お常はお終ひの一文句が自分にあてつけられたものと思つて鋭く言ひかへした。「汝ら、そんな意地悪だ。どうして俺の腹から汝のやうな悪たれ娘が生れて來たのかと思ふと不思議で仕様ねえ。」

お常はくらくとして前後の辨へもなくなりさうになつたが、そこへ隣家の若衆が、心配さうに眼をかゞやかせて、そつと土間へ入つて來たのに氣づき、氣を取り直して、裏戸口から出て行つた。

「俺、醫者様へ行つて來てやつか。」と若衆はおせきの顔色をうかゞつた。

「おや、心配かけて濟まねえね。」

おせきも我にかへつて笑顔をつくるひ、やゝ考へてゐたが、

「なアに、おさよをやるからいゝんですよ。この忙しいのに、わざわざ行つてもらはなくても……」

「でも、俺、はア、仕事から上つて來たんだから……」

「でも、いゝんですよ。やるときはおさよをやるから。」

おせきはまだ決心がつかなかつたのだ。若者はそれと察して、行くんなら何時でも行つてや

るから……と繰返して言つて遠慮がちに出て行つた。

入り代りに、裏の家の女房が、夕飯の支度で野良から上つて来たといつて立ち寄らなかつたら、おせきの決心はまだくつかなくなつたであらう。自分の子供を二人も疫痢で亡くしてゐるこの女房は、ヨシ子の容態を一目で見つた。

「まア、おせきさん、早く、お前、お医者さん頼んで来なくてや……」

そこでおせきもびつくりして、おさよを呼んだ。と、横合から「俺行つてくる。」と叫んで飛出したのは勝であつた。彼は母親のかへつたのを幸ひ、自分もこつそり仕事を放つたらかして家へ戻つてゐたのだが、今まで、叱られると思つて、納屋の方にかくれてゐたのである。

「あれ、この野郎、いつの間にかへつた。」おせきは顔を尖らしたが、叱りつけてゐる暇はなかつた。「汝らに分るか、この薄馬鹿野郎。——さア子、早く、裏の家の自轉車でも借りて行つて来う。」

庭先に干した小麦束を片づけてゐたおさよは、言はれるなり裏の家へ行つて、軒下に乗りますてゝあつた自轉車をひっぱり出した。が、大人乗りのその自轉車はサドルが高く足が届かなかつた。彼女はまるで曲乗のやうな具合に、横の方から片脚を差入れ、右足だけでペダルを踏

み、それでも危げなく吹とばして行つた。

村の醫者は往診から歸つたところで、そのまゝ早速自轉車で来てくれた。そして注射を一本打つて置いて、それから腹部のものを排洩させると、ヨシ子は呼吸を回復し、少しく元氣づいて来た。

「危なかつた、生漬の梅だの、腐れかけた李だのを、うんとこ食べてゐた。」と白髪の村醫は笑つた。

甘酸つばいやうな水薬をつくつて、その飲み方や、病兒の扱ひ方などを細々と説明して、やがて醫者は歸つて行つた。

その頃、ヨシ子はもう殆んど平常の息づかひになつて、すやくと眠つてゐた。

ところで、浩平はまだ野良から歸つてゐなかつた、醫者がやつて来て病兒の處置をしてゐるうち、由次は黙つて、何時の間にかへつたか、風呂の下など焚きつけてゐたが、「お父は」と訊ねても、「いまにかへつて来べきで……」と答へたばかりであつたのだ。醫者が歸つたあと、おさよがごそ／＼臺所で準備した夕飯を、おせきも子供等と一しよに食べ終つたが、それでも浩平はかへらない。

「お父は、組合さ行つたきりかい。」とおせきが、そろ／＼苛々しい氣持になつて、改めて由次にきくと、

「だもんか。野良から上りに、またどこへか廻つて行つたんだ。俺こと、先きにかへれなんて言つて。」由次はぶすんとしてゐる。

「馬鹿親父め、こんな騒ぎしてゐんのに……暢氣な畜生で、仕様ねえ。」

おせきはぶつ／＼と呟きながら、一旦出した浩平のお膳を戸棚の中へ突込んでしまつた。

浩平はみんなが寢床についてから、のそりとかへつて來た。たうとう塚屋の前にかぶとを脱いでしまつた。——いや、脱がせられてしまつた何とも名狀しがたいいやな後味が、にがつぼく頭の中にこびりついてゐて、物をも言はず、彼は自分のお膳をひつぱり出し、ぼそ／＼と冷たい麥飯を咽喉へ押し込んだ。

五

翌くる朝、ヨシ子はもうすつかり快くなつて、起きるなり食べものをねだり、満腹すると歌などうたい出した。「五萬何把の藁束分けて、隠れんぼどこかと探してまわる。……」それは

前日、干しならべた小麥束の中でおちえから教へられた一節だつた。そして

「けふは、はア、おまんましか何にも食べるんでねえど。」と母親にしつこく念を押されると、

「う、ヨチ子、なんにも食べねえ……」

眼を伏せて、さすがに神妙な顔付をする。

ところで今日は、いよ／＼植付ができる段取だつた。あとから起き出して、もぞ／＼朝飯を終へた浩平が、

「俺は肥料を受取つて來なければならねえから、お前らさきに出かけて居ろな。」と誰の顔を見ないで言つた。

そこには何か根柢がありさうだつた。おせきの胸にそれがはつと應へた。尤もそれは彼女にとつて前夜來のまだ解けぬこだわりの故だつたかも知れぬ。何となれば浩平は、おせきがいくら訊ねても肥料のことについては深く言はず、觸れられることを嫌ふので、反對におせきはますます追求せざるを得なかつたのである。産組からは、穂が出てしまつた頃しかやつて來まい、勢ひ他で手に入れなければ、おめ／＼と素田を植ゑなければならぬ。そんな分りきつた理窟ばかりこねてゐて、肝心の塚屋のことを少しも口にせず、たゞ、とにかく十五貫入りの配合を十

五呎だけ都合できたから、明日は植付だ、植付だ。とその植付だけを強調する……どこで都合したのだ、まさかやみの高いものを手に入れたわけではあるまい。と更に追求すると、そんなで、助に俺のことが見えるのか、八文錢でも天寶錢でも、とにかく身上切り盛りしてゐる以上、そんなまねはやれたつてしないし、たとひやつたにせよ、噂らに責任はもたせぬ、といふやうなことを言つて、てんで寄せつけようとしないのであつた。

おせきも眠いので、そのまま眠つてしまつたが、再び彼女の胸のうちにはもや／＼するものが湧き起つた。

「畜生、身上切り盛りもねえもんだ。まかり間違つて洪水でも來たら如何するんだ。どよのつまりは俺げ降りかゝつて來るんだねえか——」

おせきはとにかく家付娘として、祖先から傳つた屋敷や若干の田畑——作り高の三分の一にも當らなかつたが——だけは自分の名儀で所有してゐた。婿の浩平はその點になると、いはゆる「素つ裸」で、いざといふ場合には腕まくりでも尻まくりでも出來たのである。

そのことを考へて夫の言動を責めつけようとは思つたが、朝つばらからぎやあ／＼言ひ合ひをして、この忙しい時節、近所に迷惑をかけるんでもあるまいと、彼女はぐつとそれを腹の底

の方へ押しやつてしまつた。そして學校へ行くの行かないのと愚圖ついてゐるおさよへ當りがけした。

「馬鹿、學校など如何でもいゝ、苗取りやるだんから田圃へ行かなくちや仕様ねえ。」

浩平にはかまはず、おさよを急き立てゝそのまゝ家を出た彼女は、今度はいよいよと夫がどうしてその肥料の金を工面したかに疑ひを懐かざるを得なかつた。——また母から借りたに相違ない。——さう口に出して言ふと、彼女の足は我にもあらずそこへ釘づけになつた。十五呎手に入れたとすれば、どんなことをしても百圓は缺けまい。そんな大金が有る筈はなかつた。産組から來るつもりで用意した金が五十圓位はあつたが……その他には、子供等へやつた小遣錢まではたいたとしても十圓とはまともなかつたであらう。——だから親父め、あんな薄とばけた風つきをしてやがるんだ。それに母も母だ。——おせきは胸くそが悪くなつた。實の母だからそれが一層ひどかつたのかも知れぬ。村人に立てられた夫と母との噂——それが依然として解けない謎であり、ますます深まる疑惑でさへあつた。

「母を叩き出した。」全くそれはおせきの斷行した、換言すれば實の娘の鬼畜の行爲であつたらうが、夙く夫に死別して、持つて生れたその百姓女には珍らしい美貌——美貌もきいてあき

れるが、とにかく人並以上の容貌であることは、當のおせきにも分つてゐた。——がいはゆる仇をなして隠然公然、多くの男の慰み者に墮し、うまく立廻つて小金は蓄めたか知れないが、そのためにどんなに自分たち兄妹——兄及び弟の三人のものが惨めな境涯に陥ちたことであつたらう。そのため家を飛び出した長兄は他郷に死し、祖父母の許にあつて成育した彼女と弟とのみが、辛うじて一人前になつたが、いや、そのことよりも何よりもおせき兄弟を身も世もあらぬ思ひに驅つたのは、「お前ら家のおつ母は誰某のメカケだつべ、……」と言つたやうな同僚たちの嘲笑だつた。

そのために兄弟たちは殆んど學校へも行く氣になれず、いゝ加減のところまで止めてしまひ、祖父に従つて百姓仕事に身をかくし、長兄の出奔後、おせきは十八歳でいまの浩平を婿にもらつて、傾く身上を支へたのであつた。弟の清吉は、これも十五のとき東京の工場へつとめることになつて、後、電氣會社に入り、いまは應召中である。

母のお常は家に居たり居なかつたり、定まらぬ日常を送つてゐたが、四十五六の頃、身體を悪くしてからは餘り出歩かず、いつの間にか昔の姿にかへつて野良へも出るやうになつてゐた。殊におせきが次から次へと子供を産んで、ます／＼困窮の加る／＼數年間、全く母の手なしに

は、一家は「のたり切れ」なかつたと言つてよかつたのであつた。

そんなことで、過去のことは何時か忘れられた。おせきが産後の攝養期にあるときなど、浩平とお常は自然同じ仕事に携はらなければならず、笠をならべて田植もすれば、畑の作入れもし、野良で、同じお櫃の辨當も食べた。

——二人の仲が變だ、といふやうな噂が村を走り廻つた。そしてそれはおせきの耳へも入らずには居なかつた。ばかりでなく浩平が身のほども知らぬ新しいシャツなど着てゐることがおせきの眼に止つたこともあり、金銭上のことでも母と夫との間に、時々共通の出費があるのを發見したこともあつた。

そんな事情で、おせきは浩平との口争ひのとばかりを母へ持つて行つて、たうとう別居を強要し、お常も「一人で暢氣にしてゐた方がいゝ……」などと言つて別れたのであつたが、それ以來も浩平が相變らずちよく／＼母のところから自分の知らぬ出費を借り出してゐるらしかつたのだ。が、おせきは努めて知らぬ振りを装ひ、母も最早や年が年だし……先づ小遣錢の借貸しぐらひは……とそんな風なところで納めて居たのである。

それにしても依然として氣持のいゝ筈はなかつた。母の體臭のやうなものを浩平の肌に感ず

るやうなことがあると、一週間でも十日でも、彼女は夫を突とばして寄せつけなかつた。いまもまた、あの、夫の何かしら不敵さうな、城壁を築いたやうな態度から、彼女は肥料金のこと
に思ひを及ぼし、まさしくと母の烙印を見たやうに思つたのだ。氣を取り直して田へ行くには
行つたが、おせきは胸が静まらなかつた。覺束ない手付で苗を取つてゐるおさよの、そのろ
くした不器用さまでが癢に觸つた。

「そんな取り方で植ゑられつか、これで、れ、助阿女——」と彼女はいきなり叱りとばした。「か
ういふ風に指先で分けて取るんだ。馬鹿、俺らお前の年には、はア、どんな仕事でも大人並に
出来たど。婿の二人や三人貰つてもびくともしねえ位の氣持だつたど。このちんちくりん奴。」

代掻き器械を扱ひかねてゐる由次と勝の動作にも同様に腹が立つた。

「馬鹿野郎ら、そんな風に把手を下げる奴があるもんか、空廻りしちまつて何度やつても駄目
だねえか。把手を上へあけて、上へ……。汝ら、はア、いくつになると思つてけつかるんだ。

一人前に大飯ばかり喰ひやがつて、これで、れ、助野郎ら。」

やがて浩平が牛車へ肥料の吠をいくつか積んで来て、それを代田しろたの近くへ持ち運び、黙つて
その口をあけ、そして灰桶へあけては、ばら／＼と由次と勝が掻きならした田の面へばら撒き

はじめた。

ぶんとその匂ひがおせきの鼻を打つた。氣持をそゝる肥料の匂ひ——が、そこには何か不純
なものが含まれてゐた。彼女は苗取る手を休めて苗代から代田の畦へ近づき、そのばら撒かれ
た肥料を泥の上から捲ひ上げて、色合を見たり匂ひをかいだりしてゐたが、今度は吠そのもの
に近づいて、ざくりと手一ぱいに捲ひ上げて検分した。

「こんな配合……なんだや、これ、糟くそみてえなもの、これでも利くつもりかい。——誰
からこれ買ったか知んねえけんど、まさか、塚屋だあるめえ。」

浩平は返事をしなかつた。そつぽを向いて、たゞ熱心に、ばら／＼と撒いて歩いた。

「あゝ、お父、まさか塚屋から買ったんだあんめえよ。」

更に追求されて浩平は反撥した。

「塚屋から買ったんならどうしたか。」

「どうしたもかうしたもあるもんか。あのインチキ野郎、山十の倉庫から十年も二十年も前の、
下敷きになつてゐた利きもしねえ腐れ肥料持ち出して来て、そいつを新しい吠につめかへて、
倍にも三倍にも賣つてゐるんだちげが、まさか、俺家のお父ら、天寶錢でも八文錢でもねえち

けから、そんな、塚屋らに引つかゝつたわけではあるめえと思つてよ。」

この女房の一言はぐざりと浩平の胸を刺した。

「なに、もう一遍言つてみる。」

ぐいつと向き直つたが、おせきのきら／＼する兩眼に打つかると、浩平は矢庭にそつぽを向いた。

「一遍でも百遍でもいふとも。こんな肥料、いくらで、誰から買つたか知んねえけど、これが丁滿ちやうまんに利いたらお目にかゝらア。」

何か言ひかへすかと夫を見たが、そつぽを向いたまゝ知らん振りで、相變らずばら／＼と撒きつゞけてゐるので、おせきは威丈高になつた。

「こんなもの、いくらで買つたか知れねえが、よくもこんな腐れ肥料買ふ金があつたことよな。まさか、その金、どこからかぬすとして來たわけぢやあるめえが、よく借りるところが有つたことよな。」

暗に母のところを指したこの針をふくんだ一言は、またしてもぐざりと浩平をえぐつた。

「どこで借りようと、誰に借りようと、お前らに心配かけねえから……」

「心配かけねえ？」

「かけねえとも——」

「ふん、そんな、はア、水臭えこと抜かしやがるんなら、さつさと俺家出してもらアべ、婿の分際も辨へねえで、心配かけねえとは何事だ。自分勝手に、婿などに身上引かき廻されて、それでこの俺が、黙つてゐられつかつちんだ。これでも俺ら、人に後指さゝれるやうなこと、まあだした覚えはねえんだと。これで、れ助親父。」

おせきは遠くの田圃にゐる人々が首をもたげたほどの聲で、家付娘の特權を握りまはした。

「ばか阿女、いくらでも哮へろ。」と浩平は氣壓され氣味で、にツと笑つた。「山の神なんか黙つて引込んで居ればいゝんだ。何のかんのと差出がましいこと言ふのを、俺の方の村では雌鷄めんどりめとき吹くつて笑ふんだ雌鷄めんどりとき吹くとその家に災難があるつて昔から、この邊でも言つてべ。」

「何だと、きいた風なこと吐かしやがつて、汝ら、はア、俺家のおつ母とでもいつしよになれ……今日限り、縁を切つから、はア……」

おせきは地團太を踏んで、齒をぎり／＼とかみ、熱い涙をはら／＼と飛ばした。

「おつ母さん、はア、勘忍して……おつ母さん、よう勘忍して……」とおさよが、泥手のまゝ、夫に武者ぶり付かうとする母のあとから、いきなり継りついた。

六

次の日、長男の勇が東京の工場からひよつこり歸つて来て、おせきの氣持はどうやら轉換した。田圃には自分たち同様、田植の人々がそこにもこゝにも見えたので、彼女はおさよにすがりつかれるまでもなく、ちつとそこで我慢したのであつたが、あくまで白をきつてゐる夫の態度には、ますます腹が立つてならなかつた。その日一日中、思ひ／＼の仕事をして、夜も思ひ思ひに過ごしたが、翌くる朝になつても口をきく機會はなく、おせきはそのまま野良支度にならうとはしなかつた。それに彼女はこないだから多少、自分の體の生理的な異状をも自覺してゐたのであつた。

今夜はお寺で部落常會があるから、各戸、かならず誰か一人出席のこと——といふ役場からの「ふれ」を隣家へ廻して、その老婆としばらく無駄話を交換し、やがて何か見馴れぬ洋服姿の男が自家の門口を入つて行つた様子に戻つて見ると、それが、はからずも勇だつたのだ。

「おや、誰かと思つたら。——どうも、誰かゝ來たやうに思つてはゐたが——」
半年ばかり見ないでゐるうちに、急に、町場の青年らしく、大人びた悴を見た彼女は、最近人に見せたことのないやうな嬉しげな微笑を顔いつばいに湛へた。

勇は國防色のスフの上衣を脱ぎ、上り端へ胡坐をかいてから、小さい新聞包みを母の方へ押しやつた。

「おみやげだ。何にもなくて駄目だつけ。」

母の好物の鰹の切身を彼は汽車を降りた町で買つて來たのである。それに、別に少しばかりの東京風の菓子。そしてそれは勝やおさよや、その他の幼い者たちへ。

「みんなどうしたか。」

と彼はからんどうの家を見廻して訊ねた。

「由次と勝は田植、さア子は今日は、出征家族の奉仕労働とかで、どうしても學校さいかなくてえなんねえなんて行つちまアし、おツちうらはその邊で遊んでゐんだつべ。」

「俺ゐなくて田植大變だつべ。」

勇はこんどは土間のあたりを見廻した。貧しい小作百姓のむさ苦しい煤けた土間には、ごみ

ごみした白や古俵ばかりで何もなかった。

おせきは答へず、別のことを訊ねた。

「東京の方は外米だちけか。まづくてひどかつべ。」

「うむ、ひでえや、ぼそくさで、味も何もねえ。」

「ふでも如何だか、こつちの死米の麦飯と較べると、まアだ、外米の方がよくねえか。」

「うむ、どんなもんだかよ。」

「今年は、はア、洪水^{みづ}浸しの米ばかり残つてゐて、まアだ食ひきれねえで居んだよ。いくら團子にしても、へな餅にしても、鶏や牛にやつてもやりきれねえ。でも漸くあれだ、と一俵半くらひになつた。そのあとに、合格米が三俵、まア、どうやら残つてゐつから、田植だけはこれで出来べえと思つてゐるんだ。」

おせきはしみく／＼とそんなことを繰り返かへした。勇が聞いてゐるかゝるかなどは確かめもせず。それから彼女は調子を改めて、「けふは勇がかへつたから、米の飯でも、それでは炊くべ。殊な米だねえけんど、外米よりはまさか旨かつべから。」

そのとき「兄^{あに}ちゃん^{ちゃん}が来てらア。」と叫んでおちえとヨシ子が往還の方から飛びこんで来た。

「ほら、兄ちゃんだ——兄ちゃん、大きい兄ちゃん——」

然しヨシ子はきよとんとしてゐる。この兄を見忘れてゐるのかも知れない。でなければ服装や何かどこか違ふので、大きいあんちゃんではなかつたと思つてゐるのかも知れない。

おみやげのキヤラメルやビスケットの包みを抱かされて漸くヨシ子にこ／＼と笑ひ出した。おせきはその間、鯉の切身を包みから出し、「早速煮て置かな——」と暫くぶりで匂ひを

かぐ海の魚に、もう満悦の思ひだつた。勇が工場へ——叔父清吉の行つてゐた東京の電機會社へ出るときまつたときは、頭から反對して怒鳴り散らし、「百姓家の長男が百姓しねえなんちあるもんか、家をどうするんだ、家の相續を——」などと言つたり、「東京などへ行つて……肺病にでもとつかれて死ぬ、この野郎——」など、喚いたりしたのだつたが、結局、一人でも口減らしをしなければ、子供があとから／＼と大きくなるし、家が持たない……といふそれこそ至上命令の下には、何とも抗議のしようもなくなつてしまひ、「そんなら出て行け、俺ら知らないから、死ぬとも生きるとも。」そんなことまで口走つた彼女だつたが、いまかうして見違へるほどな若者になつて歸つてゐるのを見ると、やはり出してやるしかなかつたし、出してやつてよかつたのだらうと、思ひかへさざるを得なかつた。

「兄ちゃん、遊びに行つてみべえ。」とおちえが言つてもう廿へかゝつてゐた。ヨシ子は相變らず黙つてゐるが、貰つたお菓子をうれしさに眺めて、そしてまだ口へは持つてゆかず、食べでもないのか、怒られやしないのかといふやうに、時々母親の方をうかゞつた。

「兄ちゃん、いつまで居んだ。あいよ、大きい兄ちゃん。」おちえがまたしても訊ねかける。

「今日けるのか、あいよ。」

勇は最初答へようとしなかつたが、うるさく言はれて、

「はア、東京さんなど行かねえよ、こんどは遠いとこさ行くんだ。」と何かしら母に気がねするやうに、然しわざと聞かせるかのやうにも言ふのであつた。

おせきはそのことを感じて、

「勇ら休暇かい。それとも何か用があつてかへつて來たのかい。」竈の前から訊ねかけた。

「うむ——」と勇は生返事した。

勇を北滿の開拓にやつてもらへまいか、といふことは村の青年學校の先生からの、前々からの懇望だったのである。勇にもその氣がないことはなかつたのだが、事情はさう單純はに出來てゐなかつた。なるほど青少年義勇軍とかに入れば、別にこれといふ金は要らず、訓練から渡

航、開拓……と順序を踏んで、やがては十町歩の土地持になれる。そのことは願つてもない仕合せであつたが、當面、勇にいくらかでも——たとひ月十五圓にせよ、働いて入れてもらはなければ、家が立ち行かなかつた。食ふ口を減らすと同時に十五圓の入金——それが一先づ勇の叔父のつとめてゐた會社へ當人を出してやつた一つの理由だつたのだ。

が、今では由次が勇と代つてもよかつた。ばかりでなく勇自身が、工場づとめよりは、まだ滿洲の方がよくはなからうかといふ夢をすてきれないでゐた。

「お前、なにかい、やつぱり滿洲さ行つて見る氣があるのかい。」とおせきは、せき込んで訊ねた。

「とにかく如何なつか、先生が一度相談したいから、休日にかへつて來ないかと言つて手紙くれたからよ、それで俺、まア、とにかく、歸つて來て見たんだ。」

「さうか、先生が……でも、あれだで、一度行つたら、はア、なか／＼來れねえんだから、よつく、お父とも相談して、それから、決めるんなら決めなくては駄目だで。」

彼女は勇をそんな遠い寒い國にやるのがひどく氣づかはれる様子だつた。

午後、勇は久しぶりに白い米の飯を食つて、それから青年學校の先生を訪ねて行つた。

植付が終つて、今後は田の草取りだつた。黒々と成育し分蘖しはじめた一つ／＼の稻株を見ると、浩平はとにかく得意の鼻をうごめかさずにはゐられなかつた。インチキ肥料でも腐れ肥料でも、利き目さへあればなア……など、つい妻に向つて浴せかけたくなる衝動を、彼はちつと抑へるのに骨を折つた。

おせきは肥料のことについては、最早や何も言はなかつた。言つてみたところでどうにもなるものではなかつた。それよりは、今は彼女は出来秋の心配に移つてゐた。去年のやうな洪水でも来られると一家はます／＼悲境に沈むばかりであつた。厄介な存在がまた一人殖える——いまやそれが確定的だつたのだ。健康な彼女は悪阻に悩むやうなことは先づ無いと言つてよかつたのであるが、それにしてもさすがに自分の肉體が持てあまされた。一人前の仕事が出来ない、それほど齒がゆいことはなかつたのである。彼女は浩平の動物性を憎悪した。「丁滿なことは何一つ出来ぬえくせに。このでれ助親父。」

浩平にとつては、そのことに關する限り、何とも反駁は出来なかつた。實際、すでに七人も

の子を産んで、今度で八人目、これからさきもその可能性は長かつた。一體、これで如何なるといふのであらう。妻の肉體的負擔もさることながら、自分たちのその後の負擔も容易のことではなかつた。

暢氣な彼もそのことを考へぬではなかつたが、口では「この不性阿女。」時にはそれ位のことと言つた。が、一言の下に壓倒されてしまふのだつた。

「畜生。」

第一、世間體が恥しかつた。出来ることなら彼女は、今度こそはなんとか處置したかつた。ところで表面は、この頃、一家は至極靜穩に推移してゐたといつてよかつた。勇の北滿行きは一先づ秋になつてからといふことになつた。訓練所へ入る前、彼は工場を止めて、家の仕事を手傳つてゐたのだ。百姓はつらい、つらい……と零しながらも、由次には負けず、田の草も掻き刈の草取りもした。

お蔭で、植付が終ると同時に、大麥の調製から小麥の始末まで、器械を頼んで来て、一気にやつてしまつた。たゞ、おせきを困らせたのは、勇の食事であつた。東京の食事に馴れてしまつた勇は、ぼそ／＼の麥飯や、屑米の團子、へな餅など食べようとせず。瘦せ細つた身體がま

すく、瘦せて行くやうなのだ。

おせきは三俵だけ残してある合格米の一俵に手をつけ、いつか二俵目にも手をつけた。さすがに勇にだけ旨い飯を食べさせ、あとの連中には別のを、といふやうな譯にもゆかず、ついそれが家族の常用になつてしまつた。

「出来秋まで如何したらいいであらうか。」

そろ／＼それが心配の種になつて來てゐた。月に二俵はどんなに節約しても食べてしまつた。九月の半ばまで、まだ七俵はなければならなかつた。それが一俵、他に屑米が一俵、それだけだつた。

毎年々々のことだつたが、おせきは田植時分からその苦勞のために瘦せる思ひだつた。出来秋まで、何の心配もなく食ふだけのものは貯へて置きたい。置かなければならぬ。それが農家としての不文律でめり、常規でなければならなかつた。でなければ曲りなりにも一家を張つてゐる以上、人様に顔向けが出来なかつた。

早く麥でも賣つて、その金でそつと必要なだけの米を買ひたい。ところが今年はその肝心の麥が自分勝手に賣却することが出来ず、産組へ集めて、政府へ供出するのだといふ。そして麥

俵は出したが、金が……實に、その金がまだ渡つて來なかつた。

全くどうしたらよかつたのか。子供等の小遣錢にも不自由な日がやつて來てゐた。さういふ矢先き、また一つの難問題が降つて湧いた。それは「米の調査」といふこれまで曾て経験したことのない一事件だつた。部落常會で助役さんの説明するところによると、今から一人宛米二合八勺として十月一日までの數量以上を持つてゐるものは、たとひ一俵でも二俵でも政府へ供出しなければいけない。それはこの日支事變を遂行するため、日本が勝つて東亞の盟主になるため、是が非でも必要な處置であり、日本農民の、それが唯一の、この際の義務である……といふのであつた。

常會から歸つた浩平にそのことを告げられると、おせきは夜半まで、まんぢりともせず、あれこれと胸の中で算盤を弾いた。——自家ではどうしても、これから百日と計算して、一家八人、割當だけでも約六俵は必要なのに……それが一俵しか無い。うちには一俵しかございませんなど、調べに廻つて來た役場や農會の方々の前に赤恥をかくやうなことがどうして出来よう。——あと五俵、いや、出來ることなら六俵、それをどうしてこの際、工面したらよかつたらうか。

考へても考へても、たよるのは産組へ出荷した大麥の代金だけしか無かつた。次ぎの朝、彼女は野良支度をしてゐる夫へ言つた。

「あの金、まだ渡して貰へねえのかどうか、組合さ行つて聞いて来てくれねえか。」そして彼女は組合といふものゝ、かういふ實際の不自由をぶつくと、まるで浩平に罪でもあるかのやうに、繰りかへして攻撃した。

やがて組合へ行つて訊ねて來た浩平の答は、四五日中に半金位は渡るかも知れない、といふ空つとぼけたものだつた。彼女のこれまでの経験からすると、四五日などゝいつたつて、それは半月であるか一ヶ月であるか分らなかつた。

「ほんとに何ちう組合だつて。」そのとば尻を、おせきは何時ものやうに浩平に持つて行かなくはゐられなかつた。

「お父ら、暢氣もんだから……米の調べあるつちのに、どうするつもりなんだ。」

「どうするつちたつて、どうもかうもあるもんか。——無えものは無え、有るものは有る、横からでも縦からでも調べた方がいゝやな。ちとらのやうな足りねえ者には、政府の方で心配して、何依でも廻してよこすんだつてからよ。」

「そんな無責任な親父だ。それで、どうしてこの一家、立派に、ひとから嘖はれねえやうに張つて行けるんだ。あすこの家にはたつた一依しかなかつたとよ、なんて世間に言はれるの、黙つて聞いてゐられんのか、この間抜け親父奴。」

おせきは近所に聞えるのを恐れてそれ以上言はなつたが……

さうしてゐるうちに、たうとう調査の日がやつて來てしまつた。が、彼女はその前日から覺悟をきめたやうだつた。土間の隅に積んであるいろ／＼ながらくたや、古俵、吠……そんなものをきちんと整理して、それから軒下の方までおさよと勝に掃除をさせ、浩平が野良へ出てしまつたあと、自分で、調査員のやつて來るのを待つてゐた。

晝近い頃、村長と巡査、農會の書記、それからこの部落の區長とが、ぞろ／＼と門口をいつて來た。

土間から軒下へ出て一行を迎へたおせきは、町寧に被つてゐた手拭をとつて、

「これはまア、本日は御苦勞さんで御座います。」と改つた東京風の言葉で挨拶した。

「いゝ日だなア。」

區長が半白の頭を見せてそれに答へ、それから一行のものは、或は軒下に立ち、或は土間へ

入つて来て、ちろ／＼とあたりを見廻した。おせきは少々上り気味で、誰と誰がどこに突立つてゐて、誰が米俵の方を注視してゐたか、そのときは識別しなかつたが、あとで考へると、「米は何俵あつたかね。」と訊ねて、俵の方へ近づいたのは農會の書記——見知らぬ若者だつたと思つた。

さう訊ねられて、彼女は胸を落ちつけ、そしてはつきりと答へたつもりだつた。

「はい、あの、六俵半……不合格も合せば、ざつと七俵は御座います。」

「え、四俵——」

「七俵つて言つたんだと」と、それまできよとんとして眺めてゐた勝が訂正した。

「どれとどれだね。」

「これと、これと、これ……これ……」

俵へ觸れる彼女の手先はぶる／＼と顫へてゐた。

「あゝ、七俵か……さうすると、こちらは家族八人……少し餘る勘定だな……一俵だけそれでは供出して貰ふことになる譯だな。」

書記は紙片へ書き込んで、それからおせきに捺印させた。やがて調査の一行はどや／＼と門

口を出て行つたが、おせきは失神したやうに、軒下に突立つてゐた。

「おつ母さん、いまのあれ違つてゐるべえな。」

勝が相變らずきよとんとした顔付で、眼ばかり輝かせてゐたが、こんどは、違つてゐても差支へないのかといふやうに母に迫つた。

「馬鹿、汝ら黙つてゐろ。よけいな口きくとぶんなぐるぞ。」とおせきはやつと我にかへつて勝をたしなめた。

瘤

中地村長が胃痛といふ餘りありがたくもない病氣で亡くなつたあと、二年間村長は置かぬといふ理由で、同村長の生前の功勞に報ゐる意味の金一千圓也の香料を村から贈つた直後——まだやつとそれから一ヶ月たつたかたゝないと言ふのに、札つきものゝ前村長の津本が、再びのこと村長の椅子に納つたといふのであるから、全くもつて、「ひとを馬鹿にするにも程がある。」と村民がいきり立つたのも無理はなかつた。

中地はとにかく村長として毒にも薬にもならぬと言つた風の、至極平凡なお人好しで、二期八年間の任期中碌な仕事もしなかつた代りに、これぞといつて村民に痛い目を見せたこともなかつたのである。千圓といふ莫大な香料を貰つたとは言ふものゝ、遺族にとつてはおやぢが八

年間遊んで使つた金に比すれば、それは十分の一にも相當しないと零した位で、かなりあつた土地も大方抵當に入つてしまひ、剩へ醫師への拂ひなどはまだそのままの状態で……

然るに「瘤」と來ては——津本の左の頬には茶碗大のぐりぐりした瘤があるところから、村民は彼を「瘤」「瘤」と呼び、その面前へ出たときでもなければ決して津本といふ本名では呼ばなかつた——實際、中地とは反對に、たつた一期間の前の任期中、數千圓の大穴をあけたばかりか、特別税戸數割など殆んど倍もかけるやうにしてしまつたし、それから、農會や信用組合まで喰ひかちつて半身不隨にした揚句、程もあらうに八百圓の「慰勞金」まで取つて辭めたといふ存在——いはゆる「札つき者」。

「まつたく奴は村のこぶだつたよ。いつまであんな奴にぶら下られてゐたんでは、村が瘦せてしまふばかりだ。」

そんなことで、中地が代つたときは、村民はひと先づほつとしたばかりか、

「早く、たばらねえかな、いつそのこと、あいつ。生きてゐると、村長やらないにせよ、どんなことでまた村ががちられるか知れねえからよ。」などゝ残念がる者もあつた位。

事實、村長はやめても、村農會長、消防組頭、いや、村會へまで出しやばつて、隠然たる存

在ではあつたのである。

さういふ津本新平は今年六十五歳、家柄ではあるが別に財産はなかつた。若い頃、劍が自慢で、竹刀の先に面、胴、小手をくまりにつけ、近縣を「武者修業」して歩いたり、やがて自分の屋敷へ道場を建て、附近の青年へ教へたり、自稱三段のこの先生は五尺八寸といふ雄偉なる體軀にも、を言はせて、三十歳頃から政治に興味を覚え、そして運動員として乗り出し、この地のいはゆる「猛者」として通るやうになつたのであつた。

村會から郡會、郡が廢されてからは縣會と、彼はのし上つた。他を威嚇せず措かない持前の發聲とその魁奇なる容貌——その頃から左の頬へぶら下りはじめた瘤のぬにますく、それはグロテスクに見え出した——政×會に屬してゐた彼は、一方縣警察部の劍道教師といふ地位からか、この地方の官憲と氣脈を通じてゐるといふ噂のために一層「貫祿」が加つた。

従つて彼が縣議をやめて村長になつた當時は、「名村長」と新聞などでは書いたほどだつた。たゞ彼をよく知る村民のみが、「とんだ名村長よ、あんまり人物がでか過ぎて、こんな貧乏村では持ちきれぬえ。」などと笑ひ合つたが。「だが——」と眞面目くさつて説をなす者もあるにはあつた。「顔がきくがら政府から交付金びつたくるには持つて來いだつて。」

事實、小學校を改築したり、荒蕪地の開墾を村民にすゝめて助成金を申請してやつたり、どんな些細なお上の金でも呉れようといふものは貰つたが、その代り村内の出費もこの瘤が村長になるや否や前述のやうに倍加した。それといふのは、村の有志や村會議員が七分通り彼の道場の門下生で、「先生、先生……」と下から持ち上げ、一週間に一回は必ず町へ自動車を吹飛ばすといつたやうなことをやらしたからでもある。

ところで、改築したばかりの小學校舎の壁が剝落して彼の辭職の主因をつくつてしまつた。その壁たるや、實に沼の葭を刈つて來て簀の子編みにしたものを貼りつけ、その上へ土を塗つたのであつた。如何に村民が馬鹿の頓馬で、木像のやうに黙つてゐる存在にもせよ、それだけは許さなかつた。尤も表面は「任期滿了、病氣にて再任に堪え得ず。」といふことではあつたのだが。

辭職後はF町裏に圍つてあつた第二號も「解職」したといふことであつたし、第一、御自身が酒からの動脈硬化で全く「再任には堪え得なかつた」であらうが、然しそれも大したこともなくやがて回復し、旺盛な彼の生活は依然として、それからもつづけられたのだ。ところが、何をいふにも最早や金の流入する道が、小さいのはとにかくとして、日星しいのは一つ／＼塞

がれた形で……。消防組頭、郡農會長、村農會長……それだけでは三人の子供等——長男は賭博の常習犯、次男は軟派の不良、三男は肺結核——の小遣錢まではとても廻らない。かと言つてこの村農會長様は會費の徴集には特殊の手腕を發揮するが、苗一株植ゑるすべは知らないのである。まさかとは思はれが、「食へないから、いよく」。村長にでもならなけりや。」と子分の村議の前で放言したのがきつかけで、中地村長の香料を浮かすために、二年間村長を置かぬといふ村の方針にも拘らず、再選の問題が否應なしに持上つたのだとのこと、表沙汰は、

「この非常時に際して、如何になんでも村長が居なくては……」といふ事だつたが、折りから二・二六事件で、世は騒然たるものがあり、また村から大量の賭博犯人があがる、村議のうち中地派だつた一人の長老が引退し、津木派が五名……といつたやうなことで、かくしてこゝに再度、村へは瘡がくつ付いた次第なのだ……

二

蔭ではいきり立つたが、さて、正面きつて堂々と、それでは、これを如何しようと言ふものも村民の中からは出て來なかつた。それには深い謂れがなくもない。と言ふのは、先づ八名の

村議のうち例の五名までが瘡の門下生であり、吏員の半数以上が嘗て瘡のお伴でF町の料亭で濃厚な情調——多分——を味つた経験の持主と來てゐる上に、村の長老株もまた同穴の貉ならざるはなく、學校長、各部落の區長にいたるまで何等かの意味で瘡の息がかゝるか、或はその弱點を握られてゐるかしないものは無かつたのだ。弱點云々といへば、一見、瘡に對抗して、優に彼を一蹴し得るだらうやうな村内のいはゆる長老有志たち——主として地主連にしてもやはり「さはらぬ神に……」式に黙過してゐるのは、さういふ奴が伏在してゐたからである。たとへば俄分限者の二三の小地主たちなどは何れもコソ泥の現場——夜の白々明けに田圃の刈稻を失敬してゐるとこや、山林の立木を無斷伐採してゐるところなどを、沼へ鴨打ちに出かける瘡のために發見されて「金一封」で事なきを得てゐたし、村内殆んど全部の地主たちは、かつて左翼華やかなりし頃、この瘡の獻身的な強壓のお蔭を被つて滞りなく小作米を取り立ててゐた。

自小作農にいたつては遺憾ながら烏合の衆といふよりほかなかつた。「同じ喰はれるにしたところが、有志たちが十喰はれるとすれば俺たちは一か、せいよく二位のところまで濟むんだ。下手に出て頭でも打割られるよりは黙つて喰はれてゐた方が安全さ。なアに、そのうちまた中

風がぶり返して、今度こそはお陀佛と来べえから。」

ところが瘤自身は中風の再発どころか、再就任以來すつかり若さを取りかへしたもののやうに、今日も出張、明日も出張、どこへ行つて、どんな用事を足してくるのか分らなかつたが、お蔭でまた村では村税附加がぢり／＼きくなつて来た。他村では本税の二三割で済む自轉車税の附加が、この村では九割。家屋税にせよ、宅地税にせよ、何れもそれ位の附加額がくつてくる。自轉車や牛車などは親類縁者をたよつて他村の鑑札でごまかしたが、家屋税附加などにいたつてはそんなからくりも出来ない。農會費、水利組合費、これまた前年度の倍もかゝるやうになつてしまふ。少々は喰はれたつて……と温良ぶつた村民も、内心では次第に悲鳴をあげ出した。

「名村長ちうから村がよくなるのかと思つたら、どうして／＼貧乏するばかりだ。全くあれは生命取りの瘤だつべよ。」

「誰か奴をやつつけて呉れるものが出ないことには、俺たちはいまにすつからかんに搾られてしまふ……」

ところで、それまでになつても、では、俺が出て、ひとつ……といふほどの覇氣のある者も、

まだ、遂に居なかつたのである。

さういふ村民の無力、意久地なさを嘲笑するものゝやうに、更に彼等の無けなしの金を捲き上げる計劃は次から次へと實施されはじめた。村社の修復、屋根がへ、學校長への大禮服の寄贈、(然もこれは貧富に拘らず、校長氏が準訓以來教へた全部の卒業生各自への二十錢の割當寄附によつたもので、一家四五名の卒業生も珍らしくなく、現在通學中の兒童へ一本の鉛筆を買ひ與へることすら容易でないものも既定額を出さねばならなかつたのだ。そして六百何十圓——約七百圓近く集つた金は一錢の剩餘も不足もなく金ピカの大禮服及び附屬品一切代として決算せられたのである。柳原ものではあるまいかと思はれるやうな上下色澤の不揃な金モール服が何と六百何圓——貧乏村の校長氏の高等官七等の榮譽を飾るためにこの瘤村長は通學兒童の筆墨代をせしめたのである。)これにつゞいて學校新築の問題が表面化した。増築案は前村長時代から持ち越されてゐたものだが、それさへ行惱みつゝあつたのに、今度は更に何萬かを加算しての新築案。

「また葭篋の壁の學校こしらへて一と儲けする氣か知れねえが、もうみんな、黙つちやめえで……」

村民は依然として蔭では言ふものゝ、公然とこの案に對して無謀を叫ぶものもなかつたのである。いや、大いにやつてもらつて、教育上、乃至兒童の保健上、現在のやうな雨漏り吹通しの校舎はよろしくない——立派な鐵筋コンクリート二階建の校舎を近村に誇らうではないかといふやうなのが、村當局一般の意向でさへあるらしかつた。

さて、田邊定雄が鮮滿地方の放浪生活を切り上げて村へ歸つたのは、村の事態が以上のやうな進行をして居る最中だつたのである。委しく言へば、津木村長再選後間もない頃のことであつたのだ。この青年は、さる私立大學を途中でやめて軍務に服し、少尉に任官して家へかへり結婚したが、當時、親父がまだ身代を切り廻してゐて、作男達と共に百姓でもしない限り、全く居候的存在にすぎない自分を不甲斐ないものに思ひ、服役中過した南滿の地に再び舞ひ戻つて、滿鐵の業務員、大連の某會社の事務員、轉じて朝鮮總督府の雇員……と數年間を轉々したのであつた。然るに今度、親父の死、それに學閥なき者の出世の困難さにつく／＼業を煮やしてゐた矢先きといふ條件も手傳つて、祖先の地とその業務にかへる決意をしたので……半年間は家産の再検討に過した。親父が可成り放漫政策をとつてゐたと見へて、五町歩の水

田と三町歩の畑、二十歩の山林のうち、半分は手放さなければ村の信用組合、F町の油屋——米穀肥料商——農工銀行、土地無盡會社、その他からの借財は返へせなかつた。三圓五圓といふ村内の小作人への貸金、年貢の滞り——それらは催促してみたがてんで埒があかず、いや、それらの小農民たちの生活内情を薄々ながら知るに及んで、寧ろ何も深く知らず催促などした自分の不明が耻かしくさへ感じたほどだつた。

所有地管理の傍ら、一人の作男と下働きの女中を置いて、一町八反の自作——それが親父のやつて來た家業であつたが、覺束ない老母の計算を基礎に收支を出してみると、明らかに年二百圓の損失であつた。そこへ持つて來て、正確な小作米、畑年貢などが豫期されないとすれば、信用組合、銀行、無盡會社への利拂ひでさへ容易なことではない。まして油屋の方など身代を倒まにふつたと追付くものではなかつた。そこへ持つて來て一方からは神社修復の割當寄附だ。特別税戸數割だ、村農會費の追徴だと果てしがなく、然もそれらは親父の代と比較すると倍に近い數字をもつて現れてくるのである。

「瘤に喰はれるからだ。」といふ例の村人の噂、いや、鬱勃たる不平——表面化することの不可能なその哀れむべき暗い不満の感情が、次第に彼にも傳へられるやうになつた。「改選も間近

かなんだから、ひとつ旦那さんにこんどは村會へ出て瘤を退治してもらはなくては……。」といふやうなことをそれとなく持ちこんでくる知り合ひの者もあるやうになつた。

前村長中地の時代には、彼の親父も村議の一員として村政にあづかつて居たのである。然もどちらかといへど親父は中地派で、内々では津本反對の一人でもあつたのだ。津本が數千圓の穴をあけつばなしで村長を辭めたあとの尻ぬぐひを中地がおめおめとやるのについて強く反對し、瘤に赤い着物をさせる、とまでいつたのも彼であつた位で……が、本來弱氣のこの長老はそれ以上表立つて津本をどうすることも出来なくてしまつたのである。

それにしても村人にとつてこれは一つの「傳統」であつた。反津本派で通つた親父の忤も、同様に反津本派でなければならぬ。そして全村内で反津本派と目されてゐるのは、現助役の杉谷と他の三人の村議——それから有志と稱せられる連中からすぐつて見たら十數名は居ることであらう。これらすべてが一心同體になれば津本を蹴落すことは決して不可能ではないにも拘らず、そこには表立つて行動するだけの氣概のある人間がゐなかつたのだ。

「若いものゝ元氣でやつてもらはなければ、村はます／＼貧乏するばかりだ。ひとつ、村のためだと思つて、どうでせう……。」

改選期も迫るや、田邊定雄は、二三の有志から遂に正式交渉を受けるまでになつたのであつた。彼は躊躇しないではなかつた。が、半面には「名村長」と一戦を交へるのも退屈しのぎかも知れないといふ持前の茶氣さへ出て來たし、それに何よりも先づ瘤式の無謀な村政がつゞけられたのでは、數年ならずして自分の家など潰滅してしまはなければならぬであらう。「皆さんの期待に添ふことが出来るかどうかは分かりませんが、とにかく、それでは出るだけでも出て見ますかね。」

田邊青年は腕を拱いてさう答へたのであつた。

三

豫期以上の票數を集めて彼は村會の椅子を獲得することが出來た。殆んど全部が再選で、依然として瘤派が五名、反對派と目されるもの——實際は甚だしく頼りない連中だつたが——二名、そして彼自身、といふ分野になつた。吏員のうちでは助役以外、老收入役がアンチ瘤派と思はれてゐたが、これも何等の力にはならず、杉谷助役でさへどれだけの肚をもつてゐるのか——恐らく二年間の村長の空席には、自然と自分がのし上るべきものと取らぬ狸の……をきめ

込んでゐた矢先へ、のこ／＼と瘤の野郎に乗りこまれたのが癢で……位のところかも分らなかつたのである。事實この中老助役は、葎簀張りの小學校舎をつくつた時代にあつては瘤から頭ごなしにやられてゐた一戸籍係にすぎなかつたのだ。他の二名の村議——一人は新顔で、年齢も若く田邊と共に三十五六歳、氣骨もあるらしかつたが、——これとて未だ海のものか山のもか分りはしない。

結局、「孤軍奮闘」は覺悟しなければならぬ状態だつた。田邊定雄とて、それは最初から

——出ると決意した以上——免れ得ぬ事實と考へてゐたので、敢て驚きはしなかつたが。

「なアに、無言の、村民の正義感が百萬の味方さ。俺は彼等のために、一人でやるよ、やるのも……」

それにしても今や容易ならぬ事情に村、それ自身が、及び彼自身がまた、乗り上げてしまつてゐることが漸く解つて來た。それは部落のお祭の日であつたが、少し酔ひが廻つたところで、人々の口は新村議の前でかたい堰をこんなふうに破つたのである。

「とにかく此處で一洗ひさあッ、洗はれて見る、村全體根こそぎ持つてゆかれたつて足りやしねえから。」

ふと、大仰に言つてゐる聲に振り向くと、それは造化の神が頭部を逆に——眼鼻口は除いて間違へて付けたのではないかと思はれるほど頬から頰へかけて漆黒の剛毛が生え、額からあたまの素天邊はつる／＼に禿けてゐる森平といふ一小作農であつた。彼が最近、村の産業組合からたつた一枚残つてゐた一反五畝歩の畑を「執行かけられ、」取り上げられてしまつたことは誰一人知らぬものはなく、そしていまその彼が大仰な身振りではじめた話も、實は組合の内幕についてなのであつた。

「何しろお前、看板はかけて置くけど事業といふものは何ひとつしねえで、それで役員らは毎月缺かさず給料取つてゐるんだから……」

「事業やつてねえわけもねえけど、」と古くから組合の世話人をやつてゐる半白の老人が辯解するやうに言つた。「肥料の配給、雜貨の仲つき……。でもあれだよ、みんな組合を利用しべと思はねえから駄目なんだよ。」

「それや誰も利用なんどするもんか、反對にこちとが利用されつちまア。雜貨と申せば何處かの店の棚ざらしか、三日も着ればやぶけるやうなものばかりだし、肥料と申せば分析表ばかり

立派で……まア、それもいゝが現金販賣と來ては、われ／＼貧乏人にや手が出ぬえ。」

「改革しなくちや駄目だ、あれでは……」と言つたものがある。すると森平親爺は、

「改革もへつちやぶれも、もう出来るもんか。縣聯の方から融通受けた金の利子さへ拂へなく、毎期、俺たちのやうな下つ端の、文句のいへぬえ人間の、僅かばかりの借りをいちめて、執行だ、なんだつて……それで漸く一時のがれやつてゐるけど、いまにそれが利かなくなつたら清算と來べえ。そしたら見ろつちだから、理事様らの身代百あはせたつて足りやしねえから……組合員の田地畑根こそぎ渡つても、まだ／＼足りねえから……」

「どうしてまたそんなことに——」

田邊が訊ねると、森平は藥罐頭を一振りふりたて、漆黒の髯の中から唾をとばしつゝ始めた。「たまるもんかお前、あの大正六七年の好景氣時代に、そら貸す、そら貸すで、碌な抵當もとらずどし／＼有志らへ貸し出してよ、それであの瓦落つて土地は値下り、米も値下り、藪も何もかも八割九割も下つちまつたんだもの——いや、それはかりならまだいゝんだよ、瘤らはじめ、無抵當の信用貸ちうのが幾口何萬あるか分らねえんだから……役場員だ、村の有志だつちう人間には、全くひでえ奴等よ、判一つで何百何千でも貸したつちうんだから……無論そい

つがみんな、いまもつてこげついでゐるつてわけさ。利子だつて取れやしねえんだ。取れねえ筈よ、多少土地を持つてゐた人間にせよ、いまでは銀行の方だつて間に合ふめえから、同じ穴の連中のやつてゐる組合の方なんか見向きも出来るもんか。」

田邊の家でも、役こそしてないが、組合の創立委員の一人として、二十五口かを出資してゐる筈であつた。いざ清算となれば、それではどれほどの補償金が背負はされるか分つたものではない。

薄氷の上に建てられた樓閣のやうな組合の内幕から、それに關聯して、Sといふ大字の連中は最初から組合の機能に疑問をいだいて加入せず、主として町の銀行から融通したが、それが最近頻々として差押處分を食つてゐるといふ話になつた。

「銀行と來ては用捨はねえからな。借りにゆく時はこつそり誰にも分らず行けるからいゝやうなものゝ、いざとなればよ。」

S大字の土地は大半町の金持連の手に渡つて、昨日の地主、いまは内實は小作人であると言ふ。

それから話は村農會のことに移つて、此處も何等の仕事もせず、會長である瘤以下の役員の

給料源でしかないといふのであつた。ところが、こゝで話は一轉して、最後に、かういふ内情にある村そのものを、とにかく、ぼろを出さずに「治め」て行くには、瘤のやうな腕力のすぐれた、縣の役人など屁とも思はない「猛者」——これについては挿話があるのだが、——でなければ出来ないことであらう——いや、並大抵の人物では、組合も清算を要求されるであらうし、農會もやつつけられるであらうし、さうすれば勢ひ、役場そのもの、村そのものも打潰されずにはゐまい。瘤が頑張つてゐるから、この村は何かかんとか保つてゐるやうなものゝ、奴が居なかつたら畦一本残らず、他の町村へ持つてゆかれなければならぬであらうといふ者が出て來た。

意外な瘤禮讃を聞くものかなと田邊はびつくりしてその話し手を眺めずにはゐられなかつたのである。全村民の輿望を荷つて出馬したものとばかり考へて、多少英雄的な氣負ひさへ感じてゐた彼は、事こゝにいたつて瘤に對し、乃至村民に對しての自分の評價、考へ方を訂正しなければ、自分自身がどんな陷穽にはまるか分らないと考へるやうになつた。

四

瘤村長に對する全く矛盾したこの村民の態度——一方に於ては自分達を喰ふところの惡鬼的な存在として憎惡・排撃するかと思ふと、一方に於ては腕力的防護者として、彼にたよる氣持——それはどう解釋したらいいのであらうか。田邊定雄はしばし混迷の中を彷徨しなければならなかつたのである。

そこで彼は「瘤のやうな腕力のすぐれた、縣の役人など屁とも思はない……云々」といふ瘤禮讃の根據を想ひ出した。それは彼も薄々聞いて知つてゐる村基本財産査閱事件——津本が縣會議員をやめて「名村長」、大もの村長として自分の村に君臨して縦横の手腕を揮つてゐた時分、誰の差金かは分らぬが——恐らく彼に反對する一派のものゝ投書によつてらしかつたが——抜打的に縣から二人の役人がやつて來て村の金庫をあらためようとした。不意を食つた村當局は周章狼狽、蒼白になつて手も足も出ない始末であつたが、急をきいてやつて來た津本村長は悠然として、應接間に二人の役人を招じ、さて金庫を背に、例の人を威嚇するやうな音聲で「此の帳簿に記載してある通り基本財産は一文も缺けずこの中に入つて居る。それはこの俺が首にかけて證言するから、その旨、このまゝお歸りになつて報告してもらひたい。」

然しお役目大切とのみ思ひこんでゐて、融通のきかない縣の役人は、村長のその言を信用せ

す、あくまでも金庫の中をしらべようとして、鍵を要求した。すると瘤村長はいきなり突立ち上つて鍵をポケットから引張り出し、「さア鍵はこゝにある。だが、俺の言明を信用しないといふんなら、俺にも覺悟がある、いや、信用させて見せる。」

言つたかと思ふと矢庭に自分の坐つてゐた椅子を逆さに引つかみ、大上段に振りかぶり、きつと二人を睨み据ゑた。二人の役人は検印もそこ／＼に退却してしまつた。

改めて瘤禮讚の一席を辯じた男を考へた田邊定雄は、今やその「何故か」を了解したと思つた。彼もまた瘤の腕力によつて自分の金庫を——整理すれば空つぽにならなければならぬそれを護つてもらひたいのだ。そしてそのためには多少は喰はれたつて仕方がないと打算してゐるのだ。「うむ、村民の中には、さういふ考へ方をしてゐるもの——つまり瘤を必要とするやうな状態のものも有るわけなんだ。」

「然らば俺は一體、どちらを代表すればいいのだ。悪鬼の如く排撃する方の側か、それとも多少は喰はれても薄氷上の財産を擁護してもらひたい方の側か……」

とかくするうちに村會の日がやつて來た。いつも半数集ればいゝ方だと聞いてゐるにも拘らず、その日ばかりは「顔合せ」の意味もあるのか（酒肴がつきもの）ぼつ／＼とみんながやつ

て來る。會場は役場の二階であるが、大方——いやそんな形式ばつたところは何時も使用されず、事務室に隣る十二疊の一部屋が會場になるのである。真中に切つた爐にはすで瀬戸ひきの鐵瓶がかけられ、いゝ加減温つてゐる。無論、中味はたゞの湯ではない。村長はまだやつて來なかつたが、村議たちは助役を圍んで雑談しながらちびり／＼はじめてゐるのである。

やがてモーニングを着用した堂々たる瘤の御入來であつた。六十五歳とはどうしても思はれない六尺ゆたかの、よく肥つた半白と言ひたいが、まだそれほどでもない頭髪を綺麗に撫でつけ、無髯のあから顔、そして左頬の下へぶら下つた偉大なる肉塊——それが歩くたびにゆつさゆつさと顔面と共に揺れる。

黙々としてやつて來た彼は、どつかと床の間の正面へ坐つて、先づ煙草に火をつけ、それからぐるりとみんなを見渡した。田邊ともう一人の新顔がこゝぞと思つて挨拶すると、村長は別に氣にとめると言ふ風もなく、「あゝ……」と一つうなづいたとけで、やほら紫煙を吐き、小使の汲んで出す盃茶にも眼もくれず、いきなり猥談をはじめた。

「昨夜は弱つたぜ、『しん六』サ引張つてゆかれたはまアいゝが、あいつが居やがつて……あんなところに。あの『鶴の屋』にゐた小便くせえハア子の野郎さ、あいつが君、くり／＼した

眼のいゝ加減のやつになつてやがてからに、俺を見たら、へんな顔してしまつて、畜生——」
「あれッ、あの阿女つちよか。」と助役が頓狂な聲を上げた。

「それで奴、どうしても俺の前へ出て来ねえ。呼ぶとます／＼そつぽ向いてからに、畜生。」

「そんなこと言つて村長、それからあとでもてつちまつて、今朝おそくなつたんだねえのか。」

これは村議の一人、村で米穀肥料商を営んでゐる澤屋の旦那である。

「そんなら文句はねえが、俺も悲觀しちまつたな。いくら呼んでもそばへも寄つて来ねえと来ては……俺もこれ、いよ／＼女には見離されるやうな年頃になつたかと思つてな、は、は、は……」

「時に——」村長は笑ひ止めて、村議の一人が注いで出す酒を見向きもせず、「別に今日は議案はあるめえ。——俺はもう出かけなくちやならん……」

そして時計を見た。

「なんだね、今日は……」

「例の、それ、陳情さ——また、畜生、東京行だ。毎日々々、いやんなつちもう。」

のつし／＼と瘤をゆさぶつて村長は出かけてしまつた。J沿線の町村長がこの地方の中心小

都市M市までの鐵道の電化を運動してゐたのは一昨年からのことで、それがやうやく實現しきうな氣運になつてゐたのである。

「陳情づらだねえからな。」とひとり村議が役場の門を出てゆく村長をちらりと見ると笑つた。

「でも、あの顔で陳情されたら大概の大臣、次官も参つちまアベ。」

「氣勢だけでか。」

「さてト、俺もそれではこれから陳情に出かけるかな、これ、顔はちつと利かねえが。」

「俺も陳情だ——催促の來ねえうちあすこからよ。」

二人、三人と、みんなそれ／＼出かけてしまつて、残つたものは酒をやりながら下らない雑談であり、將棋の見物である。

二日目の村會には誰一人姿を見せず、三日目には四五人集つて、やはり、雑談と酒、それから内務省へ行つて歸つた村長から、陳情團員の笑話など聞かされてそれでお終ひであつた。議事といへば村社修復後の跡始末——木材や竹切がまだ残つてゐる、あいつを早く片付けさせること、社前の水はきをよくしなくては參詣者が雨降り毎に難儀する……といふやうなことが助役の口から出て、異議なし、異議なし……それだけであつた。

次ぎの月の村會も大小異で、何等議題といふほどのことはなく、雑談と茶碗酒にすぎてしまつた。そして、然もそれだけのことで、一日二圓の日常——三日間で六圓になるのだから「偉い」ものであつた。いや、偉いものといへば、他の村會議員——瘡派の連中は何々委員とか、何々調査員とかいふ役目をかねてゐて、三日にあげずにその邊をうろつき廻り、(たとへばこの田圃の石橋はどうなつてゐるとか、傳染病の豫防施設がどうか、そんなちよつとした通りが、りにも調べられるやうなことを業々しく見て廻つて。) それでやはり日常を取るし、當然、村長の出なければならぬ席上へ代理に出ても日常。(村長は他へ出張。) かういふことその他、役場員自身がまた、社寺、土木、衛生、税務……などそれ／＼自分の分擔事務の名目に於て他村へ「調査」などに出かけ、旅費をせしめる。

ばかりでなく瘡派の連中は、何かは知らぬが始終飲食店で會合したり、でなければこそくと瘡の家へまかり出て夜半まで過すといふやうなことをやらかしてゐるらしかつた。

田邊は無論いまださういふのが實は本當の村會であつて、月一回きめられた日に役場へ會合

するのなど、單にそれは日常の手前、ちよいと顔を出す程度のことにはかすぎない……などは知らなかつたのである。

だから彼は、いよ／＼次年度の豫算案が討議されるといふ月の村會日の二三日前、ぶらりと澤屋米穀商が肥料賣込みの風をしてやつて来て、次ぎのやうに誘ひをかけたことも眞意が解けずにしたつたのだ。

「瘡のところで今夜『お日まち』があるんだ。」「お日まち」といふのは何か起源やいはれは分らないが、親しい同志が寄つて一杯飲むことで通つてゐる。

「どうだい、顔を出したら……」と澤屋は禿げ上つた額をつるりと撫でるやうにしてソフト帽をかぶり自轉車に片脚をかけて、「みんな来る筈になつてゐるんだが、あんたもひとつ……」
「さうよな、でも、どうせ、俺なんか酒はあんまりやらんし、瘡のエロ話も若干ぞつとせんからな。」

「ぞつとするやうなことも若干いふんだよ、あれで……」

あは／＼と高笑ひして澤屋はそのまま行つてしまつたが、それがあとで考へると……

田邊は村社の境内がどうか、學校の新築がどうかいふことより、根本の村政改革問題は

この豫算の徹底的な検討と再編、いや出来る限りの削減、そして徒らに村吏員や村議が日當ばかり取ることを止めてしまつて、それだけ村民の負擔を軽くするにあると考へてゐた。で、彼は今度の會こそ、自分の本分をつくすべき機會であり、それこそまかり間違へば瘡と一戰を交へる覺悟をきめてかゝつてゐたのだ。

役場から古い書類の綴を引張り出して来て、彼は前年度、前々年度の豫算表や、それに對照する收支決算報告書を丹念にしらべにかゝつた。

歳入出計二七・六三九、及び二七・八七七、兩年度とも大差なく、そして見事に收支を合せてはゐるが、ちよつと氣をつけて見ると、會議費二二一、及び二三〇とか、基本財産造成費五八一、——五九八、雜支出といふのが二七九——三〇一とか、その他傳染病豫防費といふのや、衛生諸費、汚物掃除費といふのや、明らかに重複してゐるばかりか如何な風にも小手先で流用し得るやうな支出が多く、また、一體會議費といふのはどんな細目のものだらうと見ると、筆墨、薪炭、用紙、茶、雜などといふもので、それは他の項の雜支出と大して違はない細目である。それからまた「臨時支出」といふ項が別にあつて、そこにも雜支出や、統計費などといふものが擧げてあり、こゝでもダブつてゐる。村會の時いつもがぶく／＼みんながひつかけてゐ

る酒、あれは、それではどこから出るといふのであらうか。まさか、役場費からでもあるまいと思つて睨むと、やはりさうではない。役場費の八、一〇三といふ數字は吏員の給料や臨時手当である。

「馬鹿野郎」と田邊定雄はつぶやいた。要するに報告などといふものは、形式的な、いゝ加減なものにすぎないので、それは何も村役場のそれにのみ限つたわけではなかつたのだ。からく、はもつと内部にある。そいつを俺はしつかりと掴まなければいかんだ。さうしなければ瘡をやつつけるわけにはゆかんだ。

ところで……と田邊は書類を傍へ押しやり、机へ頬杖ついて考へる。瘡をたゞき落すこと、そいつは一先づ問題ないと假定して、何故なら奴の缺點なんか掴まふと思へば歳入出面とは限らず、いくらでも轉つてゐようし、奴に反感をいだいてゐる助役の手許にだつて山ほど集つてゐよう。たゞそのために例の奴を番犬の如くに考へて頼つてゐる一部の連中、信用組合員や農會の連中、あいつ等が何といふかだ。——瘡が嘗て村の金庫を腕力で護つたと同じやうに、現在、彼等は自分達の金庫を名村長瘡の存在によつて守つてもらつてゐると信じてゐるんだ。だが、いかに瘡の存在によつてそれが守られてゐようと、要するに時日の問題でなければな

るまい。無力文盲に近い貧農たちの無けなしの土地を整理して、上部の方を辻袂合せようと、組合の内部は依然として火の車なのであり、いや、ますますそれが悪化して行つてゐるのだ。碌な事業はせぬ、それで取るべき給料はきちん／＼と取つてゐる、では……三年か五年か、それは分らないが、何れにしても瘤にも壽命といふものはあらう、いや、名村長、大もの貫祿はいまや一年減少しつゝあると考へても敢て間違ひではないであらう。

根こそぎ町の金持のところへこの村が持つて行かれるなら、一日も早く、きれいさつぱりと持ち去られた方がよくはないのか。そして何もかも新しく、これからやり直すのだ。村を再建するんだ。

一方に於ては「喰はれる」といつて瘤を非難排斥しながら、一方に於て、大もの、名村長として頼る一部村民の氣持といふものが、こゝに於て解決せられるわけである。番犬としてたよりのながらも、その奥底では始末にいけない村のこぶとして嫌悪してゐるのが結局のところ本當なのだ。裸になるつもりでみんながやれば譯はなかつたのである。

それにあの森平のやうな貧乏人たちは、全部、村をあげて、番犬の必要なんて餘りないのだから、俺の味方に立つて、俺が瘤と一戦を交へる場合は、いつしよにやつてくれなければならぬ譯でもある。——要するに、こぶ、なんかにびた、一文だつて、「喰はれ」ようとする馬鹿はなのだ。たゞ、然らばそれをどうしようといふ勇氣がないだけなんだ。意久地がないだけなんだ。

待望の豫算會議がやつて來た。それは雲の降るいやに寒い日で、田邊定雄は外套の襟をふかく立て、定刻に役場の門をくゞつたのであつたが、少くとも何の議案もない平常と違つて、今日は最も重大な村の經濟問題の討議される日であつた。他の議員たちも緊張して早く顔を見せるだらうと思つて自分も意氣込んでやつて來たにも拘らず、依然として時間をすぎても誰もやつて來るものもなく、事務室の方で、若い書記の一人が、しきりに何かの謄寫刷をやつてゐる以外、役場には誰一人ゐないといつていゝやうな有様。

「どうしやがつたんだい、みんな。」

剛張つた兩腕をぶん廻しながら事務室へ行つてのぞき込むと、書記は面倒くさうに刷り上つた幾枚もの紙を揃へて、更に何かペンで數字を訂正してゐる。

「何だか、それ——」

ふん……と笑つてゐるのを取り上げて見ると、何とそれは、今日討議さるべき豫算案では

ないか。

「ほう……どれ、揃つたら一部見せる。——早くみんな来ねえかな。重大なけふの會議を一體、何と思つてゐるのかな。」

「昨夜、みんな遅かつたやうだから、今日はどうか——」

書記は相變らずにや／＼笑つてゐる。

「昨夜……？ 昨夜、連中、何かあつたのか。」

「瘤の家で……みんなで大體、これ下ごしらへしたんだ。下ごしらへといつても、もうこれで決つたやうなもんだつべ……」

「へえ……」と田邊は眼を剥いた。むか／＼と横腹のところがもり上つた。

そこへ自分と同じくこんど上つた新米議員の半田房之助がのこ／＼やつて來た。爐の前へ近づくの待ちかねて、

「おい、君は何かい、昨夜か、一昨夜か知らねえが、こぶの家へ集つたか。」

「ひま、ちにか——」

「何か知らねえが、豫算會議はこぶの私邸であつたらしい。」

「へえ、俺は知らんね。日まちにちよつと顔を出したが、——澤屋がわざわざ招びに來たもんだから……」

「へえ、澤屋の野郎が、招びに……」

「君のところへは。」

「來たつげが、別に招ばなかつたな。」

「いや、あれが、つまり、その……らしい。」

「畜生、ひとを馬鹿にしてらア——」

漸くのこと——もう晝近い——二三の村議連がやつて來たので、それ以上、田邊は言はなかつたが、心の中では、……

そしてやがて瘤もやつて來た。が、田邊や半田には眼もくれず、「謄寫は出來たか。……あゝ、さう、では、慎重に、研究して置いてくれ、俺はもう出かけなくちやア……」

田邊はぐいと村長をにらんで、

「村長、今日も、またお出かけですか。」

「あゝ、重大な用事があつて……いや、どうも身體が二つあつても足りはせん。」

「豫算の討議は——」

「明日にでもやらう。」

ぐんと突つばねて、肩で事務室への扉をあけ、のつし／＼と出てしまつた。

田邊はます／＼焦れたが、取りつく島はなかつた。他の村議たちは、こぶが居なくなると、もう小使に酒を出させて、例のごとくぢびり／＼……である。

六

さて、翌くる日、割合に早くやつて来た瘤は自派の村議と村長室で何かひそ／＼やつてゐたが、やがて、「今日は會議室でやつべ、みんな、どうだ、そろ／＼……」と言ひながら、自分から先に立つて二階へあがつて行つた。

それが何となく仰々しかつたが、田邊定雄は少しも意外ではなかつたのである。何となれば彼はうか／＼して居ると何等の發言する機會も與へられず、肝心の豫算案を、そのまゝ通されてしまふらしい氣配を感じて、（然も、聞けばさういふのが例年のやり方だつたともいふ。）そこで彼は本式に質問し、修正を申込みたいことを助役へ申出て置いたのである。

席につくと村長は大きな瘤を更に大きく張つてどかりと正面の椅子につき、「にが蟲をかみつふしたやうな」といふ形容詞があるが、それがそつくり當てはまるやうな面構へで、むつつりと壁面かどこかを睨まへてゐる。

「本年度の豫算案について、田邊君から修正したい點があるさうで……」と杉谷助役が村長の傍の椅子へかけるや否や、少しく無雜作にやり出した。そして、「田邊君……」ちよいと眼で。

「大體——」田邊は自席から、「他村なんか比し、本村の公課負擔は重すぎる傾向があるやうだが、——たとへば舟車税附加といふやうなものに見ても、他村では本税の二三割しか附加してゐない。然るに本村では八九割もかけて居る。——それからもつとも大きな問題は特別税戸數割で、これは本村では、收入一圓につき二錢三厘云々……といふやうな賦課率になつて居るが、かういふ點、もう少し村民の負擔を軽くしてやることは出来ないものだらうか、と考へるのだが……」

「どういふ根據で君はそんなことを言ふ。」と村長が不意に威嚇するやうな聲を出した。

「どういふ根據……といつて別に……」

「根據がない。では單に反對するために反對するのか……」

「いや、根據がないといふわけではないが。」

「では、それを言つて見たまへ。」

「つまり……その……村民の生活程度といふものは……」

「それが根據か。君は村民が一年間にどれだけの酒を飲み、煙草をふかすか知つてゐるか。この村に何軒の酒屋があつて、何石の酒が賣れるか知つてゐるか。」

田邊はぐつと詰つてしまつた。

「知つてゐるか。」と村長はたゞみかける。

「さア、そいつはまだ……」

「何がまだだ……そいつも知らぬくせに、何が村民の生活だ。」

「然し——」と田邊はどつきくくと打つ胸を強いて抑へて、「豫算を見ると、節約すべき項目は随分あるやうに思ふ。たとへば會議費……」

「君らにそんなことを言はれなくなつて、節約すべきものは全部節約して居る。」

「然し……」

「何が然しだ。この豫算に一錢でも無駄があるか。乏しい歳入に對してこれ以上の節約だとか

なんだとかど、一體どうして出来る。」

「出来ないことはないと思ふ。」

「ないと思ふ……思つたつて出来ないものは出来ない。出来るといふんなら、どれ、どこで出来るか、一つく、具體的に説明して見る。」

村長は突立ち上つて、すいと田邊の席へ迫らうとする氣配を見せた。一瞬、田邊も突立ち上つたが、

「それは、その……その……」

瘤の激しい見幕に、彼は頭がくらくくしてしまつて、もはや、何をいふべきか、すつかり解らなくなつてゐた。

「その、その……か。うむ。うむ……」と村長は大きく笑つた。それから席につき、言葉を改めて、「他の諸君はどうだね、何か異議があるかね。」

誰も何ともいふのはない。

「なければ裁決したらどうだ。」と長老議員が口を挟んだ。

「裁決——異議なし。」

「異議なし。」とみんなが言つた。
打ちのめされた田邊村議は、しばし顔を上げず、蒼白な薄べらい唇をわな／＼とふるはせてゐた。

それから一週間ばかりたつた或る日のこと、田邊は作業服を着て古い帽子をかぶり、下男といつしよに家の裏手の野菜畑で春蒔野菜の種子や隠元豆、ふだん草、山芋などを蒔きつけ、更に、トマトや南瓜の苗を仕立てるための苗代ごしらへをしてゐた。追々彼自身も村夫子にかへつて野菜作りから麦小麦、やがて田起しまでやる覺悟だつたのだ。

そこへ産業組合の事務をやつてゐる石村藤作がひよつこりやつて來た。この五十男は何の能もないが別に暮しに困らない身分で「遊びかた／＼」組合へ出てゐると公言してゐる至極暢氣に出來上つた人物である。

「やア、これはしたり、百姓のまねなんど止した方がよかつたで。」と彼はいきなり近くの木株へ腰を下ろして、煙管を出し、「いや、こないだは痛けえだつたつちう話だつてな。どうして／＼、田邊君のやうな若い勇士でなけりや出來ねえこつた。」

「な、なんだい。……何を言つてるんだい。」

田邊は薄々分つたが、わざとそんな風に笑つて、種子を蒔きつゞける。

「何を……つて君、瘤の野郎をぐうの音も出させまいと凹ませたつち話よ。——いや、どうして、この村廣しといへども、あの男の前へ出ては口ひとつきけるもの居ねえんだから、情けねえ有様よ。そこを君が、堂々と正眼に構へて太刀を合せたんだから……」

「つまらえこといふな。」

「つまらねえこと……馬鹿な、何がつまらねえことだ。俺ら聞いて、すうつと胸が風通しよくなつたやうだつて、本當によ。——あんな君、瘤のやうな人間、駄目だよ。これからは、はア、時代おくれだよ。若い連中で村政改革やつちまはなくちやア……」

田邊定雄は種子をまき止めず、相變らずにや／＼やつてゐるよりほかなかつた。一體、この男、なんでやつて來て、なんのためにそんなことごでつてやがるのか。

「何か用事かい、石村さん。」と田邊は我慢しきれなくなつて訊ねた。
すると藤作老は煙管をとん／＼木株に叩きつけ、
「うむ、大して用でもねえけど、これ……」といつて懐中から一通の書付を出した。

組合から、年度替りだとの理由で、親父の代にこしらへた借金、元利合計二千百三十圓なのがしといふものゝ催告である。

何が故の、急速な、思ひもかけぬこの催告か——口をあけて首をひねりながら眺めてゐる田邊定雄へ向つて、

「では、よろしく、頼みますよ。」

浴びせかけて、藤作老はすたこらと歩き出した。

「まづ、ちよつと待つてくれ。」

「何か用かな。」

「これは……と、あれだあるめえな、俺ンとこ……いや、借りのあるもの全部へも、やはり同じやうに催告が行つてるのかな。」

「さア、どうかな。そいつは、俺には……」

「だつて君は、事務やつてゐて……」

「事務は事務でも、俺のやうな下ッ端のものには……まア、おかせぎ。」

ひよかくと行つてしまつた。

「無茶だ。」と田邊はつぶやいた。「畜生、なんだと、期日までに返済なき場合は、止むを得ず……強制……執行する場合もあるべく……だつて……へえ、畜生、いゝとも、やつて見ろツちだから……」

ところでその翌日のこと、こんどは油屋の番頭がやつて来て、「いや、先生（先生などゝこの番頭はわざと呼んで）、こないだの村會では……」と藤作老と同じやうなことを言ひ、更に附加へて、「いや、瘤村長の噂はこの地方十里踏出してもまだ知れてゐるんですからね。退治なくてはならんと、みんな言つてゐるやうな始末で……」

そして何の用だと田邊がいら／＼して訊ねると、やはり組合と同じやうな催告状であつた。然もこゝは少し大きく、元利合計三千百何圓なにかし。

つゞいて田邊は農工銀行からも、無盡會社からも、年度替りを理由の催促を——それも前例を破つて、何れも元利合計……まるで破産の宣告でも受けるものゝやうだつた。

何か眼に見えない敵が前後左右からのしかかつて来る。たしかに……畜生、それは何ものなのだらうか。當時、土地は値下りの絶頂で、この地方では水田反三百圓乃至三百五十圓、畑百五十圓乃至二百圓どまりであつた。一々相手になつたのでは無論のこと家屋敷まですつぽろつ

たつて足りはせぬ。

一體、どうしてこんな破目に……俺の信用といふものが……。むしろ瘤と一戦を交へたことによつて——彼はあれをきつかけにあくまでやる覺悟をきめてゐたのである。——村民の信望をかち得た筈の俺ではなかつたのか。

然るに……考へると頭が痛かつた。二日も三日も、彼は一室にこもつたきりで、財産目録を傍に、切り抜け策をたうとうはじめなければならなかつたのである。

「あんた、お巡りさんよ。」

妻の心配さうな顔が、障子をあけて……。それは最早やどうにも對策が考へつかず、一切を投げ出して再び滿鮮地方へでも出かけようかと捨鉢な氣持さへ起りかねない矢先だつた。

「なんでせうね、あんた……」と妻は心配さうに重ねていつてゐる。

「何かな、別に、俺、ケイサツに用のある筈もねえが……」

「今日は……田邊さん——」と巡査の呼びたてる聲。

「あい、何か用か……」

出て行くと、村の巡査は、ばか町寧に、少し世間話をやつてから、

「いや、お忙しいところを……」

と言つて、そして紙片を出し、田邊へ突き出して、

「なアに、何でもないでせう。ちよつと訊ねたいことがあるとか言つてたやうでしたから、多分それでせう。」と説明した。

「ふう……明××日、本人出頭のこと……代人を認めず……ふう。」

田邊は平べつたい顔をひきゆがめ、鼻をくん／＼鳴らしながら、二度も三度もその文句を口にしてゐる。

「なんでもありませんよ……いや、時に、こないだ村會では大いにやられたさうで、村民も大喜びでせう。實際、私からいつてはなんです、瘤のこれまでのやり方といふものは、その、あれですからな……」

「これは、やつぱり、本人が行かなくちやいかんものかな。」と田邊は顔をしかめて呻るやうに言つた。

「はア、やつぱり、本人が……」

次の日、F町の警察へ出かけた田邊定雄は夜になつても歸らず、その翌日もかへらなかつた。

選舉違犯で、彼から「清き一票」を買ってもらつたといふ十數名の村人と共に、ひどい取調べをされてゐるといふ噂が立つた。すると、

「あゝ、それはなんだよ。」とわざと田邊の妻へ言つてくれるものが出て來た。「それは、奥さん、癪神社へお詣りすれば、はア直ぐに歸されるよ。そのほかに方法はないでさ。」

以上のやうなことがあつてから、約一ヶ年半の月日が経過してゐた。あの年の夏に勃發した蘆溝橋事件が意外な發展を遂げて、いまや日支兩國は全面的な戦争状態にまで捲きこまれてしまつてゐたのである。

無論のこと我軍の連戦連捷、そして敵都南京が陥落して間もなくのある日であつたが、背廣服にオーヴァの襟をふかく立てて自轉車をF町の方へ走らせてゐるのは、わが田邊定雄であつた。——ついでに述べて置くが、彼は曾て噂どほり選舉違犯の嫌疑で取調を受けたのであつたが、それは妻が癪神社へ日参したお蔭で、何事もなく済んだのである。止むを得なかつた。田邊定雄は節を曲げて村長のところへ御禮に出かけた。すると村長は先日とは打つて變つて、「いや、なアに、何でもないことだ。俺も自分の村から罪人は出したくないからな……」とか

らくと笑つてゐた。

「ついでに、君——」と村長はしばらく下らない雑談をやらかしたあとで、「今日、忙しいかな——別に用事がなかつたら、縣の社會課へちよつと行つてもらひたいんだが。」

そんなことで、以後、ちよい／＼他の村議諸君と同様、癪のところへ出入しなければならぬ仕儀になつてしまひ、それからまた、組合や銀行や、油屋の方なども、癪の口きゝで片がついたやうな次第——とところでその日も、相變らず癪の代理で、こんどF町に出來た軍需工場の落成祝ひに招かれて行くところだつたのである。

陽脚の早い冬のこと、いつかあたりはもう薄ら暗く、街道は通る人も稀であつた。田邊は宴果てゝからの二次會のことなど早くも空想に描きながら、その頃流行して來た「上海小唄」を口笛で得々とやつてゐた。

「畜生、あいつ奴、意地のやける畜生だな。」彼は口に出して言つた。恐らく二業地の何とかいふ妓のことでもあつたらう。

それはとにかく、一方、田邊の家の下男の助次郎が、ちようどその時刻に、煙草を買ふために、部落の端れの、沼岸に添ふた商ひみせの障子をあけて中へ入ると、

「いよう、あんちゃん——」と言葉をかけられた。見るとそれは同じ部落の、あの髯もぢやの森平で、森平はその日一日、馬車をひいていくらかの貨銀にありつけたらしく、いゝ氣持でコップ酒をひつけてゐたのである。

「どうだい、一杯——」と森平は重ねていつて笑ひかけた。

「ひやア……酒と来ては、はア匂ひでもかなはねえ。」

「ダンボ（旦那）は何だい、今夜ら……町の方さ大急ぎで出かけてゆくやうだつげが。」

「なんだかよ、俺ア知らねえ。——この頃、旦那ら、出かけてばかり居らア、瘤の代理ばかり仰せつかつて……」

すると、「本當かい、あんちゃん。」と森平は變ににや／＼して、「君んところのダンボの左頬にも瘤がこの頃出来かゝつたつて……」

「俺ら知らねえ。」

「知らねえ……よく見てみる。なんでも出来かゝつてゐるつちう話だから。」

「そんなことあるめえ。」

「だつてよ、さつきも、どこへ行くか……ッて聞いたら、なアに……醫者だ、なんて、願を外

套でかくして行けんからよ。」

「瘤なんどばかり殖えて、この村も始末にいけねえとよ、はア……」

店のおかみが笑ふと、助阿兄もどうやら理解したらしく、「なんだ、そんなことか……」ときまり悪るさうにつぶやいて、そゝくさと店を飛出して行つた。

橋の上

「渡れ圭太！」

「早く渡るんだ、臆病奴！」

K川に架けられた長い橋——半ば朽ちてぐらぐらするその欄干を、圭太は渡らせられようと
してゐた。——

橋は百メートルは優にあつた。荷馬車やトラックや、乗合自動車などの往來のはげしいため
に、ところ／＼穴さへ開き、洪水でもやつて来れば、一たまりもなく流失し、さうだつた。

學校通ひの腕白共は、しかし却つてそれを面白がつた。張られた板金が取れて、今にも外れ
さうになつてゐる欄干へ、猿のやうに飛乗り、ぐらぐらとわざと揺す振つたり、ちびた下駄穿

きで、端から端までその上を駈けて渡つたりした。

大概の腕白共——否、一人残らず彼等は手放しなんかで巧みに渡つた。渡れないのは圭太一
人位のものだつた。

三年四年の鼻たれでさへ渡るのに！ しかも高等二年生の、もう若衆になりかゝつた圭太に
渡れない！

これは悲惨な滑稽事でなければならなかつた。

第一餓鬼大將の三郎（通稱さぶちゃん）の氣に入らなかつた。彼は權威をけがされたやうに
さへ思つた。

尤も、圭太はさぶちゃんの配下ではなかつた。誰の配下にも屬せず、一人、仲間はずれの位
置に立つてゐる彼だつた。

と云ふのは、さぶちゃんの腕力が怖いばかりに、誰も彼もさぶちゃんの好きさうなもの——
メダルだとか、小形の活動本だとか、等々を彼に與へて、彼の氣嫌を取り、その庇護の下に小
さい自負心を満足させようとあせつたのに、圭太には、それが出来なかつた。長らく父が病み
ついてゐる上に、貧しい彼の家は、碌々彼を學校へよこすことも出来ないのだつた。

さぶちやんの家は村の素封家だった。K川に添うた田や畑の大部分を一人占めにしてゐるほどの物持ちで、さぶちやんはその村田家の次男だった。三年ほど、腦の病とかで遅く入學して、漸く高等二年生になるはなつたが、算術などは尋常程度のものでさへ碌に出来なかつた。

彼の得意とするところは、自分より弱いものを苛めることにあつた。すでに「聲がはり」のした、腕力と云ひ、體格と云ひ、すつかり若衆の彼に敵對するものは生徒中には一人もなかつた。師範を出て來たばかりの若い先生でさへ、さぶちやんに對しては一目惜かなければならなかつた。

勿論、それは彼の家柄が物をいふ故でもあつたが、海軍ナイフを振り廻す位何とも思つてゐないさぶちやんへの氣おくれもあつたのだ。

さぶちやんは村の子供達の總大將となつて學校への往復を獨裁してゐた。或時は隣村の生徒達を橋上に要撃し、ある時は女生徒の一群を襲つて、その中の、娘になりかかつた何人かの袴の裾をまくつた。

彼は年中誰かをいぢめてゐなければ氣がおさまらぬらしかつた。圭太は、姿を見せさへすれば苛められた。殊に橋の欄干を渡れと何回か云はれて、決して渡つたことのなかつたのが、さ

ぶちやんへ當面の問題を提供してゐたのだつた。

二

圭太はすでに欄干の上へ追ひ上げられてゐた。彼は振り切らうとしたが、それが不可能だつたのだ。さぶちやんは握り太の茨のステッキを持つてゐた。彼の一味の子分達が、またそれぞれの獲物をもつて、圭太を取りかこんでしまつてゐたのだ。

「早く渡らんか！」

さぶちやんはステッキで圭太の尻を小突ついた。

「渡らなけりや、みんなして川の中へ突落としてやるから。」
傍から二三のものが口を出す。

「下駄で渡れ！」

「裸足で渡つたんでは、渡つた分だないぞ！」

「さあ、早く！」

さぶちやんは眼に角を立てた。

仕方なしに圭太は下駄を脱がうとした。渡つて見ないで渡れない圭太だった。それだけでもう身體がふるへて来た。

「下駄で渡るんだ！」

とさぶちやんは命令した。圭太は反抗するだけの勇氣がなかった。否、あつたとしても今の場合どう出来るであらうか。

彼は片手でしつかと鞆をかゝへ、脚に力を入れて立ち上らうとした。が、駄目だった。下を見ると遙か底の方で、青い水がくるく／＼と渦を巻いて流れてゐる。ちよつとでも手を離さうものなら、ふらく／＼と、そのままの中へ落ちてしまひさうである。——實際、いつの間にか、自分の登つてゐる欄干が、橋もろとも傾いて、すうつと上流の方へ走つてゐるやうな氣さへして来た。

「何びく／＼してゐるんだ。早く！ 早く渡るんだ！」

さぶちやんはびしり圭太の尻をなぐりつけた。

「これ位渡れないで日本男子だアねえぞ！ やあい、貴様はチャンコロか露助か、この臆病奴！」

「渡れなけりや、今日一日そこに突立つてゐるんだ、いゝか。俺がついて番してゝやる！」

さぶちやんが云つた。

もう學校は遅れようとしてゐた。誰一人通るものがなかつた。隣村に下宿してゐる一人の先生——それさへもう通つてしまつたに相違ない。眞直ぐな道を見渡しても、誰もやつて来るものがなかつた。

圭太は死んでもいゝと思つた。

「そら、こん畜生！」と云つてさぶちやんに再びステッキを食はせられた瞬間、彼は腰に力を入れ、兩脚を踏みしめ、しつかと胸に鞆を抱き、右手だけを稍水平に差し伸べて、そして一歩踏み出した。

——みんなが渡るんだ。俺にだけ渡れないといふことはあるまい！

だが、二歩、三歩——もう駄目だった。眼の前には、長い／＼糸のやうな欄干が、思ひなしか蛇のやうにうね／＼して伸びてゐる。その前後左右、また上下は、渦巻く青い流れであり、無限の空間である。糸——どこまでつゞくか分らぬそのたつた一本の糸のみが、自分を支へてくれる、そして自分の行かなくてはならぬ道である。

彼はふらくとして、そのままべしやんこと、欄干へ蟹のやうにへばりついてしまった。

「こら、臆病奴！」

「野郎、突き落せ！」

「突き落せ！」

實際、圭太の片足へ腕白共の手が何本かかった。へばりついた手をひつべがさうとするものもあつた。

だが、圭太はその時立ち上つてゐた。さぶちやんやその手下のものを拂ひ退けるやうにして再び渡り出した。

彼はもう前後左右も、青い渦巻く流れも、大空も何も見なかつた。眼をつむるやうにして、足許だけ——ほんの自分が踏み出す四五センチ先ばかりしか見なかつた。

ふらくと定めぬ彼の足は、五歩、六歩と行くうちに、自然に調子が定まり、然も、見よ！ だんくそれが速くなつて、ほう、馳ける！ 馳ける！ 馳け出してしまつたのだ、圭太は！

彼が馳けるにつれて、さぶちやんはじめ、腕白共も駆け出してゐた。彼等は意外だつたのだ。

圭太に馳ける度胸があらうとは誰一人考へてゐなかつたのだ。さぶちやんはじめ、奴が泣いてあやまるだらうとひそかに期待してゐたのだつた。

圭太はもう夢中だつた。顔の形相がすっかり變つてゐた。彼は何も見も思ひもしなかつた。そして次第に早く馳けて、流れの中央へまで行つた時、彼は朽ちた欄干の上を踏みはづして、風のやうにそのまま宙を飛んでしまつてゐた。

三

氣がついた時、圭太は自分の前に、二三の女生徒が立つてゐるのをぼんやりと認めた。

「あら、鼻血が出てゐるわ……まあ……」

一人の女生徒がびつくりしたやうな聲で云つた。彼女は袖から塵紙を出した。そして圭太の顔へかきみかきつて、ぬらくする鼻の下や口のあたりを丁寧に拭つてくれた。

「怪我したんぢやないの？ 圭太さん。」

女の子はしげくと見守つた。

圭太は眼を開いてあたりを見た。それからひりひりする足頸を手で抑へた。

「あら、そこからも血が……」

「大丈夫！ これ位……」

圭太はかくすやうにくるりと起き上つて、ばた／＼と埃をたゞいた。

橋の中央だつた。彼は駆け出したままでは知つてゐたが、あとのことは全然知らなかつた。さぶちやん達はどうしたのだらう。いまは一人も姿を見せなかつた。恐らく誰か先生にでも見つかつて逃げてしまつたに違ひない。

「鼻血がまだ止らないんだないの……圭太さん、これ詰めて置かなげや駄目だど。」

女の子は再び塵紙を丸めて、自分から圭太の鼻へ栓をしてくれた。

柔かい手が彼の肩にかゝり、頬のあたりへかすかにそれが觸れるのだつた。圭太は恥しさに身をよけようとした。

「さぶちやんにやられたんだつべ。」女の子は再び云つた。「あんたのこと追つてたの見えたもの……あの不良のさぶのこと、校長先生に云ひつけてやつか。」

憎々しさに彼女は云つた。他の二人の女生徒も同じやうなことを云つてさぶちやんをけなしつけた。

彼女等はやはり高等一二年の、然もすでに娘の領域に入らうとしてゐる生徒達だつた。さぶちやんに姿を見さへすればからかはれ、悪戯されるので、学校の往復にも、なるべく彼を避けて、時間を遅く、或は早くしてゐる彼女等だつた。殊にその中の一番大きい子——秋野綾子は、さぶちやんの——その年頃の戀人（？）だつた。

ある日、さぶちやんは母親の小さい懐中鏡を持つて来て、綾子や、その他の大きい女生徒が何氣なく癖などによりかゝつてゐるところの足許へそれを置いて歩いた。それを知つた女生徒は、この思ひがけない悪戯に眞赤になつて逃げ出したが、綾子は運悪くも、その一人に屬してゐた。

「綾子の奴、もう……てやがるんだ！ あつははつはあ……綾子の奴！……」

綾子は泣き出した……

その綾子だつた。それを知つてゐた圭太は自分も恰度さうした生理的現象を見た直後だつたので、綾子をそれほど近く自分の直ぐ眼の前に見て、すつかり赤くなつてしまつたのだつた。その故か、また鼻血がどつと出て来て、綾子のつめてくれた紙が、すうつと抜け出した。そして濃い眞赤な血が、する／＼と口の方へ流れ下つた。

「まあ……」

他の二人の女生徒は、怖びえたやうに、両手を胸に合せて祈るやうな恰好をした。

綾子はしかし落ちついてゐた。またしても紙を丸めて自分から圭太の鼻へ強く栓をした。

「堅くしとかないと駄目よ、あんた。頭がぐら／＼しべえ。あんた突き落されたの？」

「いや、たゞ落ちたんだよ。」

圭太は自分の弱虫が恥しくて、それ以上云ふことが出来なかつた。

彼は鼻を片手で抑へながら、片手で鞆を直して歩き出した。もう遅れたかも知れぬ。始業の

鐘が鳴つてしまつたかも知れぬ。

女生徒達もそのあとから駈けるやうにしてつゝいた。

四

その事があつて以來、綾子と圭太の間が非常に近いものになつたやうに思はれた。彼等は腕白共をよけるために時間をかれこれと考へたので、自然道で一しよになつたり、一しよになれば話し合つたりするのだつた。

綾子は中學へ行つてゐる兄を持つてゐた。さぶちやんがこれ以上苛めれば、その兄に云つて「とつちめて」貰つてやるからと云つた。

圭太もその綾子の兄を薄々ながら知つてゐた。もう卒業間際の、がつしりした青年だつた。いかにさぶちやんが海軍ナイフを振り廻しても、茨のステッキを持つてゐても、彼にはぐうの音も出まい！

圭太も心強かつた。

と同時に、着物がだん／＼薄くなる頃で、綾子のもつくりふくれた胸が、圭太に小若衆らしい感情を起さす種となつた。彼は次第に学校の教科書がいやになりつゝあつた。

ある日、さぶちやんが、また橋のたもとに圭太を要撃した。「この野郎！」と彼は云つた。例の握り太の茨のステッキ——彼はそれを学校の前の藪の中へ隠して置いて、往きかへりに必ず提へてゐた——そいつで、圭太を嚇しつけた。

「こら、貴様、この頃俺ちつとも云はねえと思つて、生意氣だぞ！」

圭太は藁のやうに身を縮めた。いまにもそのステッキが自分の頭上か、肩先かへ落ちるやうな気がしたのだ。

さぶちやんの一味は、小氣味よさうに、圭太の前後に立ち塞つた。
「いゝか、こら！」とさぶちやんは云つた。「貴様、綾子と話しなんかしたら、本當にこれを食はせるから！」

すると他の取りまき連中も云つた。

「こいつ、學校出來ると思つて生意氣なんだ。……學校ぐれえ出來たつて何だつちだ。」

「なぐつちまへ！」

「圭太！」と再びさぶちやんが云つた。

圭太は啞のやうに黙つて突立つてゐた。

「こら！ 貴様！」

どしんと胸をつかれて圭太はよろ／＼と二三歩あとへよろけた。

「綾子と貴様は、なんだ？」

「なんでもないさ！」

圭太は一言答へた。

「いゝか、貴様、話しなんかしたら、みる、貴様本當に橋の上から川の中へ突込んでやるから

な！」

「貴様ばかりでなく、誰だつてさうだど。」とさぶちやんはつゞけた。「俺、先生だつて綾子と變な眞似したら用捨はしねえ。ナイフで突つこ抜いてやるんだ！」

それは綾子やその他の大きな女生徒に、笑ひながら話しをする若い先生に對する戦争の宣言でもあつた。

實際、若い先生達は、綾子の——殊に彼女の發達した肉體に異様な眼をそゞぐのだ。

彼等はさういふ風にとつてゐた。

さぶちやんは、往きにもかへりにも、此頃では綾子を待ち伏せ、そして何かを話しかけたり、威しつたりした。

彼女は圭太のやうに意氣地なしではなかつた。さぶちやんなんか恐れてゐないやうだつた。

兄があるからかも知れない！

「不良！ 碌でなし！」

彼女はいつも一喝するのである。

圭太は胸がすぐやうだつた。

圭太はさぶちやんが怖いばかりに、努めて綾子から遠ざからうとしてゐた。が、綾子は反對に、何かと云つては圭太にやさしい眼を向け、話しかけてさへ来るのだ。そしてその度毎に、彼はさぶちやんから威嚇と、時には本當にステッキと食はされなければならなかつた。

夏休みがやつて來た。

圭太は永らく病床にあつた父を亡くした。

そしてそれは彼にとつて、さぶちやんとも、綾子とも、ふつつりと交渉の斷絶を意味してゐた。

圭太は母を扶けて貧しい父なきあとを働かなければならなかつた。

秋の取り入れがすみ、そしてまた春の日がやつて來た。橋の欄干を渡らせられ、綾子の柔かい手を感じた頃がめぐつて來てゐた。圭太は毎日眞黒になつて野良だつた。

綾子は町の女學校へ通つてゐるといふ。そしてさぶちやんは、中學の試験を受けても駄目だつたので、東京へ行つた。何とかいふ學校へ入つたとか――

圭太は時々綾子の姿を見た。やはりあの橋の上だ――しかし朽ちかけた橋は架けかへられて新しいコンクリートの堂々たるものになつた。――彼女はつゞしまやかに制服を身につけ、希望にかゞやきながら、一年前のことなどは遠い昔の忘れられたことほどにも考へないかのやうに、いそ／＼とすつかり娘になつた身體を運んで行くのだつた。

山川中尉

「S上等兵殿、山川中尉殿が呼んで居られます。」と大隊當番が云つて来たから、僕はすぐに
出かけて行つた。

中尉は營内居住室にたゞ一人、窓際の寢臺に腰をかけて、すばり／＼と苛々しさに煙草を
吸つてゐた。

僕が例の禮儀を守つて——とにかくこゝは軍隊だ。上等兵の肩章と中尉の肩章では雲泥の差
異がある——不動の姿勢で敬禮をすると、中尉は大きく笑つて、

「君、今夜もそいつを抜きだ。分つてるぢやないか。S、山川で話をするために僕は呼んだん
だ。——こつちへ来てかけたまへ。」

僕は彼らの傍の椅子を引きよせて、そこへ横ざまに坐つた。

からんとした何の裝飾もない居住室、中央のテーブルの上に、汚れた灰皿と、それから一冊

の本が投げ出されてゐる。その本を見ると、それはやはりトルストイの「人生論」だつた。

「これは讀んだか？」

僕は笑ひながら訊ねた。

「うむ、一日が／＼で讀んだ。」

「どうだね？」

「何の解決も與へてくれん。」

「粉をひく代りに川を研究したね！」

中尉はから／＼と笑つた。それが非常に彼の心を軽くしたことは争へなかつた。何となれば
彼は煙草を投げすて、そのまゝ寢臺の上にごろりと仰向けになり、持ち前の童眼をかがやか
せたからだ。

説明を差し挟んで置かなければなるまいと思ふが、山川中尉はいま「謹慎中」であつたのだ。
彼は自分の教育してゐる補充兵の一人を「殺した」のである。

さうだ、たしかに「殺した」のである、と彼自身は自ら斷定してゐたのだつた。

それは軍規の然らしめたものであつて、彼自身の責任——少くとも彼個人の責任ではない、

といふのが、大隊長及び多数の人々の判断であり、そしてそのために彼は「謹慎」の罰で済むことになつてゐたのだが、中尉自身のしばし語つたところによると、なるほどそれは軍規の然らしめた止むを得ない結果であつたとは云へ、その軍規なるものを厳行したのは自分である。そこに果して個人的責任がないと云へるであらうか。

事件はかうだつた。補充兵の教育期間もやがて終らうとして、最後の検閲を準備するため、教官である山川中尉は、夜間架橋の演習を、その夜指揮した。

夕方、上流の山間地方に大雷雨があつたために、川は急に水嵩を増し、激流が渦を巻いて流れ下つて来てゐた。

架橋演習には、實に「持つて来い」の夜でなければならぬ。然もちようど月もなく、あたりは黒暗々としてゐるではないか。

中尉はすでに川の半ばまで突き出た舟橋の上に立つて「桁前へ！」「板前へ！」と低い聲で命令してゐた。——情況は正にこの川を挟んで兩軍相對峙し、然も味方は漸次、敵を壓迫して、今や敵前渡河を敢行しようとしてゐる矢先なのである。架橋は瞬時の必要物であり、然も敵のたえ間のない射撃と、偵察との只中になされなければならないのである。

中尉の緊張した指揮は、必然的に兵卒の胸へも傳はらざるを得ない。然しそれが現役兵の場合であつたなら、緊張は緊張として、作業を迅速に進めたであらう。然るに教育期間の短い補充兵にあつては、却つてそれが彼等を固苦しく、周章氣味にさへしたのであつた。川はますます激流を増して来る。些細な動作のまづ、さでも中尉からはがみ／＼と叱りとばされる！

橋頭作業兵の中田源三は、殆んど逆上の状態で、中尉の命令とばかりに木舟をあやつり、激流の中を他の一兵と共に、漕ぎ下つたが、舳先にゐる彼と、艀にゐる他の兵との動作が不揃ひだといつては、二人は何回も「もとへ！」を喰つた。

「中田、お前の棹はもつと靜かに！」

「中田、そんなに力を入れると舳先が下流へ行つちもうぞ」

「こら、上野、艀のお前は、舟をどうすればいゝのか、こらッ！こらッ！」

最後にどうやら二人の作業兵は、その自分達の木舟を橋頭へ漕ぎ近づけることが出来た。然し中田はその時、またしてもへまをやつた。どつんとどつともない勢ひで、橋脚へ自分の舟を打つけてしまつたのである。

「馬鹿！」

中尉の指揮刀が棍棒のやうに振り上げられた。訓練の届いた現役兵だつたら、しかし、甘んじてそれを、然も従容として受けたであらう。然し中田源三は、本能的に身をもつて避けようとした。と、その途端、彼は足をすべらして平均を失ひ、激流の中へ逆まに墜落した！

彼は死體として救助せられた。

「僕には私心はなかつたと考へるよ。」と山川中尉は、この事件のあとで、僕にも語つたのだつた。「中田は平常から鈍な奴だつた。命令してもおいそれと應じない。はじめは横着でさうなのかと考へて小つびどく叱つたりしたが、だん／＼見てゐると、全く神経が遲鈍なのだ。百姓の生れだが、とにかく舟は人並みなんだから橋頭作業兵にしたんだ、そいつが俺の第一の誤りだつたかも知れん？」

中尉の心境は、しかし次第々々に複雑化し、深刻化して行つたことは争はれない事實だつた。しば／＼僕は彼と「對等で」——友人として話す機會を持つた。彼は最初——事件の後一週位は——即ち中田の葬式が施行された前後の短かい日時にあつては、中田を單に隊の一兵卒——物質にも等しい一エネルギー、廣大なる國軍の中の無にも等しい一存在と考へてゐたに過ぎな

かつたやうだ。

「軍人には君、平時も戦時もありやしない、いつも戦時なんだ。少くとも演習中は……」と彼は云つた。「われ／＼はさういふ觀念を叩き込まれてゐる。すでに戦争だ。彈丸がびゅう／＼と飛んで来るんだ。僕の小隊の一兵がそれにあたつて倒れる。そいつに拘つてゐたんでは敵の陣を占領することなんか出来やしない！」

然し彼はやがて云つた。

「君、僕は乃木將軍が凱旋する時、編笠でもかぶらにや故國へ歸れないつて云つた氣持がはじめて分つた氣がしたよ。僕は實は、あの爺、なにをセンチなこと云ひやがるんだ。と最初きいた時は思つたもんだ。然し今にして考へるとさうぢやないね。將軍の氣持は、實につらかつたらうよ。人知れず自分の部下が眠つてゐる墓地を訪れて線香をたむけたといふやうなこともだね、實に僕はいま考へて分るね。」

山川中尉にとつて無にも等しい國軍の一存在は、次第にその漠とした境地から姿を現して一個の人間的存在——意志を持ち感情を持つところの、そして自分自身と何等かはるところの人間——にまでせり上つて來たのだつた。

彼は「殺人」の責任を感じ出した。

「俺は中田といふ一個の人間——兵卒ではない——を殺したのだ！」

彼は一晩も二晩も、殆んど眠らずに、その殺風景な營内居住室の窓から、暗い夜を眺めてゐたとも云つた。

「君もとうに氣づいてゐるだらうが、夜が更けてそれこそ森羅萬象が眠り入つた頃——こんなことをいふと君は笑ふかも知れんが——要するにさうでもいふほかはない、その時刻になるとこゝから遠い波濤の音が聞える。岩にくだけるあの物凄い音をちつととしてきいてゐると、僕は中田の奴に骨の髄まで恨まれてゐる、いや呪はれてゐるのだといふやうに感じなくてはゐられないんだ。馬鹿らしいことかも知れんが、どうも眞實だから仕方がない。」

僕は彼の神経質を笑ふことが出来なかつた。ほんとうに彼は惱み出したのだ。

「君、死人は肉體が亡びたのであつて、精神は……といふやうなことをわれ／＼はよく聞かされる。然しそれは本當だらうか。」

その質問に對して僕はトルストイの「人生とは何ぞや」を彼に提供したのだつた。然しそこに何等の解決がひそんでゐるとも斷言したのではなかつた。たゞ、人の死による精神と肉體と

の古來の「傳説」のいかなるものであるかを彼に見せようとしたまでであつたのだ。

だから彼から呼ばれて、幾度目かの彼との、對等の友人としての會話に入つたその夜も、僕は彼が「粉の代りに川を研究した」に過ぎなかつたことに對して、それ以上、もはや、何も云はなかつた。彼が寢臺の上へ引つくりかへつて、その童眼をかゞやかせたことそのことで、僕はトルストイを放棄しようと思つた。

「どうだい、波の音でも見に行かうぢやないか。」と僕はつゞけて云つた。「もう謹慎も間もなく解けるんだらう。」それが彼を現在の境地から何等かの轉換へ導く一つの方法ではないか。

「うむ……」と彼は唸つた。「それもいゝね。然し君、僕は軍人を止めようと考へてゐるよ。そのことについて今夜、僕は君に話したかつたんだ。」

「軍人を止める？ まさか坊主になつて中田の「めいふく」でも祈るつもりではあるまい。」

「いや……然し或はさうかも知れんね！ いや、事柄はもつと深刻だよ。」

「どんな風に？」

「僕は君、僕の未來を考へた。社會の情勢を少しばかり君に教授されたから考へた。戦争は必然だ。すると君、僕は小隊なり、中隊なりの指揮者として實際の戦線に立たなければならぬ。」

十人の中田、百人の中田……」
と云つて彼は言葉をつめた。

「うむ、分つた、分つた！」僕は叫ばずにはゐられなかつた。
僕等は沈黙してしまつた。むつくり起き上つた山川中尉は窓際へ行つて、ちつと暗夜の下を
のぞき込んだ。

じめ／＼した暑い夜だつた。風の方向のためか、例の波濤の音——三里を隔てたS海岸の、
岩にだける遠雷のやうなとどろきが、今もかすかに聞えてくる。

「僕は止めるよ！ どうしても止めるよ！」

中尉はやがて断言するものゝやうに云つて、くるりと振向き、僕をのぞき込んだ。

「君は反対かね！ 僕の行かうとしてゐる道は間違つてゐるかね。そいつを僕は、今夜君から
判断してもらひたかつたんだ。」

「俺も考へてゐた！」と僕は彼の言葉を引き取つた。「君の心はきつとそこへやつて來ると思
つてゐた。」

「さうか」

中尉はかすかに微笑した。

「然しだね。」と僕はつゞけた。「止めてどうする？」

「そいつは分らん。」

「分らない。」

「うむ、然しそんなことは今の問題ぢやないと思ふ。第二段の問題だ。とにかく僕は「謹慎」
によつて中田を「殺した」僕の罪は消えないと信ずるんだ。」

「うむ、その消えるのは？」

「今後の僕の生き方……」

「さうだ。」と僕は性急に引取つた。「軍人としての君の生き方……」

「軍人としての？……」

と中尉は意外さうに、鸚鵡返しに言つて、「それはどういふ意味なんだ。」

「君の讀んだ「人生論」は、それとは教へないかも知れない。」

「うむ……」と中尉は呻つた。

が、僕等の對話は、こゝで打切られなければならなかつた。點呼ラツバが鳴つて、中尉も僕

も點呼に立たなければならなかつたのだ。

さて、數日して僕は勤務演習の期間も終つて退營した。山川中尉とは、その間しみぐ話す機会を持たなかつたのだが、或はいまにして考へると、その方がよかつたかも知れないと思ふのである。

といふのは、退引ならぬ現實が、つまり××事變の勃發と共に、急遽、特別の任務を命ぜられて、自分一個についての思考の暇など與へられず、北滿地方へ赴任しなければならなかつたといふ突發事が、彼を否應なしに、その「軍人としての生き方」の中へ突入させたのだ。

一ヶ月ほどして僕の手許へ届いた山川中尉の手紙には、

「俺はこの曠漠たる新天地に屍をさらすつもりだ。……ふつつりと打切られてゐた例の中田への責任感が、何の雜作もなく、すらくと解決がついてゐたのには、自分ながら驚いた。死、死——軍人としての死、それが即りも直さず唯一の解決、絶對の解決だつた。僕の氣持は今、すつきりと青空のやうに澄んでゐる。何のために下らぬことを惱んだのかと、振りかへつて見ると可笑しい位だ。……では、左様なら、親愛なる友、永遠に……。」

竹馬の友

玄關へ投げ込まれた郵便物の中に、實に思ひがけない、否それ以上に、まづたくこ、數年間その存在さへ考へたこともなかつた石島辰夫からのお粗末な封筒が一つ混つてゐた。

石島は私の「竹馬の友」の一人である。明朝、快活、一點の曇りもない、そしてユーモラスな性格な男だつた。彼の一言一句は、何とはなしに私達を笑はせた。

たとへば、私たちが約一里半を小學校へ通つた道は、一部、沼岸に添ふてゐる。春先のまだ薄ら寒い季節、一疋の鶉鳥が、岸から三百メートルばかりの黒い杭の頭へ、毎朝のやうにちよこ、なんととまつてゐる。まづたくそれは造りつけの標本のやうにいつもきまつた方を向いて、嘴一つ、羽一つ動かさずちよことしてゐるのだ。それを見た石島は、いきなり、

——あら、あん畜生、飯も食はねでまたとまつてやがら！

飯も食はないで、といふ形容が如何にもよく當つてゐるので、私達は腹を抱へて笑ひ出した

のだつた。

ある時は、また、鹽はどうしてこしらへるのかと、先生に問はれての答へが、われ／＼一同を爆發させた。

——海の水ウ——田ン中サアかつ汲んでイ——そいつを乾かしてイ——釜で煮てイ——……
そしてこしらへるんであります。

彼のこの答へは音譜を使はずには正しく表現することが出来ない。最初、非常な勢ひで起立して——そのために机の蓋が吹つ飛んだ。——そして、「海の水ウ——」と咽喉一ぱいにどなつたものだ。それから「田ン中サア——」と段々低くなつて、最後の「そしてこしらへるんであります。」は殆んど聞きとれない位の速さと低さとだつたのである。

第一、方言そのまゝを何の憶面もなくどなつたことが我々の度膽を抜いたのだつたかも知れなかつた。次に製鹽の過程が、無論誤りではないが、餘りにも簡單過ぎて、然も明瞭だつたことに、少なからず我々はびつくりしたのに相違なかつた。

先生までが笑つてしまつた。

石島はその教室中の、爆笑の中に如何していゝのか迷つてしまつて、徒らに頭を掻きながら

眼をきよろ／＼させてゐた……。

それから彼は、明笛の「名手」だつた。然もこれは私自身に見做つて吹き出したのであるが、大ざつばな吹き方の彼には、細かいメロヂーは適しなかつた。勢ひ、もつとも簡單な「廻れ獨樂」といふやつに、彼は熱中したのである。

ところで「廻れ獨樂」まではどうやらよく行くが、次の譜の「廻る心棒は鐵なるぞ、鐵なるぞ……」に到ると、なか／＼指がいふことをきかない。彼はやけになつて「鐵なるぞ、鐵なるぞ……」とやつてゐたが、終に斷念してしまつたと見えて、いまやお得意の「廻れ獨樂」だけに限るやうになつた。

彼はそれを私の屋敷の、沼に臨んだ椎の木へ登つて、その頂上で吹くのだつた。——「廻れ獨樂、廻れ獨樂……廻れ獨樂、廻れ獨樂……」そして永遠無限に「廻れ獨樂。」

彼は毎朝、實に規丁面に、私の家へ寄つて私を誘ひ、そして學校へ通つた。成績は中位であつたが、その磊落な持ち味のために、我々仲間に缺くべからざる存在をなしてゐた。

さうした石島辰夫だつた。

小學校を卒へると、彼は一、二年百姓をしてゐたが、何時か村の停車場に驛夫妻となつて現

れるやうになつた。私たちは自然學校が卒へると往來が杜絶えたのだつた。それは別に理由があるわけではない。たゞ彼の部落と私の部落とを隔てる十町ばかりの距離や、忙しい百姓仕事などのために、ついそんな風になつてしまつたのである。

そのうち私は兵隊に出た。一年おくれて彼も検査を受けて甲種合格、そして歩兵にあがることになつた。私は兵營にゐて耳にしたのだつたから、無論、くはしいことは分らないが、彼はもう十日ばかりで入營しなければならぬといふ矢先、一臺の自轉車を——多分驛の前あたり乗り放しにしてあつたやつだらう——失敬して賣り拂ひ、そのために何ヶ月か食ひ込むことになつた。

女のために金が必要だつたのだ。その女といふのは例の驛前の「あいまい茶屋」——さうした家が二、三軒あつた——の一軒の、何とかさん——あとで名前をきいたのだが、忘れてしまつた——だつた。それ以上、私は深く知らない。

彼とその後逢つたのは、簡闊點呼の場所だつた。それもずつと退營後五、六年してである。何となれば彼——石島は、またしても二年間食ひ込んだのだ。それはやはり女に關連があつたらしい。以前の何とかさんかどうかは知らないが、とにかく金に窮して今度は「強盜」に押し

入つたのだ。強盜といふのは當局の罪名であるが、とにかく彼は覆面抜刀で知り合ひの小料理屋へ押し入り、なにがしかのものをせしめたのである。

點呼の場所での石島は、以前のユーモラスな存在、明朗、快活な彼とは、實に打つて變つて、憂愁につままれた、深淵でも見るやうな男だつた。彼は人を避けて、誰とも口をきかなかつた。無二の親友だつた私を見てさへ、たゞかすかに首を下げて挨拶しただけだつた。こちらから近づいて行つて何か云つても、碌に返事もせず、ぶいと横を——寧ろ地面を見てしまつて、一歩二歩と遠ざかつてしまふ。

顔面や容姿まで變化してしまつたやうに思はれた。赤黒い頬は蒼白になり、童眼は暗く深く沈み、微笑してゐるやうな口許は、すつかり引きしまつて、始終びく／＼と顫へてゐるやうだつた。そしていつも活氣よく動いてゐた身體全體は、棒のやうに硬直してしまつてゐた。

それは犯罪者として彼自ら、かくも人から自分を區別し、ひげ、目を感じて、碌々言葉を交さうともしなかつたのに相違ない。然しさうした彼の態度について、私は寧ろ氣の毒だつた。何故、公明正大に、少くとも私にだけでも對してくれなかつたのであらう。

その後、私は暫く彼の消息をきかなかつた。故郷を離れて、東京に放浪する身分であつたか

ら、それも當然であるが、然し彼もまた故郷にはゐなかつたのだ。

ところが、やがて彼が妻帯して、そして地道に百姓してゐる……といふ話しを、私は故郷の妹からきいた。漸く本道へかへつたかとうれしい氣がした。

が、それも東の間だつた。次に私へ傳へられた話しは、彼が妻を賣りとばして——玉の井と

かへ——それから自分でも何處かへ姿をかくした、といふことだつた。

またしても、刑務所の「ご厄介」になつてゐるといふ噂を耳にしたのもその直後だつた。

——一旦ぐれ出すと、な……。

私へそのことを話した村の一青年は、意味ありげに、さう附加へたのである。

ところで、再び私たちは點呼場で相見る機會を、それから數年後に持つた。

——石島君！

私は近よつて行つて肩に手を置いた。

石島はひどくびつくりしたやうだつた。刑事にでも呼びかけられ、ぼんと肩をたたかれでも

したやうに、ちよつとの間、口をびくつかせてから、かすかに微笑した。

——暫くだな。

この言葉がまたひどく彼にひびいたらしかつた。

——いや……と曖昧に答へたまふ、彼は例の横を——地面を向いてしまつた。

恐らく彼は何も話したくなかつたのだ。

——東京の方へ來たら、どうだね、寄らないかね。

——有りがたう。

實際、それは別人と話してゐる感じだつた。石島はもう昔の石島ではない。何が彼をかうま
で變らせてしまつたのか？

點呼が終るや、彼はこそくと、誰からも離れて、一人すたくくと去つてしまつた。

その日／＼のパンに追はれてゐる私は、彼のことにについては、その後殆んど想ひ出さなかつた。然し、ふとある夜、用事のかへりに新宿の明るい街を通ると、散歩の人群れの中に、どうも彼らしい姿を發見したのである。

それは夏のことだつた。ヘルメット帽を被つて、りうつとした和服姿の紳士——薄い髯が生えてゐた。握り太のステッキを小脇に抱へてゐた。——その棒のやうに直立した姿勢、ちつと何ものかを見つめてゐる眼、蒼白に瘦せた頬。

彼だと思つたが、何故か私は言葉をかけることを躊躇した。ちよつと立止りはしたが、颯々と歩を運び去る彼の姿を、そのまゝ見送つてしまつた。

彼は振りかへらなかつた。恐らく私のことは眼にとらまらなかつたのであらう。私は再び歩き出しながら、彼の現在のことなど考へさせられた。何をして生活してゐるのであらう。服装から推すと、「壯士」とでも云ひたい彼であつた。政黨にくつついて、その力をだしに、人をゆすつたり、おどかしたりする、だにのやうな存在。——然し石島の少年時代を振りかへると、私はそれを否定したかつた。

彼は何か職業にありついたので。そして家庭を持ち、子供を持つて……たゞ、あゝした風をしてゐるのは、例の犯罪者として自ら感じてゐる——感ずる必要もないのに——卑下、自屈、さうした感情を隠すためなんだ。

不安と安堵との混合したその當座の私の氣持は、然し再び破れなければならなかつた。またしても彼は刑務所だといふ噂が、その後間もなく故郷から私へ傳へられたのである。

——一旦ぐれ出すと、な……。

何時か故郷の一青年の口から出た言葉が、どうやらそのまま私の考へとなつて、それからす

つと、私は彼については何も知ることがなくて過ぎてゐたのであつた。

ところへ、彼の手紙なのである。

私は急いで封を切つて見た。彼は昔、小學校で作文をつくらされた時のやうな字體で次のやうに書いてゐた。

「暫らく御無沙汰に打過ぎましたが、お變りもなき由、先日我々の「竹馬の友」であつたK君に逢つて聞きました。小生もまつたく今度は「眞人間」にかへつて、そして眞人間として働いて食ふ決心をいたしました。只今、××町の小さい印刷所につとめて居ります。

小生の過去については、どうか咎めないで下さい。小生自身、今や生れかはずともりで、こつ／＼と毎日活字をいぢくつてゐるのですから。

時に、非常に突然で失禮ですが、かくの如く「生れかはつた」小生と共に働き、共に生活してくれる女性が欲しいのですが、貴兄、お世話してくれませんか、これは小生の衷心からのお願ひです。女性の身許や経歴については、勿論とやかく申しません。本當に小生と一しよに、「夫婦」として働いてくれる人でさへあれば、顔など醜くからうと、決して意に介しません。

兄よ！ どうか小生のこの一生涯の望みを叶へてやつて下さい。」
手紙を貰ふと同時に私は返事をかき、直ぐに彼のためによき配偶者を探しにかゝつた。が、
なか／＼お嫁さんになつてくれようといふ女の人がなくて困つてゐる。

一 老人

—

「諸君！ 我輩は……」

突然、悲憤の叫びを上げたのである。

ちようど甥が生征するといふ日で、朝から近所の人達が集まり、私もそのさゝやかな酒宴の席に連つてゐた。

障子の隙間から覗いた一人が「四郎右衛門の爺様」だと云つた。

怒鳴つた爺様は、さめ／＼と泣き出したのである。着物の袖と袖の間に顔を突込み、がつくりとして聲を發してゐたが、やがて踵をかへし、すた／＼と門口へ消えて行く。

「氣でも違つただちやあるめえ。」と一人が云ひ出した。

「酔拂らつてゐたんだねえか。」

「いや、この二三日酒はやらねえ様子だつけない。昨日もなんだか譯の分らねえこと喋くりながら人に行逢つても挨拶もしねえで、そこら歩いてゐたつけから。」

「どうも可怪しい。」「普通ぢやねえな。」

私はまたこの老爺に直接顔をつき合せたことがなかつた。家内はしばし道で逢つて話したり、村の居酒屋で老爺がコップ酒を楽しんでゐるところへ行き合せ、限りもない追憶談の中へ引き込まれたりしたらしく、時々、老人のことを噂するのであつた。

「ひとりぼつちで淋しいんでせう、うちへ遊びに来るなんて言つてたわ」

東京生活をした者は、やはり東京生活をしたことのある者とでないと話が合はない、と口癖のやうに、話し合つた最後には附加へたといふ。

四郎右衛門といふ家は、同じ部落内のことで、私は幼いときから知つてゐた。然しこの老人の存在は、私の智識の範囲外にあつたのである。まる二十ヶ年の私の不在の間に、この家は空家になつてしまつてゐた。私の記憶にあるのは、陽だまりに草履や笠を手づくりしてゐる一人の老婆と、さゝやかな呉服太物の包を背負つて近村を行商して歩いてゐた四十先きの女房の

姿である。この二人のほか、誰もこの家には居なかつた。亭主に死別れたこの女房には一人の子供があつて、それは何處か他縣の町に大工を渡世としてゐるとかいつたが、絶えて故郷へかへるやうな様子は見えなかつたのだ。

いま聞くところによると、無人のこの家に起居してゐる老爺は、舎弟で、つまりあの呉服もを行商して歩いてゐた女房の亭主の弟で、少年時東京に出され、徒弟から職工と、いろくゝの境遇を経て遂に老朽し、職業から閉め出しを喰つた人であつたのだ。

彼には一人の娘がある。それが浅草邊で藝者をしてゐて、月々老爺の生活費として十五圓宛送つてよこす。

「結構な身分さ、たとひ藝者だらうと淫賣だらうと。……こちと等の阿女らみてえにへつちやぶれた顔してゐたんぢや、乞食の婢にも貰え手ねえや。」と村人は唇邊を引歪めて噂した。

恐らく娘の手になつたものであらう、小ざつぱりした着物をひつかけて、老爺が沼へ釣りに行くところなどを、時々私も望見した。

村に百姓をして一生を過ごすものゝ夢想することも出来ないやうな安樂な老後を送つてゐる爺様が如何して發狂したのだらうか、といふことについて、やがて一座のものは、あれこれと探究し合つた。「半五郎に屋敷の木を伐られてから可怪しくなつたらしいな。」と或るものが出た。

「うむ、酔拂つてそんなこと云つてゐたことがあつたつげな、どこの牛の骨だか分らねえやうな他人に、この屋敷手つけられるなんて、自分の手足伐られるやうだとか何とか、大變な見幕でいきまいてゐたつげで。」

「でも、權利あるめえから、伐られたつて文句の持つて行きどころがあんめえ。」

「それはさうだけんど、これで自分の生れた家となれば、たとひ權利はなくても、眼の前で大きな木を伐つとばされば、誰だつていゝ氣持はしめえで。」

「半五郎も困つてやつだんだつべけん、少しひでえやな。」

半五郎といふのは、同じ村の人で、他村から婿に來たものではあるが、娘を、この四郎左衛

門の養女にやつた——つまり他縣へ出て大工をしてゐる嗣子に子供がなくて、その人へ娘をやり、現在は大工なる人も死に、その娘の代になつてゐる、そして遠方に身代を持つてゐる關係上、親である當の半五郎が後見人として、こちらの家屋敷を管理してゐる、といふ事情になつてゐるのである。

「そこは人情でな、たとひ厄介な奴がころげ込んで來てゐるとは思つても、爺様と相談づくでやるとか、いくらかの金を分けてやるとかすれば、あんなことにもならず済んだんたつべがな。」

「どうして〜、そんなことする半五郎なもんか、家の前の柿だつてもぎらせまいと、始終見張つてゐたんださうだから。」

「それに、藝者をしてゐる娘つちのもの、最近、旦那が出來て、何處か、淺草とかに圍はれてゐるんだちけど。」

「それぢや、月々の十五圓も問題だつて譯かな、此後は。」

「まア、自然さうなつべな。いくら旦那だつて、これで毎月十五圓づつ、妾が送るのをいゝ顔して見てもめえしな。」

「結局、金だな。金せえあれば、人間これ發狂もく、そもあるもんか。金がねえから氣がちがつたり、自殺したりするんだよ。」

「は、は、ア……」と大笑ひして、一座は、それから他の話題に移つてしまつた。

三

村人殆んど總出で出征兵を送つたあと、また、親戚や近所の人達が集まつて、「一杯」やつてゐた。

するとそこへ四郎右衛門の老爺が再びのこ／＼とやつて來るのであつた。庭先に立てられた「祝出征……」の旒を、彼はつく／＼と見上げてゐたが、やがてまた、袖と袖の間に顔を埋めてさめ／＼と泣きはじめた。

泣いては顔を上げて、風に揺れる旒をしみ／＼と眺め、そしてまたしく／＼とすゝり上げるのである。

たうたう老爺は、みんなの集つてゐる縁先近くへやつて來た。「諸君……」悲痛な叫びをまたしても上げたのである。それからあとは、地面をみつめ、聲をあげて泣き、やゝあつて、

「わしは、農村の穀つぶしです。自殺しようかと思つて考へてゐるんです。」

そして右手を上げて、いきなり涙を打拂ひ、すた／＼と庭先から往來へ飛出して行つた。

「いよく怪しいな。」と人々は顔を見合せた。

「飲んだんだあるめえか。さつき郵便屋が書留だなんて爺さまへ渡してゐたつけから。」

「久しぶりで娘から金が來たか。」

「さうらしかつたな。」

「でも、あの顔は飲んだ顔ぢやなかつたぞ。」

「本當にキの字だとすると、これ近所のもが大變だな。」

心配し出したものもあつた。然しながらその翌日のこと、老爺は附近の家々を一軒々々廻つて歩いて、「俺は決して氣なんか違つてゐない。若いものはみんなあゝして次ぎ／＼に戦地へ出て行く。戦地へ行けない男女老若といへども、それ／＼自分の職に勵んで、幾分たりとも國のために盡してゐる。然るに自分は……」

さう云つて矢張り泣き出したといふ。ある家へ行つては、「自分は失職しない前、砲兵工廠につとめて、何とかいふ大佐から感状をいたゞいたこともある。然るに現在は、安心して居れ

る家とてもなく、娘などから金をもらつて辛うじて生きてゐる。こんな不本意なことはない。」といつて、またしても泣き出してしまつたといふ。

ある家では、親切のつもりで、酒なんか餘りやらぬがいゝ、酒を過すと頭も變になる……と忠告すると、ぶり／＼怒つて、「第一、酒なんかやる氣になれるか、現在を何と思ふ。俺は昨日娘からまた金をもらつたが、これ、この通り一文も手をつけねえで持つてゐる。俺のことを金がなくて氣狂ひになつたなんていふ奴もあるといふが、俺は、そんな男ぢやねえ、見損つて貰ふめえ……」

そして蹴飛ばすやうに出て行つたとか。

「ます／＼變だ。」と村人は噂し出した。

近所を歩いたといふ日、老爺は私の家へも立ち寄つた。訪ふ聲がするので起き上りかけると、

「奥さんはお留守ですか。」と家の中を覗き込んだが、そのまゝ立ち去つてしまつた。

老人が死んでゐると聞いたのはそれから三日とは経たなかつた。夜半まで、近所の人々は、老人の軍歌を歌つてゐる聲、行進するやうに踊つてゐる足拍子を聞いたといふ。四郎右衛門とは昔から縁つづきの四郎兵衛といふ家の若者が、朝十時頃になつても老人の起き出す氣配がな

いので行つて見ると、寢床の中から裸の半身を乗り出して、まだ歌ひ踊つてゐるやうな恰好の老人を見出した。

検死の結果、心臓麻痺と診断された。娘から來た十何圓の金は、そつくりそのまゝ枕頭の財布の中に入つてゐた。

「紙幣を握つて死ぬなんて、極樂往生ぢやねえか、なア。」と村人はこの老爺の死をうらやんだ。

競馬

行つて来るぜ……なんて大びらに出かけるには、彼はあまりに女房に氣兼ねし過ぎてゐた。それでなくてさへ昨今とがり切つてゐる彼女の神経は、競馬があるときいたゞけでもう警戒の眼を光らしてゐたのである。

「けふは山だ！」

仙太は根株掘りの大きな唐鍬を肩にして逃げるやうに家を出た。臺所で何かごとくやつてゐた妻の眼がちろりと後方からそゞがれたやうな氣がして、彼は襟首のあたりがぞつとした。彼はそれを打ち消すやうに、えへんと一つ、咳拂ひをやらかしてそれから懷中へ手をやつた。そこには五圓紙幣が一枚、ぼろ屑のやうにくしやく／＼になつて突込まつてゐた。

一度家の方を振返つて見て、女房の姿が見えないのを確めると彼はその紙幣をくしやく／＼のまま引出して煙草入のかますへ押し込んだ。貧すれば貪する！ それは實際だつた。地道にや

つてゐたのでは一回の小遣錢をかせぎ出すことをさへ不可能な村人達は、何か幸運な、天から降つて来るやうな「儲け仕事」を殊に最近熱烈に要求した。

馬券を買ふなどいふ事もその一つの現れだつた。世間がこんなに不景氣にならない前は、そんなことはばくち、打ちのすることであり、有閑人の遊びごとであり、唾棄すべき破廉恥事に過ぎなかつた。が、一枚の馬券がたつた五分間で、五圓も十圓もかせいでくれる！ そいつを考へるとなあ君、馬鹿々々しくつて百姓仕事なんか……と捨鉢氣を起して、俺だつて人間だ、馬券買つて悪からう筈はあるめえ！

見事に五圓札を二倍にも五倍にもして歸つて来る者があつたのである。さうした事實が——これこそ正に、求めに求めてゐた幸運、天から降るのか地から湧くのか知れないが、とにかく小判が轉がつてゐるやうなものだつた——そいつが疫病やみのやうに村人の魂へとつゝいてしまつた。

競馬は春秋二季、恰も農閑期に、いくらかの現なまが——たとひそれは租税やなんかのためには不足だつたにしても——村人のふところへ宿かりした時分にあつたのだ。仙太が今、女房には内密で持ち出した五圓札も、實はさうした月末の納税に是非必要なものだつた。

——十倍にして返さい！ 畜生、けちくしやがるねえ！

彼は村を出端れて野の向ふに町のいらかがきら／＼と春の日光を受けてかゞやいてゐるのを眺めると、氣が大きくなつてしまつた。この日の競馬を知らせる煙火がぼんぼんと世間の不景

氣なんか大空の彼方へ吹飛ばしてしまひさうにコバルト色の朝空にはぢけた。

仙太は、でも神妙に山裾の開墾地へ行つて午前中だけ働いた。あとで女房から證跡を發見されてはいけないと無論考へたのである。が、十一時、十二時近くになつて、眼の前の道をぞろぞろと人々が押しかけはじめると、もうたまらなかつた。お祭の朝の小學生のやうに彼の胸は嵐にふくらんでしまつた。

野良着の裾を下ろした彼は、そのまゝ宙を飛んだ。町の郊外にある競馬場は、もう人で埋つてゐた。すでに何回かの勝負があつたらしく、喊聲や、落膽の溜息や、傍觀者の笑ひさゞめきなどが、ごつちやになつてそこから渦巻き昇つてゐた。

彼は人混みを分けて柵に近づいた。煙草入のかますから、前夜隣家から借りて切り抜いて取つて置いた新聞の一片——そこには無論、昨日の勝負が掲載されてあつた——を引き出して、彼は熱心に眺め入つた。もう組合せは相當興味のある部分へ入つてゐた。彼は出場するそれぞ

れの馬の名前、騎手の名前は殆んど知つてゐた。そしてどの馬がもつとも成績がよいか、どの騎手が最近出来が悪いか、などいふ可成り細かいところまで知つてゐた。

然し今日は新しい馬も大分現れてゐた。それは穴をねらつての主催者側の作戦であることは分り切つた事だが、それが圖に當つて、場内は刻一刻熱狂して來つゝあつた。

仙太もその空氣に捲き込まれ、しばらくの間は夢中になつて勝負を眺めてゐた。が、そのうちにくらか冷靜になつた。ひよつと氣がつくと、彼は勝負毎に、自分が勝つと思つた馬がいづつ勝つてゐることに氣がついた。——今日は運がいいぞ、畜生！ 悔しさがもうむらむらと頭を擡たけてきた。何故今の今、その勝負の馬券を買つてゐなかつたのかと、そんなことが後悔されはじめた。彼は再び人混みを分けて馬券賣場の方へ近づいて行つた。見るとそこには勝負毎に、熱狂し狂亂して、押し合ひ、へし合ひしてゐる人間の黒山、潮の差し引きがあつた。勝つた人間の顔は汗と埃りにまみれながらも太陽の如くかゞやいてゐた。負けた人間のそれは瀕死の病人のやうに蒼さめて、秋の木の葉のやうにぶる／＼とふるへてゐた。

仙太は例の五圓のぼろ札を手づかみにして突立つてゐたが、容易に賣場へ近づぐことが出来ないと共に、一方にはその負けた人間の顔が、自分自身の顔でもあるかのやうに怖ろしくなつ

て来てゐた。

——さうだ、若しひよつとかして……たとひ運のいゝ日であつたにせよ、一度や二度は負け
ないとも限らない。負けてこの五圓すつてしまつたなら……

女房の尖つた顔……否、それよりも納税！ 彼はその五圓がどんな五圓だかよく知つてゐた。
仙太はぎよつとして再びかますの中へそれを押し込み、地獄へ落ちさうになつて危く助かつ
た人間のやうに、柵へしがみついた。

その時、次の勝負が始まらうとしてゐた。五頭の競走馬がスタートの線に並行しようとして
尻や脰を押し合つてゐた。見ると、その中の一頭は彼の知つてゐる、そして彼のもつとも最負
にしてゐるタカムラといふ隣村の地主の持馬だつた。

相手の馬も大抵知つてゐた。ただ一頭新しいやつが加つてゐる。それは見るからに逞しさう
な、つやつやした、漸く五歳になるかならない位の、油断もすきもならないといつたやうなや
つだつた。仙太はプログラムを見た。外國擬ひの長々しい讀みづらい字がそこに書いてあつた。
然し仙太は「なにくそ！」といふ氣がした。絶對的にタカムラのものさ！ 畜生、生命張つて
もいゝや！ 彼はふら／＼と柵をはなれて馬券賣場へ飛んで行つた。が、何といふことだ！

もう賣場は閉つてゐた。彼は汗びつしよりで、握りしめた五圓札を拳ごと突き上げ、誰か一枚
でもいゝから譲つてくれないか！ と叫ばふとした。

が、そのとき、合圖と共に五頭の馬はスタートを切つてゐた。喊聲は地をゆるがして起つた。
半周にしてすではやく他の三頭の馬は二三メートルも引き離され、タカムラとテルミドル
とのせり合ひになつた。

——タカムラ！

——テルミドル！

聲援は嵐のやうだつた。タカムラはテルミドルを抜いた。と思ふうちに半馬身ほど抜かれ、
更につつと抜かれるかと思ふまに、反對に半馬身先に立つ——と思ふと……まるでシーソーゲ
ーム。——だが、最後の三周目だつた、タカムラはたうとう斷乎として相手を抜き、疾風の如
くゴールイン！

仙太は狂めく嵐の中に、夢中になつて何度か躍り上り、涙を流してどなりわめいた。附近に
ゐた何人かの人の足を踏んで、手ひどく抗議されなかつたら、彼はもつと／＼狂つてゐたこと
だつたらう。

やがて彼は我にかへつた。現金引換所では十圓札や百圓札が廣告のピラのやうに引摺まれた。
——あゝ俺は？ 俺は？

仙太はぼかんとしてしまった。一萬圓ばかり吹飛ばしてしまつたやうな気がした。その時、もしくと云つて肩を叩くものがある。誰かと思つて振りかへると、それは知つた顔ではなく、何處かの——恐らく東京からでもやつて來た立派な紳士だつた。

——失禮だが、この金時計買つてくれまいかね。僕はね、今日運が悪くて五百圓ばかりすつちまつたんだ。東京へかへる汽車賃も、子供等へ買つて行く土産代も、何もかも、本當に一文なしになつちまつたんだ。實に弱つちまつた……。

紳士はつくづくと悲觀した。

——これ、君、鎖とも五圓でいいよ。實は買ふ時は八十圓したんだがね。天賞堂の保険つきだから確なものだ。つぶしにしたつて三十圓——いや五十圓はある。何しろいま地金の騰貴してゐる時だからね。この町の時計屋へ持つて行つたつて三十圓は缺けまいと思ふよ。君、僕を助けると思つて取つてくれないかね。

紳士はどつしりした金時計と鎖とを仙太へ突きつけた。びつくりして見つめた仙太の眼は、

夕陽にかゞやくその山吹色のためにくらくらと眩めいた。

——弱つたな、僕はこの汽車で歸らないともう汽車がないんだ。あと十分しかないんだが……實に弱つちまつたな。

仙太は五圓のぼろ札を出して金時計を受取つた。タカムラに張りそこなつたやつを、この金時計——降つて湧いたやうな——で取りかへさうとふと考へたのだ。それにまた立派な紳士が五百圓もすつてしまつて家へかへれない——さぞかし彼の家にも、自分の女房のやうな口喧しい細君が、神経を尖らして待つてゐるのであらう。

紳士は五圓を受取ると丁寧な禮を云つて、どこかへ去つて行つた。

仙太は重い金時計を懐中へ押し込んで、再び柵のところへやつて來たが、然しもう馬の興味は起つて來なかつた。タカムラが、ひいきの馬が、見事に勝つたんだ！ それでよかつた。これからまだ少し時間もあるから、この金時計を塚田屋へ持つて行つて金にかへよう。

塚田屋といふのは彼の知り合ひの時計屋である。最近地金の騰貴につけ込んで、入齒でも金時計でも萬年筆でも、金と名のつくものなら何でも買入れてゐることを彼は知つてゐたのだ。

塚田屋の店先へ行つてみると、四五人の百姓と一人の巡査がゐた。巡査は今の今、誰かに呼

ばれて、競馬場の方からやつて來たのらしく、自轉車を下りたばかりだった。

仙太は傍らからのぞき込んだ。塚田屋は時計師らしく前額の禿げ上つたてらくした頭をうつむけて、丹念に一個の金時計を眺めてゐた。

——てんぶらもてんぶら、ひどいてんぶらだ。

それから巡査の姿を見つけて妙に笑ひながら、

——どうぞ！と云つて席をつくつた。

てんぶら！と聞くとそこにゐた百姓達の顔がさつと一どきに蒼ざめた。瞬間、口をきくものがなかつた。が、やがて彼等は一齊にわめき出した。

——べてんに引つかゝつた。

——畜生！ひでえ事しやがる。

——叩き殺してしまへ！野郎！

今や、仙太にも解つた。五百圓すつちまつて歸りの汽車賃がない、金時計を買つてくれの手に、みんな引つかゝつたのだつた。仙太はその瞬間、ぐらぐらと大地が揺れ出し、それがぐるぐらと廻りはじめたやうに感じた。さきの紳士の生白い顔がぱつと現はれた。彼は店先の柱に

つかまつて兩眼をぐりぐりと剥いたが、次ぎの瞬間猛獸のやうに咆哮した。「よし、畜生、取つかめえて叩き殺してやる。どこまでも畜生、東京までも追つて行んから……」

おびとき

「いつまで足腰のたゝねえ達磨様みてえに、さうしてぶかり／＼煙草ばかり喫かしてゐるんだか。」早口に、一氣にまくしたてる女房のお島であつた。「何とかしなけりや、はア直ぐにお晝になつちまア、招ばれたもの行かねえ譯にいくかよ、いくら何だつて……」

向隣の家「おびとき」祝があつて——尤も時局柄「うち祝」だといふことだが、先程およばれを受けたのであつた。

「ほんの眞似事ですがね、おつ母さんと子供等だけ、どうか来ておくんせえよ。」「さうですけえ、まア、お芽出たうござんすよ……ちやア、よばれて行きますべよ。」

とは答へざるを得なかつたものの、さて招ばれてゆくには、村の習慣として、たゞでは行け

なかつた。三十錢や五十錢は「襟祝ひ」として包まなければならぬ。そしてその三十錢が——子供等は連れてゆかず、彼女ひとりゆくことにして——いま、問題だつたのである。

鶏は寒さに向つてから頓と卵を産まなかつた。春先から夏へかけての二回の洪水と、絶えざる降雨のために、田も畑も殆ど無收穫で、三人の子供等の學用品にさへ事缺く此頃では、お義理のためにたゞ捨てる（實際、さう思はれた）金など、一文も彼女は持たなかつたのである。

ところで「何とかうまく口實をつけて行かなければりやそれまでだ。」

と夫の作造は暢ん氣に構へこんだのだが、女房は——家附娘としてこの村の習慣に骨の髄まで囚はれてしまつてゐるお島としては、隣同士で招んでも來なかつた、とあとでかけぐちをきかれるのが、死ぬほど辛かつたのである。

爐邊に投げ出してある夫の財布を倒まに見たが、出て來たのは紙屑のみくしやになつたものばかりだつた。「お前ら、三十錢ばかりも持つてゐねえのか、よく、それで煙草ばかりは切らさねえな。」

「煙草がなくちやア頭がぼんやりして仕事も出來つかい。」

「どうせぼんやりした頭だねえのか、はア招ばれるのは分つてゐたんだから、一日二日煙草や

めてどうも用意して置かねえつちう法あつか。早く何とかしてこしらへて来てくる。」

そして、陽が照り出したので、おん負してゐた二歳になる子供を下ろして蓆の上で遊ばせ、自分では、學校へ行てゐる長男が夜警のとき寒くて風邪をひくからといふので、ぼろ綿入の俄繕ひをはじめたのであるが、夫はいつかな爐邊をはなれようとしなない。

「如何するんだかよ。」と再び彼女は突慳食にどなつた。「隣り近所の義理缺けつちう肚なかよ。いつまでくぶかりく煙草ばかり喫んでけつかつて……」

「いま考へてゐつとこだ。」

「いゝ加減はア考へついてもよささうだねえか。あれから何ぶく煙草すつたと思ふんだ。」

「この煙草は安ものだから、いくら喫んでも頭がすつきりして来ねえ。」

「でれ助親爺め、仕事は半人前も出来ねえくせに、口ばかりは二人前も達者だ。五十錢三十錢の村の交際も出来ねえやうな能なし畜生ならばア、出て行け！ さつさとこの家から出て失せろ……」

女房の權幕に作造はやをら起ち上つた。村の下に展がつてゐる沼を見ると、女房とは反對に、いゝ按配風もないやうである。餘でも捕つて賣れば五十錢一圓は譯のない腕を彼は持つてゐた

のだ。百姓仕事は若い時分から嫌ひだつたが、魚捕では名人格と謳はれてゐた彼だつた。が、さて、取つかゝるのがまた容易でない。然し女房から頭ごなしにされると、何としても御輿を上げずにはゐられなかつた。

「米糠三升持つたら何とかつて昔の人はよくいつたもんだ。」と呟きながら彼は沼へ下りて行つた。

二

沼の深みへはまり込んでしまつて腰から下が氷に張りつめられ、脚を動かして泥から出ようとするが如何しても出られない……さういふ夢を見て、はつと眼がさめると、何時の間にか子供等のために掛蒲團を引張り取られて下半身が本當に凍らんばかりになつてゐたのであつた。隣家へ招ばれて行つた女房はまだ歸つてゐなかつた。びゆうくと北極からでもやつてくるやうな寒風が、雨戸の隙間から遠慮もなく吹き込んで、子供等は眠りながらも次等に襦のやうにちよかんである。

作造はさういふ子供等から掛蒲團を奪ふよりは、爐邊の方がまだしもだと考へて襦袍のまゝ

起き出し、土間から一束の粗朶を持つて来て火を起した。思つたほど魚は捕れなかつたが、それでも女房へ三十錢やつて、あと「なでしこ」を一つ買ふだけは残つたのであつた。彼は脚から腰のあたりが稍、ぼか／＼して來ると、新しく煙草へ火をつけた。

「おや、まだ起きてゐたのかい。」裏戸をがらりと引あけて、まるで寒風に追ひまくられるやうに土間へ入つて來た女房の顔は、しかし嬉しうにかゞやいてゐた。

「まさか隣の家なんか違つたもんだ。内祝だなんていつても、折詰ひいたり、正宗一本つけたり……俺ら三十錢ちや氣がひけつちまつて、早々に歸つて來た。」

言ひながら彼女は爐邊へ寄つて、新聞紙に包んだものを夫の前へ擴げて見せた。

「これ、よつぼどしたつべよ、かながしらにきんとん、かまぼこ、切するめ、羊羹、ひと通り揃つてるもんな。それに二合瓶……やつぱり地所持は違つたもんだ。俺らもはア、孫のおびときの時や、いくら何でもこれ位のことではしてえもんだ。」

「寒かつべから、これ飲んだらどうだや。」と彼女は二合瓶を傍の土瓶へあけて火の上にかけて、「戦地からお艶らお父の寫眞來てたつけよ。一枚はかう毛のもぢや／＼した頭巾みてえなもの冠つて、劍付鐵砲か／＼へて警備についてゐつとこだつけが、一枚は上等兵の肩章つけた平常の

服のだつけよ。眼がばかにキツかつけが、まさか戦地なものな……でも、おつかねえほど豊さんに似てたつけ……」

「そりや豊さんの寫眞だもの……」と作造は酒の温るのを待ちきれず茶碗へ一ぱい注いでぐつと飲み干しながら笑つた。

「それからお艶ら寫眞もお父へ送つてやつたなんて、一枚残つてゐたつけ。人絹ものだが、でも立派なお祝の支度して、ちやんと帯を立矢にしめて、そりや可愛かつたわ。豊さんもあれ見たらうれしかつべで……女の子つて可愛もんだな、ほんとに俺も一人ほしかつて……野郎等ばかりで、ぞろ／＼飯ばかりかつ食らひやつて……」

「出來ねえ限りもあんめえで……まあだ。」

「あら、この親爺め、はア、酔つ拂つて……駄目だよ、折詰へ手つけては……あしたの朝餓鬼奴らに見せて喜ばせんだから……こんな旨いもの滅多に見られねえんだから……一口づゝでもいゝから食はなけりや、餓鬼奴らも可哀さうだわ。お父は酒せえありや何も要るめえ。」

お島は折詰を再び新聞紙へ包んで戸棚の中へ仕舞ひこんでしまつた。そして、
「あゝ、寒む……どら、俺げも一杯くるな。自分でばかりいゝ氣になつて飲んでゐねえで。」

「あゝ、五十日振りの酒だ。腹の蟲奴ん畜生がびつくりしてぐうぐうと哮えて仕様ねえ。」
「俺の腹も一人前の顔してぐうなんて、鳴つたよ。あゝ、ぢり／＼と浸みて、頬ぺたまでぼかした。俺らはア、この勢ひで寝べ。」
お島は帯をといた。寒さが来てからごろ寝ばかりしてゐて、つひぞ解いたことの中かつた腰紐まで。

「俺家でもおびときだな、これは……」
作造は最後の一杯をぐつと飲み干して、自分でもぼか／＼して來た兩頬を抑へて見た。

錦 紗

村端れを國道へ曲つたとき、銀色に塗つたバスが後方から疾走して來るのが見えたが、お通はふと氣をかへて、それには乗らぬことに決心した。たつた十錢の貨錢ではあつたが、歩いて行つたとて一時間とはかゝらぬ町である。四十分や五十分早く着いたにせよ、十錢を減少させることはそれにかへられなかつた。「十錢でも足りなければ買ひたい物が買へないかも知れないのだし、十錢よけいに出せばいくらか品質のよい氣に入つたのが買へるかも知れないではないか、つまらないわ……」彼女はひとり胸の中で思ひながら、自分を追ひ抜かうとする遽しいバスの呻りを身近く感じて急いで道の片側へ避け、吹きかけられる埃を豫想してハンカチを懐から引張り出し、そして鼻腔を抑へた。

「お通ちゃん、どこサ行くのよ。」

濛々たる砂塵を捲き立て、走りすぎるバスの窓から首だけ出して言葉を投げてよこしたのは、隣り部落のひとりの朋輩であつた。答へようとして顔を上げると、そこにはもう一つの知つた顔が重り合ふやうに覗いてゐて、何かどなつて笑つてゐる。あゝ、やつぱりあのご連中も町の呉服屋へ買ひものに行くんだ。お通は渦巻く砂塵をとほして左手を振りながら、たゞそれに應へたが、ひよいと、自分が行きつくまでにあいつを——こないだしみん——と見て置いたあのレヨン錦紗を、ご連中の誰かに買はれてしまひしはないだらうかと考へた。あゝ、バスに乗ればよかつた。十錢ばかり惜んだために、あれを人に買はれてしまつては、それこそ取りかへしがつかなかつた。

彼女は道を急ぎ出した。一時間を四十分に短縮することは敢て不可能ではなかつた。かつてお裁縫を習ひにこの路を町へ通つてゐた時分の、ある夕方のこと、怪しげな身装の、見も知らぬルンペン風の男にあとをつけられた時は、二十分とかゝらないで、沼岸のさびしいところを村端れの一軒家の前までやつて来たこともあつたのだ。然もそれは弱氣を見せまいために決して駆けはしなかつたし、努めて平然と、だが心の中では出来るだけ早く早くと足を運んだので

あつたが——

「あんなつもりになれば、四十分みれば充分だわ。ご連中があれがいゝこれがいゝと迷つてゐるうちには行き着ける。」

国道は沼岸を稍々一直線に走り、電柱が汀に面した片側を次第に小さくなつて、そして森やまばらな木立に覆はれた部落の不規則に連る地平へと消え込んで行つてゐる。両側に植付けられてゐる水楊サウザンはすでに黄色い芽をふいて、さん／＼と降る暖い初春の日光に、ほのかな匂を漂せてゐた。

沼がつきて、溢水の落ちる堰のほとりに二三の飲食店があるが、その手前まで来たとき、お通は思ひきり端折つてゐた裾を下ろすために立ち止り、帯の間へ手をやつた。そしてふと、そこに挟んである筍の蒸口を更にしつかと挟みかへようとする、それが無い。

「おや！」彼女は口走つた。どきんと一つ心臓が打つた。それからどき／＼、どき／＼と一層早く打ちはじめた。たしかに家を出るとき固くそこへ挟んで、ほんほんと二度もその上を叩いたのだつた。彼女は更にふかく手を差入れ、同時に横の方も探つてみたが、やはりどこにも見當らない。底抜けになつて下へ落ちる理由はどう考へてもないのである。帯締めだつてきちん

と結ばれてゐるし、落したとすれば、道を急いだために、墓口自身がひとりでに浮き上つて、そして知らぬ間に零れたに相違なかつた。

然しお通はたとひどんなに夢中で歩いてみようか、それを感じかすにしまふほど自分が不注意の腑抜けであるべき筈はないと思ひ、もう一度懷中をさぐり袂をさぐり、抱へてゐた風呂敷包みまで解いて見た。が、やはりどこにも発見されない。その墓口には十圓紙幣一枚と五圓一枚、それから五十錢や十錢一錢など十數個入つてゐたのだつた。十圓は母からことづかつて見貴と自分の野良着に仕立てる紺木綿を買ふ豫定のもの、そして残りの五圓なにがしこそ、この前買へなくて、たゞ「この次に買ふから誰にも賣らないで……」と念を押して置いた例のレーヨン錦紗のために、二週日以来傍目もふらずにかせぎたどた虎の子だつたのである。實際彼女は五圓のためには見榮も外聞もかまつてゐなかつた。町へ豚賣りに行く見貴の曳く荷車のあとを押したり、母親が丹精してゐる鶏の卵を半數だけ貰ふことにきめてその餌を調達したり、朝鮮人の屑屋に親の代から押入の奥に突込まれてゐたやうな種々の廢品を引張り出して一錢を争ひながら賣拂つたり、そんなことをして漸く蓄め上げたものだつた。黒地に渦巻く水流と浮動する落花とたなびく雲のたゞすまひをあしらひ、その表面へ大きく草の葉や小鳥を黄に染め

ぬいたその模様が、眠つても覺めてもちらついてゐた。誰にも賣らないで置いて……と念を押しては來たものゝ、先方は商人である。そしてあれは商品である。一日も早く行かないことは、いつ買手がつくか分らなかつた。——賣れませんやうに、どうか、誰の眼にもつきませんやうに……かうして、五圓といふ金のまとまるのがどんなに待ちどほしかつたことか。

二

全身中どこを探して見ても無いと知つて、暫し茫然として突立つてゐたが、やがて彼女は道を引返しはじめた。どこか途中に落ちてゐるに相違ない。人が通るとはいつてふ大概は自轉車で飛ばすものばかりである。でなければトラックだ。小さい墓口などよほど氣をつけてゐなければ眼にとまる筈がない。國道へ出てから落したのなら、まだ落ちたまま、で、落し主が探しにやつてくるのを待つてゐてくれるであらう。商人が座敷に坐つたまま、でゐて儲ける金とは、同じ五圓でも、あれは違つてゐなければならぬ五圓の筈だ。それにあの墓口の片隅には自分の小さい寫真が二三枚入つてゐたのだし、あの寫真がしつかと紙幣を握つて居てくれるであらう。お通は全神經を路上に集中して、ちよつとした木片、一個の石塊にも眼をそゞぐことを忘れず、

すつと自分の歩いた邊を戻つて見た。が、部落への曲り角まで、そこには遂に落ちてゐなかつたのである。恐らくこゝまで来るうちに——家を出て五六軒の農家のならぶ往還を通り、畑地へ出て、沼岸へ坂を下りる頃落したのかも知れぬ。彼女はさう考へ直して、今度は村道を注意ぶかく探しながら坂を登り、部落へ入つて、そしてたうとの自分の家の門口まで来てしまつた。「どこサ行つて来たか。」と行きあつた村人に訊ねられても彼女は、「あ、どこサでもねえ。」と氣拔けたものゝやうに答へたのであつた。——ひよつとすると、持つて出たつもりでも、持たずに出てしまつたのか……彼女は庭先へ入つて家の中をうかゞつた。——誰も居ないでくれゝばいゝが……だが、喘息氣味で仕事を休んでゐた母親が、直ぐに見つけて土間から聲をかけて來た。

「何だか……如何したんだか。」あまりに若い娘の顔に老母はびつくりしたのである。「あ、いよ、どうしたんだよ。腹でもいたいのか。」

「うゝん——」とお通はそれを否定した。「おれ、さつき、出るとき、藁口持つて出たつけかな、お母さん。」

「藁口失くしたのか。」

「無えんだけどな、どこ探しても……まさか途中で落した筈もあるめえと思ふんだけど。」

「おいや、それでは持つたつもりで持たなかつたかな。」

で、二人で家中を探してみた。次ぎには庭先から往還まで、更に畑道の方まで、坂の途中で母親はたうとう息をきらして道芝の上へ腰を下ろしてしまつた。

「何だや、まア、どうかしたのかい。」と訊ねる村人へ、彼女は正直に打ち明けた。

「お通がさつき藁口失くしてない——」

「まア、いくら位入つてゐたんぢや。」

「ちつとばかりはちつとばかりだが……」

「まア、それでもなア……どの邊で失くしたんだつべ。」

お通は母にはかまはず、もう一遍國道を探して見たが、やはり見付からなかつた。すどくと歸つて來ると、母が部落の入口で、その邊に遊んでゐた五六人の子供をつかまへ、そしてくどくどと尋ねてゐた。然し子供等は誰もそんなものは拾はぬといふ。さては、それでは俺達も探してやるといつて畑道から往還へかけて、更に坂の下まで、草の中を掻き分けたり、枯れたまゝの道芝を叩いたりした。

「はア、誰かに拾はれてしまつたんだよ、お通や。」と母親は遂にあきらめるといふやうに、なほも子供等といつしよになつてきよろ／＼やつてゐる娘へ言ふのであつたが、
「でも、ひよつとして、どんなところに落ちてゐねえとも限らねえから……」
お通は二度も三度も掻き分けた草の中まで、更に足の爪先で蹴つて見るのである。

三

その夜、白々明けまで、お通はひとり寢床の中で泣いてゐた。夕方、野良から歸つた兄貴に、
「うっかりぼんとして白痴みてえにだら／＼歩いてけつかるからだ、でれ助阿女。」と罵られ
たばかりか、近頃殊に酒などを覚えて意地悪を言ふやうになつた彼の口から、更に、「貴様ら
なんかにこれから一文だつてやることだねえから……錢ほしかつたら女中奉公にでも出る、二
十三にもなりやがつて、いつまで兄貴のすねかちつてゐるんだ。」と慰めるどころか反對にま
す／＼ひどくやられたのである。

平常なら「兄らも何だか、二十七にもなつてまアだ嬬も持ねえで……」としつべ返しする
ところだつたが、その元氣もなく、たゞ悔しいでいつばいの彼女だつた。そしてその悔しさも

兄貴から痛いところをやられたからといふよりは、本當に自分はぼんやりの抜け作なのだらう
かといふ反省から来る悔しさが先に立つた。うっかりぼんのぼんやり者でなければ、何で半月
がかりでためた金など失くすものか、兄貴のいふやうに、自分は白痴のやうにだら／＼と國道
を歩いて行つたに相違ないのだらう。自分自身ではそんなつもりはなくとも、とうに世間では
自分をぼんやりのうっかりぼんであると内奥を見抜いてしまつてゐるのかも知れない、だから
こそ二十三になる今日まで——農村の習慣として女は二十歳をすぎれば婚期おくれの烙印を捺
される——誰も嫁にほしいと言つてくれる者がないのかも知れない。同年輩の多くのものはす
でに子供まで産んでゐるし、たゞの一度も結婚ばなしのないなどいふものは半人だつて居な
かつた。バスの中から聲をかけてくれたあのお梅さんだつて、そのうしろから顔を見せたお民
さんだつて何回か話があつたのだ。たゞそれが例の「帯に短かし褌に長し」でまだ決らないで
ゐるだけなのだ。二人とも、ひよつとすると明日にも何處かへきまるかも分らないし、いや、
すでに内々はきまつてゐるのかも知れないのである。だのに自分は……結局「賣れ残り」で、
それこそ滿洲か北支の方へでも流れてゆくのが落ちといふ運命にとりつかれてゐるのかも知れ
なかつた。

それにしても何處に自分は缺陷があるのだつたらう。人並みに物も考へ、他人のいふことも分らなくはないつもりだつた。非常な醜女であるとか何處か脚でも曲つてゐるとか、さういふ肉體的な不備でもあるのだつたらうか。いや、たとへばいつしよにお風呂へ入つたやうなとき、朋輩の誰彼とくらべて見ても、どこに足りないところもないし、よけいなところもなかつた。皮膚に白い黒いはあつても、それが嫁入口に障るやうなものではなかつたし、容貌の點については、彼女は自分がお梅さんやお民さんに比して決して劣りはしないと自信してゐた。

だのに……自分はいはゆるぼんやり者、抜け作の部類に屬するとしか考へられぬ。さうだわ、だから血の出るやうな思ひをしてこしらへた金も失くしてしまふのだし、お嫁の話もかけてくれ手がないのだ。

うとくしたと思ふと母親に起された。喘息がよけいに嵩じてしまつて、朝飯の支度が出来かねるといふのである。お通は眼をこすりながら起き出して、何時ものやうに竈の下へ火をたきつけた。

やがて朝食後、兄貴が鉢をかついで麥さく切りに出てしまふと、母親が寝てゐる枕もとからぼろけた財布をひつぱり出して五十錢玉を二つ疊の上へならべ、占ひ者にかんがへてもらつて

來たらいゝだらうといふのであつた。

「無駄だわ、そんなこと——」

お通はそつぽを向いたが、無論あきらめてしまつたわけではなかつた。いや、考へれば考へるほど諦めきれず、これからもう一度探して來ようと思つてゐたところだつたので、「どうせ、あたりもしめえ。」と重ねていつて見た。

「當るか當らねえか、それは分らねえが、ひよつとして當るかも知れねえからよ、それが八卦だねえの。」

「あたらなかつたら、たゞ錢うつちやるやうなもんだしな。」

「それではお前のいゝやうにするさ。でも、一文なしでは仕様あるめえから、とにかく何に使ふばつて、その錢はとつて置けな。」

「駐在所へだけは届けて置かうかな。」

彼女はさう言ひながら起ち上る拍子に疊の上の五十錢玉二枚をつかんで掌に入れてゐた。

村の巡査駐在所は隣部落——お梅やお民等の近くにあつた。お通は昨日の道筋を更に丹念に探してから駐在所の方へ急いだ。と、何處かへ出かけようとする巡査が自轉車で先方からやつ

てくるのに出遇つたので、それをよび止め、紛失の話をした。すると巡査は笑つて、

「ようく探したか、どこか家の中へ置き忘れてゐるんだねえか。」と軽く受けた。

「そんな筈はないんですがね。」凋れるお通を見ると、それでも、「拾得人が届けてよこしたら直ぐに知らせるから。——でも、何だな、もつとよく方々さがしてみろんだな。」

そして自轉車をとばして行つてしまつた。

お通は巡査のその態度に何だか悲しくなつて胸がいつばいだつた。輕蔑してゐた占ひ者へ、やつぱりすがらうとする氣持が、むらくと起つてくるのを抑へることが不可能だつた。占ひをする人といふのは渡りもので、十年ばかり前にこの村へ落ちつき、籠屋渡世をしてゐるのだが、本職の方よりは、家の方位を見てくれとか、子供が長病ひをしてゐるが何かの祟りではあるまいか考へてくれとか、嫁取り婿もらひの吉凶から、夫婦喧嘩の末にいたるまで、あらゆる日常的な、然しながら常識をもつては判断のつかぬ事柄があると、きまつて依頼されるその種の占ひの方が収入になつてゐたのである。お通がこつそりと土間へ踏みこんだとき、この籠屋はまだ朝食をすましたばかりらしく、どてら着のまま、長火鉢の前ですぱり／＼煙草をうまさうにやつてゐた。どこと言つて此の邊の普通の百姓と變りのないその様子……身装顏付、應對

ぶり、それらが村人をして何の遠慮もなくこゝへ足を踏み入れさす原因かも知れない。お通も近所の人へ物をいふやうな口調で、昨日の一件をこのト筆者にまで述べたのであつた。

すると籠屋は煙管を抜き、茶を一杯ぐつと傾けて、さて、表座敷の神棚から一冊の手垢に汚れた和本を下ろして来て、無雜作にたづねはじめた。

「昨日の何時頃だつたけや、家を出たのは……東の方角へ向つたんだな、それから南へ向つて行つた。と、朝の九時頃。」

お通はどうせ見てもらうのなら出来るだけ委しく見てもらひたかつたし、別に身の耻をさらすわけでもないのだからと思つて、覺えてゐるだけのことば残らずいふつもりだつた。が、籠屋は自分の訊ねた以外の話は、たゞうなづくだけで受けながし、ぢつと本を眺めてゐたが、お通が終らぬうちに言ひはじめた。

「これは家からそんなに遠くないな、部落内だ。まア、遠くて坂の中途あたりまでだ。でも、はア、探すものはねえ、子供の手に入つてゐる、十歳から十二歳までの子供だ。よそから来て通りが／＼に見つけて、一里以内のところへ持ち去つてゐる。それで、金はまだそのき／＼そつくりしてゐる。使ひたくてもちよつと自分勝手には使へないやうな家の子供だ。」

「大盡どんの子供かな、では……」お通はひよつと心當りがして念を押した。

「さうでもねえが、家でやかましく躰けてゐる子供だから、ひよつとすると持つてゐるの悪いと思つて駐在所へ届けつかも知れねえ。でなけりや、また、そうつともとのとこへ戻して知らん顔するか、そのどつちかだ。何にしてもこの金は、もとへ戻ると卦には出てゐるからな。」

それから籠屋は、ばさりと本を伏せ、煙管へすぱり／＼と息を通して刻煙草をつめ、やほら言ひ出した。

「買ひものに出るには日が悪かつたな。先負の、東南方旅立事故生ずといふ日にあたつてゐたから、昨日は……午後からなら別段のことはなかつたが。」

「そんなこと、やつぱり有るかしら。」お通は信ずることが出出来なかつた。

「まア、あるものと考へてゐれば間違ひはねえな。」と卜業者は至極鷹揚に構へて、「そんなこと無えと思ふと、ついうつかりして、どんなまねでもするし、あ、今日は悪い日だなと考へれば、何をするにも氣をつけてやるやうなもんで。」

「でも、悪い日だなんて言はれると、怖くなつて何も出来なくて困ることも有るんだねえかしら。」

「そんな人は九星にとつ馮かれてゐる人で、九星の吉凶といふのはそんな意味だねえよ。悪日といふのは氣をつけるつちうことなんだから。」

さう聞くとお通はなるほどと思つた。それから失くした金は二三日中には必ず出ると繰り返へし卦のことを言はれてすつかり喜んでしまつた彼女は、帯の間から白紙につゝんだ五十錢玉二つを出して、

「あの、いくらですべね。」

「あ、それは、なアに、思召していゝんだよ。何もこれ、商賣ではねえんだから。」

「ではこれだけでいゝかしら。」

「なアに、半分でいゝから。」

口だけで、別に押してかへさうともしないので、お通は惜しかつたが二つをそのまま置いて戸外へ出た。

家へかへつて話し、それから彼女はいつものやうに往還で遊んでゐる子供等に、昨日、隣り村の誰かと遊びに来はしなかつたか、姿を見かけたものはなかつたかと訊ねて見た。子供等はぼかんとしてゐて答へるものがない。「あいよ、昨日の九時頃よ、あれは……要三は、菊一

は、佐太郎は……」然し一人として来たといふものも姿を見かけたといふものもなかつた。學校がへりの大きな連中をつかまへて聞いて見ても、結果はつひに同様でしかなかつた。恐らく誰も知らない間に自轉車でども通りかゝつて拾つて行つたのかも知れない。お通は訊ねるのをあきらめて、とにかく明日まで様子を見ることに決心した。籠屋のいふやうに、拾つては見たが使ひようがなくて、そうつと戻しにやつてくるかも知れぬ。

然し、それも遂に空頼みに終つた。翌くる日もすぎ、四日日になつたが、依然として金は出て來ない。

「あれにかんがへてもらへな、地神さまに。」

母親が言ひ出した。餘りにがっかりしてしまつてゐる娘が可哀さうだつたのだ。

そこでお通は沼沿ひの丘の下へ何處からか漂着して住んでゐる山伏のやうな「地神様」と村人がよんでゐる方位師のところへ行つて見てもらつた。と、この天神ひげを生やした瘦せぼちの老人は、先づ箆竹をがら／＼とやつて算木をならべ、それと易經とを見くらべながら、「うむ……うむ……」とうなつてゐたが、大體籠屋のいつたやうに、日が悪かつたことから説き出して、さて、

「この失せものは南の方、家より半道ほどの枯草の中に落ちてゐます。今日中は誰の眼にもとまらず、そのまゝだが、今日をすぎると子供に拾はれる恐れがありますな。……まア草摘みにも出た子供が見つけるといふやうな寸法でせうな。」といふのであつた。

見料はときくと、一圓だといふので、お通は母から今の今もらつたばかりの第二の五十錢玉二つをそのまゝ置いて、それから子供らに拾はれてしまつては大變と思つて、國道へ引かへし、暗くなるまで一人で探し廻つた。が、それも無駄骨に終つたので、その翌日、またしても國道の枯草を引掻き廻した。

「家から半里……きつとこの邊に違ひない。」

兩手は朝露にぬれ、足も枯草と泥に汚れて、もはや血眼の彼女は、人に見られてもかまはず、野ばらの蔓の中まで掻き分けた。

「何だか、そんなとこで……」とわざ／＼自轉車を下りて訊ねる見知り越しの人もあつた。

「墓口失くしたんだ。」と彼女は判然と答へるのであつた。

野良仕事など容易に手につかなかつた。彼女はもう近所の人にも公然と言明してこないだの道筋を探しに探し廻つたが、依然として發見できなかった。今度は二里もある沼向ふの村の占ひ師を訪ねて更に一圓の見料を拂つたのであつた。ところでこの道樂で易など見てゐるんだと自稱するまだ若い卜筮師は、「これは庭先か門口に落したんで、落してから五分以内に、極く近所の始終出入りしてゐる三十がらみの女の手に入つてゐる。」といふのであつた。お通ははつと思つたが、自分の家へ夜晝なしにやつてくる隣家のお信お母さんを疑ひたくはなかつた。尤も自分が墓口を落した日以来、そのお信お母さんは、どうしたのかまた姿を見せないでゐるのだが……それにしても、呼べば應へる眼と鼻の間に住んでゐるその家の人に、そんな疑ひがどうしてかけられよう。彼女は第一、失くした自分がうっかりぼんだつたのだ、と諦めるとに決心した。自分がやはり抜け作なんだ。そしてその晩また、彼女は殆んど泣き明した。金が出て來ないことよりは（もうそんなもの欲しくはなかつた。）やはり自分が抜けてゐるといふ自意識が、悔しさが、たまらなかつたのだ。

「どこかの井戸へでも入つて死んでしまつてやる……」

曉方から沼向ふの町で花火が上り出した。S川堤の櫻が満開になつて、花見の容をよぶそれは相圖なのであつた。

兄貴の和一が昨夜おそいと思つたら、顔など刺つてひどくのつべりとなり、「今日は午後から斷然花見だい……」などゝあてつけがましく叫んで、小遣錢かせぎの牛車をひき出して行つたのも彼女にとつて癢でならなかつた。

「俺も花見だ、俺ら朝つばらからだ。」と追ひかけるやうにいふと、

「また墓口失くせ、失くした上に占師に見てもらつて三圓も損しろ。」

お通は地團太踏んで「失くすとも、この家の身上ぎり失くして、千圓がどこも占ひやつて、借金こしらへてやらア。」

くさくして仕方がなかつた。本當にS川上手へ行つてやらうかと考へたが、もう母の財布にもそんなに金は入つてゐないことを彼女は知つてゐた。尤も兄貴は相當持つてゐるに相違なかつた。豚を賣つた金だつてまだそつくりしてゐる筈である。今朝も、「失くしたものは、はア、いくら何といつたつて仕様ねえんだから、野良着だけは和一が買つて來たら……」といふ

母親に對して、「ばかな、俺ら今年は裸體で田植だ。」なんて罵つたくせに、あとでは二反買ふのか一反でいゝのかなど、聞いてゐた位であつたが、でも、お通へは一錢だつて出すまいとするのである。「そんなけちん坊なら誰が……たとひやらうといつたつて貰つてやるもんか。」

お通は麥さく切りに出かけた。二三日くよくよく探し廻つてゐるうちによその家では切り終へてゐたらしく、もう誰の姿も見えなかつた。汗を流して働いてゐると花火のことも着物のことも氣にならない。ぼか／＼と暖かい日光、大空に囀る雲雀、茶株で啼く頬白、あゝ、春ももうあといくらないのだ。茶の花の匂ひを送つてくる野風に肌をなぶらせつゝ何時か彼女はぼんやりと考へこんでしまつてゐた。

午後も畑へ出るつもりであると、お梅とお民がげ／＼しいレーヨンの春衣で、きやつ／＼とはしやぎながら訪ねて來た。

「行かない？」と彼女等は口々に叫んで庭先へ馳け込んだ。「このいゝ天氣に、もさ／＼麥さく切るばかはねえわよ。」

お通は椽側に腰をもたせかけ、畑の土のついた地下足袋をばた／＼と叩き合せて、

「さうよ、世界にたつた一人しか、なア。」

「誰よ、そのばかは。」

「俺よ……十五圓もすつぼろつちまつて、何が花見だつてわけだ。」

「あれ、まだ出て來ねえの。」

「出るもんか、出た位なら今日ら、鼻天狗で、すしでもカツ井でもお前らの好きなもの奢つてやら。」

「くよく／＼すんない。」とお梅さんが大振りの晴れやかなで、こぼこ顔を思ひきりにこ／＼させて、「お通姉にも似合はねえ、そんな愚痴、……今日は俺さまが奢るから、さア、早く支度しろ。」

「賣れ残り等三人で來た、あれ、見ろ……なんてひやかされるばかしたから、俺、やだ、お前から二人で早く行け。」

「みものだわよ、どれを取つても十錢均一、なんて正札ぶら下げて行くのも。」
これはお民である。

二人の友達は、どんなことがあつてもお通を連れ出さなければ承知しないといふやうに椽側

へ並んで腰をもたせかけた。そして話は彼女等があの日……お通が褌口を失くした「間のわるい日」に、どんなものを町で買つて来たかに落ちて行つた。お梅は本絹の帯を一本買つたといふし、お民はまたこれも本絹の御召を一反買つたといつてはしやいだ。本絹も本絹「材木から取つた本絹よ」でお通の「毒氣」を抜き、それから自分たちがいくら丹精して蠶を飼つても、その蠶から取つた本絹の着物など夢にも着れない現状を、げら／＼と明けばなしでけなすのであつた。

お通もいつしよに笑つてゐたが、ふと口を切つた。

「あれ、まだ残つてゐるか知ら。お前ら見なかつた……」

娘たちが店へ入れば店員が見せるものは大方きまつてゐる。二人の友達もきつとあのレーヨン錦紗の幾反かを見せられたに相違ない。いや、自分からさういつて買つても買はなくても見せてもらつたに相違ない。

「どんな模様だよ、それ」

こんな模様だつたと圖にまで描いて「論議」した揚句、遂にそれならまだちやんと残つて居たつけ、といふことになつた。尤も一反や二反賣れても、あとにまだそれ位は仕舞ひこまれて

ゐたのかも知れないが、とにかく、それらしいのは残つてゐたことが大凡確實だつた。

「ぢや、きつと有るな。」と叫んだお通の顔は急に晴々しかつた。

「有る、有る……」

「有つても錢がないと來らア、ばかだな、この人は。」

「可哀さうなはこの子で御座い、か。」

「兄貴から取つ剥がすさ。」

「なアんで、そんなこと……そんなこと出来る位なら、はア、俺だつて十圓や十五圓失くしたつて、何でくよく／＼するもんか。」

「俺話して出させつか。」

ぺろりと舌を出してお梅さんがうつむいた。思ひなしか顔がばつと赤かつた。

「それ、それ……」とお民がはやすと、

「でも、あの兄さん、いゝ人があるんだから俺らことなんか鼻汁も……の方なんだから、駄目の皮。」

「さうでもあるめえで……」

といつて三人で笑ひ聲をあげたとき、その當の和一が牛車を曳いてかへつて來た。彼は娘等を見るとき、臭さうに「はア、花見か、暢氣だな。」とつぶやきながら、娘たちから何かいはれないうち……といつたやうに、屋敷尻の柿の木の下の方へ急いで行つてしまつた。

「ほら、きつと大丈夫よ。」とお民が急に張り込んで、「はア、なんとか……かんとかなんて明後日の方つん向いて、れたところみると、滿更でもなさうだつたぢやないの、お梅ちゃんがいへば、うまく行くよ、きつと。なア、お梅ちゃん、斷然、買はせつちまへよ、その賣れ残り。」

またしても三人で笑聲をあげたが、その下からお通が、

「あゝ、やだゝ、俺ら止めた、賣れ残りなんて言はれてやアになつちまつた。こちと等みてえで……本當に、このぶすのお民は、時々そんなとつべつもねえこと言ふんだから。」

「だつて賣れ残りだねえか、賣れ残つてゐるんだもの。」

「でも、残りものに福があるつて言ふぢやない。」とお梅がいつた。

「そうら見ろ、あれ買つて來ると、きつといゝ話があるから……はア、あんたの思ひがかゝつてゐるんだもの、なんで誰にも手が出るもんか。」お民が重ねて言つた。

そのときは何の氣なしに、たゞ笑つて、冗談として聞きすてたが、あとで、ひとりになつて考へてみると、お通はやはり、人のいふ運といふやうなものが有るやうな氣がした。あのレーヨン錦紗がちゃんと残つてゐる……きつと俺のものになる運命なんだ。

と同時に、自分の生涯のことについても、それは適用出來さうだつた。賣れ残りとても何とでも好きなやうに言ふがいゝ。そのうちに、きつと、あれだから……

お通は再び麥さく切りに出た。早くそれを終やしてしまつて、別にまた小遣錢をかせぎため、そして自分を待つてゐるあの錦紗を買ひに……と思ふともう胸が弾み出してゐた。

荒蕪地

「……アレは、つまり、言つてみれば、コウいふわけあひが有るんで……」

戦地から来た悴の手紙に、思ひきつて、いままで悴へ話さずにあつたことを餘儀なく書き送らうと、こたつ櫛の上に板片を載せ、悴が使ひ残して行つた便箋に鉛筆ではじめたが、儀作は最初の意氣込みにも拘らず、いよいよ本筋へかゝらうとするところで、はたと行詰つてしまつた。……あれをどんな風に説明したら、うまく、悴に、納得がゆくものであらうか。

人手がなくて困るとか、肥料が不足でどうか、かれこれ言はれながらも、事變がはじまつていつか足かけ三年、二度目の收穫が片づく頃になると、心配してゐたほど、それほど米がとれなくもなかつたし、人手の不足もどうやら馴れつこになつてしまつた。事實、野良仕事など、

やりやう一つで如何にでもなつたし、肥料などに至つては、幾キロ施したから、それで幾キロの米の收穫があると決つてゐるものではなく、いくら過不足なく施したにせよ、その年の天候如何によつては何等の甲斐もないことさへあつたのだ。

それは成るほど思ふ存分に施して、これで安心といふまでに手を盡して秋をまつに如くはない。然しながらそれでも結局は例の運符天符……そこに落ちつくのが百姓の常道で、先づ曲りなりにでも月日が過ごせれば、それで文句は言へなかつた。

家のことを心配して、時々小爲替券の入つた封書などをよこすのは、却つて百姓に経験の浅い悴の正吾の方だつた。……あの借は拂つたかとか、どれくらゐ米がとれたかとか、たとひどんなに手ツ張つたにせよ、俺のかへるまで、作り田は決して減らすなとか、あの畑へは何と何を播けとか、そんなことまで細かに、よく忘れないでゐたと思はれるほどあれこれと書いてくるのだ。黙つて居ると何回でも、返事をきくまでは繰返して書いてくるので、儀作の方で参つてしまひ、前後の考へもなく、洗ひさらへ、そのやりくり算段を報告した。

ところでそこに問題が孕んでゐたのだつた。それと言ふのは、事變二年目の決算についてだが、悴の思ふとほりにはどうしても行きかねたのである。然もそのことを正直に書いてしまつ

たものだから、早速、悴から「なんでソノ古谷さんの方だけ出来なかつたのか、やらうと思へばやれたのではなかつたか。それに俺としては、そんな大口のやつが有るとは實は知らなかつた……」と詰られる結果に陥つてしまつた。儀作は、それを辯解かたがたふかい理由を書き送らうと、鉛筆の芯をなめて居たのである。實際、それは彼にとつて深い、いや、それ以上に、解りにくい問題だつた。

「アノ金は、ナルホドお前には、これまで、きかせずに置いたが……アレは、その、關東大震災のときだつたから、コトシで……」

漸くのことそんな風にはじめたものゝ、再び彼は、鉛筆の尖を半白のいが栗頭へ突差すやうに持つて行つてごし／＼やり出した。どうもやはり駄目だ。

それといふのが、村のもの誰一人の例外もなく、それまで、田のあぜであり、畑のふちであるとして考へて、それ以上のことはてんで詮索しようとしなかつた山腹や川沿ひの荒地（それなしには傾斜地のこと）で田の用水は保たず、畑地にあつては、耕土の流亡を免れない場所）それが實は官有地であつて、「荒蕪地」といふ名目のもとに大藏省の所管に屬してゐたとかで、そしてそれだけなら何も問題はなかつたのであるが、そこが改めて民間に拂下げられることになつ

たといふ、……もう十七八年も前の話に遡らなければならぬいきさつなのだ。

當時、それと聞いて、誰一人、頭を横ざまに振らぬものはなかつたが、儀作にとつても同様、どんなに拳骨で自分の素天邊をなぐつてみても、さういふ理窟は、いつかな、さういふ行かなかつた。例へば、五十度の傾斜のある地面に水田を拓くとして、若しそれを半畝歩づゝに區切らなければならぬ場合、どうしたつて一枚々々の境界に相當の斜面を残さない限り、その半畝歩の平面は拓けないではないか。だからその斜面……拓き残しの部分は、どんなことがあらうと水田や畑の耕作に對して缺くべからざる條件といふものであらう。なのに、そいつが今更改めて民間に拂下げられる？

「尤も、あすこは田や畑の畝歩へは入つてゐぬから。」とやがて雀の小便の如く考へをひねり出すものが出来てきた。「もともと、官有、いや、昔、殿様か何かの所有だつたところを、ぼつ／＼開墾して、その開墾面積だけ登記して置いたもんだらうから……」

さう聞けばどうやら理窟だけは解つた。が、依然として分らないのは、やはりそれらの残存面積を除いて田畑そのものが成立せず、ちよつとした雨降りにさへ耕土が押し流されてしまふだらうといふこと……その一事だつた。それともう一つ、なんでそれが今頃、田畑が民間の私

有になつて六七十年も過ぎた今日、改めて民間に拂下げられることになつたのかといふことだつた。

人の話では、このほど例の大震災で焼野原と化してしまつた東京市を復興するについて、早速、臨時議會が召集され、そして六億近い巨大なる復興豫算が議員たちによつて可決されたばかりか、更に大蔵省は市民に對して莫大な低利資金を貸出す準備を早急にしなければならぬことになつて、そのため、この地方のやうな山間農村にいまなほ多く散在して、不税のまゝ放置されてゐる『荒蕪地』なるものを民間に拂下げる案をたて、帝都復興院總裁後藤新平はそれによつてお得意の大風呂敷を擴げ、「大東京計畫」なるものをでつち上げて、向ふ七ヶ年間に諸君の東京を世界的な文化都市にして見せると豪語して、やんやの喝采を博したとのこと。

それはとにかく、稅務署では早速議會の決議に應じたものと見え、この村の不毛地に對し、畦地は熟田の時價の半額見當に、畑さかひの荒地は隣接の畑地の約半額と言つた風に『査定』し、急遽拂下げの通告を村役場へよこしたものである。

その頃、儀作はいまでもはつきり覺えてゐるが、村ではちやうど秋の收納が大方終つて、儀作自身のやうな小作階級のもものは、例によつて地主へ年貢米や利子拂ひを殆んど済ましてゐた

し、その他、肥料屋の拂ひや、村の商ひ店——油屋からの半期間の細々した帳面買ひも、とにかくどうにか片をつけて、舊正月も貧しいながら待つてゐるといふやうな時期で、村には餘分の金など、地主たちを除いては一文もなかつたのである。ところで儀作自身は三反歩の自作地を山の傾斜面に持つてゐたし、それに隣つて略同じほどの面積の小作田も持つてゐた。そしてその一隅の耕地は役場からの通知によると三畝歩ほどの『荒蕪地』を含み、更に彼は川沿ひの畑地を二三ヶ所に飛び／＼に耕作してゐたが、そこには五畝歩ほどの不毛地——恐らく年々の洪水のために蠶食されて今は川床になつてゐる部分でも勘定に入れない限り、誰が見てもそんなに有るとは思へなかつたほどのものが存在してゐたのである。實測してもらはなくては……と抗議してみたが、いまはそんな暇はない。あとで繩を入れて見て、それだけなければ『買ひ上げ』てやると突ばねられ、結局、田と畑の持つそれらの不毛地を、彼は五十圓ほどに査定せられなければならなかつた。

村人の中には百圓以上の査定を突きつけられて不平をこぼすものもあつた。……

……だが、よく／＼考へてみると、それは他人ごとではなかつた。もし他村の金

持、いや自分の村の金持にしても同様だが、さういふ譯の分らぬ連中に落札されてしまつて、その畦や畑境へ無茶な植林でもされた日には……何となれば連中とて今度は租税が出るのだから、たゞ放置する筈はない。然しそれこそ取りかへしのつかぬことだつた。それでなくてさへ日光に恵まれないこの地方である。半歳を雪の下に埋もれて過す耕地のことで、たゞ一本のひよろ／＼松のかけでも、直ちにその秋の收穫に影響した。勢ひ、借金しても落札しなければならぬ運命に置かれてゐたのだ。小作地でさへそれは免れられぬ。若し地主に一任して置くなから、つまりは小作料の騰貴でなければならず、でなければ、それこそ杉や桑や、その他こゝに適當と思はれる樹木の恐れが……。

要するに永久に不毛地に對して小作料を支拂ふか、或は日光を遮られなければならぬか、それとも一時借金してもそこを自分のものにして收穫高を確保するか、この三つに一つである。借金なら何時か返しも出来るであらう。少くとも四五年前のやうな……あれほど農産物の値上りは望めないまでも、多少なりとも景氣が回復すれば、年賦にしてもらつて十ヶ年もすれば皆済しうるであらう。

儀作をはじめ、これが一般村民の、結局の到達點だつた。……………

……年一割から一割五分の利のつくやつをどうにか工面して、それらの全く思ひがけない荒蕪地を拂下げて貰はざるを得なかつた。それにしても一面、儀作はまだその頃年も若く、有りあまるエネルギーが體内にこもつてゐた。で、まだ山仕事の出来る位だつた亡父と話し合つた。

「東京の方では、この寒さにまだ寝るところも出来なくて、バラツクとかちうものへ入つて居るんださうだからよ、それを思ふと五十圓やそこら寄附でもしたつもりになるさ。なアに、たつた五十圓だい、四五年みつちり働けば、それできれいに抜けつちまア……

だが、抜けるどころか、一年ならずして親父には死なれ、待望の米價は、殊に濱口緊縮内閣の出現によつて一俵七圓に下り、繭の如きは一貫二圓といふ大下落で、この地方の重要産物である木炭の如きも四貫俵三十錢、二十五錢になつてしまひ、かて、儀作の副業……農閑期の馬車挽など、賃銀は下るばかりでなく、どんなに探し廻つても仕事の得られない日さへあるやうになつた。

その上彼一家には不幸が連続した。前述のやうに、親父の中風、死に續いて、おふくろが氣がおかしくなつて前の谷川の淵に落ちて半死のまゝ引き上げられたり、次には女房が四番目の

子を産んで以來、まるで青飄箆のやうにふくれてしまひ、すつとぶら／＼のしつとけである。それらの出來事のために唯一の自作地であつた三反の水田も抵當に入つてしまひ、たとへその後、米穀法の施行などによつて十二三圓がらみにまで米價が上つたとはいへ、諸物價……都市

工業の製産品はそれにつれてあくまでも騰貴するので追付く沙汰ではなかつたのだ。

このやうにして儀作は、漸く一人前になつた悴の岩夫を相手に、この數年間何とかして世帯をきり廻しては來たものゝ、さて、かの『荒蕪地』……田んぼの畦や畑境ひの不毛地、税金だけをかり廻しては來たものゝ、さて、一文の利用價値もないやうに思へるその草ッ原を見れば見るほど、考へれば考へるほど、殊に家計の方の苦しみが増大するにつれて、こんどは借金そのものが馬鹿くさいものに思はれてならず、つい利を入れようと思つても入れずにしまひ、まして悴にそのことを話してきかせるのなど阿呆の限りと、そのまゝすつぽかしてしまふ年が多かつた。お蔭でいまでは随分の元利合計になつてゐるであらう。が、いゝ具合に（？）當の古谷さんでは大しきつゝ催促しなかつた。儀作はその昔からの酒造家……この地方きつての財産家である古谷傳兵衛へは若い頃から馬車の挽子として出入りしてゐた關係もあつて、言はゞ特別扱ひを受けて來たのである。

さて、儀作には、いくら鉛筆の芯で半白の頭を搔いてみても突いて見ても、結局、以上のやうなことは書けないと分つた。で、彼は書きかけの部分で少し消して、あのホウは心配するな、こんど財政をやることになつた古谷の若旦那の『東京もン』で大學教育を受けた人物であるから、物分りがいゝに決つてゐる。といふやうなことを書いてそれで打ちきくことにした。

二

時局の波は、この東北の山間の村々にも、ひた／＼と押しよせつゝあつた。

幾つかの谷川がK川と名がついて、山あひの細長い耕地を流れ、それが更にS川に合流しようといふ地點……M盆地の最も肥沃を稱せられる一角に位置する約百二十戸ばかりの部落の、謂はゞこの地方の物資の小集散地であつた中郷にもその波頭は用捨なくやつて來て、殊にこの部落の、それこそ舊幕時代からの經濟中心をなしてゐた古谷傳兵衛など、その大きな波濤を全身で浴びて立つてゐる一つだつた。

傳兵衛の店舗は、周圍五里餘の山腹の村々から、海原にうかぶ一つの白い小さい島のやうに、不規則に散在する田んぼの中の村々の木立を越えて美しく眺められた。棟を並べた酒倉、白亞